

大友府内14

中世大友府内町跡第81次調査報告書

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

大分市教育委員会



写真1 町81次調査区全景写真（左が北）

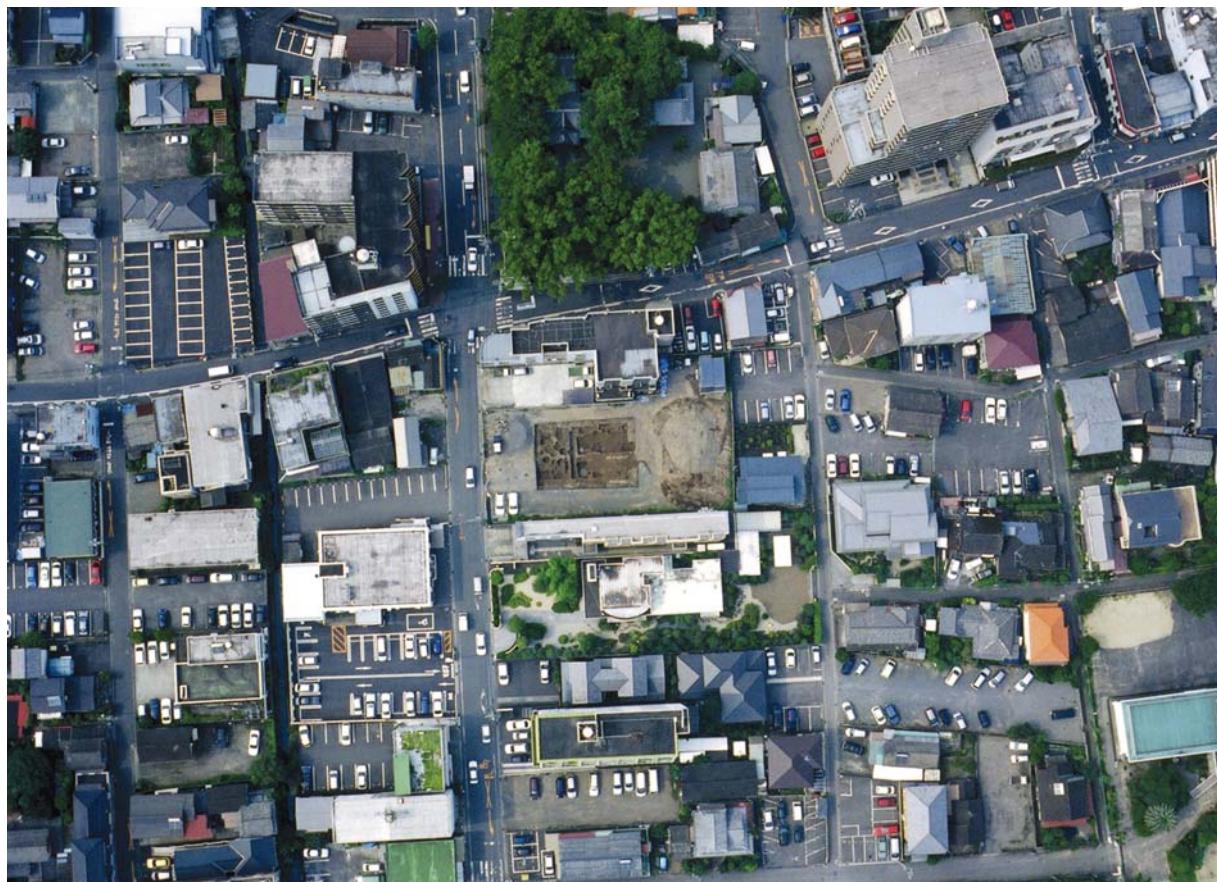


写真2 町81次調査区周辺写真（上が北）



写真3 SF040検出状況（南より・第30図参照）



写真4 SF040東西土層①（北より・第31図参照）



写真5 ST095人骨検出状況（南より・第47図参照）



第1図 町81次調査地点と中世・近世府内町

序 文

本書は、平成19年度に共同住宅建築に伴って記録保存のために実施した中世大友府内町跡第81次調査の発掘調査報告書です。

戦国時代の豊後府内町は大友氏館を中心として発展しましたが、江戸時代になると府内城を中心とする新たな城下町が造られます。本書の調査箇所は中世と近世の町が重なる地点にあたります。

調査地点では、戦国時代から江戸時代にかけて、短期間のうちに大きな建物が取りこわされ、新たに江戸時代の豊後府内城下町を囲む土塁が造られます。江戸時代に城下町が整備されると、城下町東南隅の長浜神社に近接する「塩九升町」となり、大きく転変しましたことが判明しました。

また、今回の調査では、江戸時代の町人が用いた遺物が大量に出土し、井戸跡やトイレ跡などの生活に身近な遺構も数多く発見され、その生活の一端が明らかとなりました。

戦国時代から江戸時代にかけての郷土の歴史を示す一資料として、本書が学術研究はもとより、文化財の保護、さらには教育文化向上の一助となることを切に願います。

最後となりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力をいただいた有限会社新和企画様には、衷心より感謝申し上げます。

平成21年3月31日

大分市教育委員会

教育長 足立一馬

目 次

第1章 序	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1
第2章 調査地点の環境	2
1 歴史的環境	2
2 位置と周辺の環境	5
第3章 調査の報告	6
1 調査の方法	6
2 近世の遺構と遺物	7
(1)近世末	7
(2)近世後期	33
(3)近世初頭	37
3 中世の遺構と出土遺物	40
第4章 まとめ	53

図版目次

巻頭図版

- 写真1 町81次調査区全景写真（左が北）
- 写真2 町81次調査区周辺写真（上が北）
- 写真3 SF040検出状況（南より）
- 写真4 SF040東西土層①（北より）
- 写真5 ST095人骨検出状況（南より）
- 第1図 町81次調査地点と中世・近世府内町

- 第2図 遺跡位置図
- 第3図 周辺遺跡地図 (S=1/25000)
- 第4図 第1面調査区略測図 (S=1/250)
- 第5図 SX001・002・003・004出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第6図 SX005・006・008出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)
- 第7図 SX009出土遺物実測図① (S=1/3)
- 第8図 SX009出土遺物実測図② (S=1/4)
- 第9図 SX009出土遺物実測図③・SK012・SK014 (S=1/3・1/4)
- 第10図 SK014②・SK016出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)
- 第11図 SK016出土遺物実測図② (S=1/3)
- 第12図 SK016出土遺物実測図③ (S=1/4・1/8)
- 第13図 SK017・018・024・031出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第14図 SK033・034出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第15図 SX035・SK036・037・039出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第16図 SX039出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第17図 SX044・045出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第18図 SX046出土遺物実測図① (S=1/3)
- 第19図 SX046出土遺物実測図② (S=1/3)
- 第20図 SX046出土遺物実測図③ (S=1/3)
- 第21図 SX052出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第22図 SX056・067・068出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第23図 SX069・073・078出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第24図 表土出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第25図 SX015・020平面図 (S=1/30)・土層堆積状況模式図
- 第26図 SX015・020出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第27図 調査区南壁土層図 (S=1/80)・SX100土層図 (S=1/30)
- 第28図 近世府内城下町の地割と次調査区
- 第29図 地割・SX015・020・100より復原される町道
- 第30図 SF040平面図 (S=1/80)
- 第31図 SF040土層図(1) (S=1/50)
- 第32図 SF040土層図(2) (S=1/50)
- 第33図 SF040出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第34図 調査区第2面略測図 (S=1/300)
- 第35図 調査区中央サブトレンチ土層図 (S=1/60)
- 第36図 SK025平面図・土層図 (S=1/40)
- 第37図 SK010・SK025・SK076・SK077出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第38図 SD030 (065)・SD070・SD075平面図 (S=1/120)
- 第39図 SD030・065・070出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第40図 調査区東部掘立柱建物及び柱穴群平面図 (S=1/60)
- 第41図 SD050出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第42図 SB060平面図・柱穴土層図 (S=1/60)
- 第43図 SB080平面図・柱穴土層図 (S=1/60)
- 第44図 SB060・SB080出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第45図 SK090平面・土層図 (S=1/40)
- 第46図 SK090出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第47図 ST095平面・見通し図 (S=1/30)
- 第48図 ST095出土遺物実測図 (S=1/2)
- 第49図 調査区完掘状況図 (S=1/150)
- 第50図 調査区遺構変遷図
- 卷末図版
- 写真6 調査区西半部遺構検出状況 (西より)
- 写真7 調査区西半部完掘状況 (東より)
- 写真8 SF040検出状況 (北西より)
- 写真9 SF040東西土層② (北より)
- 写真10 SK025完掘状況 (北東より)
- 写真11 SK025東西土層 (南より)
- 写真12 SK025南北土層 (東より)
- 写真13 ST095人骨検出状況 (西より)
- 写真14 SD030検出状況 調査区東半部 (西より)
- 写真15 調査区中央部サブトレンチ南北壁 (北西より)
- 写真16 SD030土層 (西より)
- 写真17 調査区東部柱穴群・SB060・SB080検出状況 (北より)
- 写真18 SB060a半裁土層 (西より)
- 写真19 SB060d半裁土層 (西より)
- 写真20 SB080b半裁土層 (西より)
- 写真21 SB080e半裁土層 (西より)

- 写真22 SX003 第5図9
写真23 SX009 第7図13
写真24 SX009 第7図14
写真25 SX009 第7図21
写真26 SX009 第8図1・10
写真27 SX009 第8図2
写真28 SX009 第8図8
写真29 SX009 第9図1
写真30 SX014 第9図19
写真31 SK016 第10図12
写真32 SK016 第10図18
写真33 SK016 第11図4
写真34 SK016 第11図5
写真35 SK016 第11図14(表)
写真36 SK016 第11図14(裏)
写真37 SK016 第11図17
写真38 SK016 第12図1
写真39 SK016 第12図2
写真40 SK016 第12図3
写真41 SK016 第12図8
写真42 SK016 第12図9
写真43 SK016 第12図10
写真44 SK016 第12図11
写真45 SK034 第14図3・SK039第15図18
写真46 SK034 第14図7
写真47 SX035 第15図1・2
写真48 SX035 第15図4
写真49 SK037 第15図15
写真50 SX039 第16図4
写真51 SX044 第17図2
写真52 SX046 第18図16・25
写真53 SX046 第18図22
写真54 SX046 第19図1
写真55 SX046 第19図7
写真56 SX046 第19図8
写真57 SX046 第19図9(側面)
写真58 SX046 第19図9(正面)
写真59 SX046 第19図15
写真60 SX046 第20図1
写真61 SX046 第20図1(底面)
写真62 SX052 第21図7
写真63 SX052 第21図7
写真64 SX073 第23図5
写真65 SX078 第23図11・22
写真66 SX015 第26図6
写真67 表 土 第24図1・4
写真68 SF040 第33図1～4・7・8
写真69 SF040 第33図10
写真70 SK025 第37図7
写真71 SK030 第39図1・2・6
写真72 SD050 第41図9・10
写真73 SB060 第44図1～3
写真74 SK090 第46図7・8
写真75 ST095 第48図1～2

例　　言

- 1 本書は、大分市教育委員会が共同住宅建設に伴って実施した中世大友府内町跡第81次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は共同住宅の施主である有限会社新和企画代表亀井剛太郎氏からの委託を受け、平成19年6月11日から平成19年8月22日にかけて大分市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査および整理作業にあたっては、有限会社新和企画からの全面的な協力を得た。
- 4 本書に使用した遺構実測図の作図、写真撮影については、調査担当者である古川 匠、山下朋紀が実施した。遺物写真撮影については、古川が実施した。
- 5 発掘調査における掘削埋戻業務については、株式会社明大工業に委託した。
- 6 調査区空中写真撮影および、調査区第1工区、第2工区の垂直写真合成については、九州航空株式会社に委託した。
- 7 本書で使用した基準点の座標値は国土調査法第II座標系による。中世大友府内町跡の調査では、既往の調査が旧座標で実施されていることから、2001年以降の調査であっても旧座標を用いている。
- 8 本書で使用した方位は全て座標北(G.N.)である。
- 9 遺物の実測・拓影・製図作業は一部を国際航業株式会社に委託し、残りは大分市教育委員会文化財課顕徳町資料室にて実施した。
- 10 本書の編集は調査担当の古川が実施した。
- 11 土器・陶磁器の編年、分類は以下のものを使用した。

森田 勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2

上田秀夫1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2

小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2

乗岡 実2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』

塩地潤一1998「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『博多研究会誌』第6号

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』

中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』

大分県教育庁埋蔵文化財センター2005『中世大友城下町跡出土の土師質土器編年』『豊後府内1』

第1章 序

1 調査に至る経緯

中世大友府内町跡第81次調査地点は、大分県大分市長浜町1丁目に所在する。有限会社新和企画（以下新和企画）が当地点の集合住宅建設計画を立ち上げたが、中世大友府内町跡と近世府内城下町跡の重複する地点に位置する事から、同社と大分市教育委員会文化財課（以下文化財課）の間で本調査の必要性について協議を実施した。その結果、平成19年2月15～16日の2日間で当地点における遺構の有無を確認する試掘調査を実施される事となった。試掘調査の結果、近世府内城下町の外曲輪をはじめとする中近世の遺構が検出されたため、同2月19日に文化財課より新和企画に対して試掘調査結果を報告し、建物部分の本調査が必要である旨を通達した。集合住宅の設計が完成し、調査対象面積が確定した同4月17日に新和企画より文化財保護法第93条の規定による発掘の届出が提出された。同5月7日に文化財調査受託の協定、および平成19年度の文化財調査受託契約を双方で締結した。そして、同6月11日に文化財課が中世大友府内町跡第81次発掘調査に着手する事となつた。

2 調査組織

〈平成19年度〉

教育長 秦 政博（～5月） 足立 一馬（6月～）
文化財課長 玉永 光洋 参事 渋谷 建治
文化財係長 塔鼻 光司
専門員 坪根 伸也 池邊 千太郎
主事 古川 匠
嘱託 山下 朋紀
臨時 上野 美奈

〈平成20年度〉 整理・報告書刊行

教育長 足立 一馬
教育総務部次長兼文化財課長 玉永 光洋
参事 岩田 祐治
課長補佐兼文化財係長 塔鼻 光司
専門員 坪根 伸也 池邊 千太郎
主事 古川 匠

第2章 調査地点の環境

1 歴史的環境

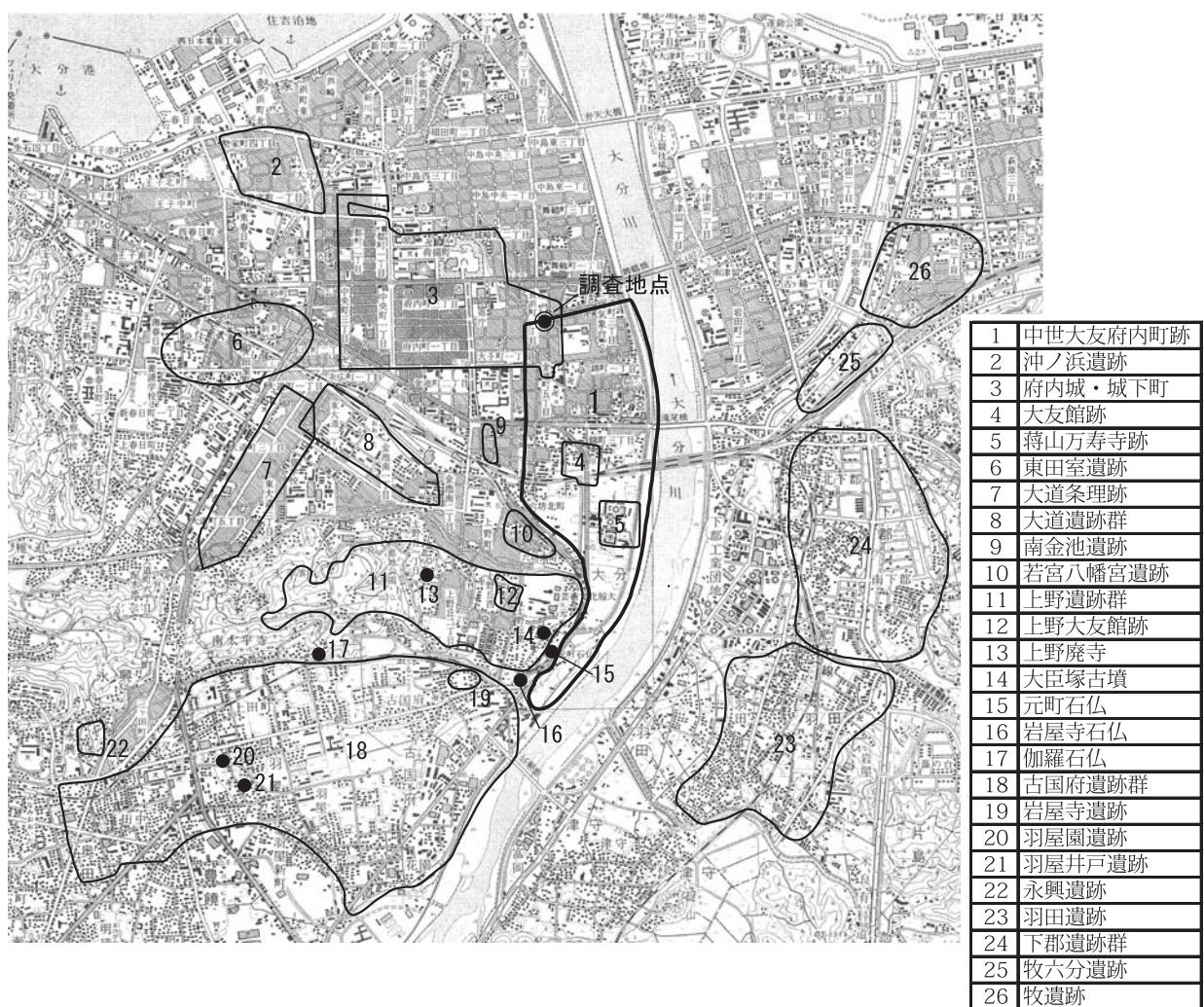
別府湾南東岸の大分平野には、東に大野川、西に大分川が流入し扇状地と三角州が形成されている。低地のみでなく、台地、丘陵とそれらを構成する鮮新世から第四紀の地層が発達しており、平野全体に段丘が分布している。中世大友府内町跡、府内城・城下町の位置する大分川下流は多くの遺跡が存在し、豊後国を中心として歴史上重要な位置を占めてきた。

(旧石器・縄文時代)

当該時期の遺構については未確認であるが、遺物が少なからず出土している。城南遺跡では、縄文時代早期から晩期の土器と石器が出土している。また、縄文土器破片が中世大友府内町跡、大道遺跡群などで出土している。



第2図 遺跡位置図



第3図 周辺遺跡地図 (S=1/25,000)

(弥生時代)

若宮八幡宮遺跡では大分川の旧河道が調査されており、ドングリピットが検出され、朱塗木製品を含む多くの有機遺物が出土している。東田室遺跡では弥生時代前期後葉の貯蔵穴群が検出されている。前期後葉頃に遺構の形成が確認されるようになる下郡遺跡群では、集落が規模、構造を変化させながら存続する。貯蔵穴、竪穴建物等の、数多くの遺構が検出され、大量の遺物が出土している。後期には集落の規模が縮小するが、環濠が造られるようになる。

(古墳時代)

東大道遺跡では、古墳時代前期の土器一括廃棄土坑や井戸跡、集落を巡る環濠等が検出されており、前期初頭から前期後半にかけての多くの古式土師器が出土している。東田室遺跡では多数の前期後半から中期にかけての住居跡や、前期の環濠が検出されている。出土遺物には布留系、山陰系など他地域の特徴を有する土器が含まれている。また、中期前半の住居跡からはヘラ描きの絵画土器が出土している。若宮八幡宮遺跡では5世紀末から6世紀代にかけての竪穴建物跡が14基検出され、玉製品製作関連遺構が含まれている。前期古墳では三角縁神獸鏡の出土が伝えられる亀甲古墳が存在する。大臣塚古墳は中期の前方後円墳である。墳丘は大幅な改変を受けているが、円筒埴輪が表採されており、中期中葉頃に位置づけられる。永興千人塚古墳は中期後半から末にかけての前方後円墳で、大分平野部では最後の前方後円墳である。弘法穴古墳は大分平野では数少ない横穴式石室墳である。後期中葉から後葉頃に比定される。古宮古墳は終末期古墳で、九州で唯一の畿内系石室墳である。立地の選定には風水思想の影響が想定されている。

(古代)

南金池遺跡では8世紀末から9世紀初頭の井戸跡や、多量の製塩土器が出土した土坑が検出されている。上野町遺跡では8世紀後半から9世紀後半の遺物群が出土し、長沙竈系黄釉褐彩水注片が出土している。古国府遺跡群では、羽屋園・羽屋井戸遺跡で7世紀後半から8世紀初頭の掘立柱建物群が検出されている。上野丘陵における上野竜王畠遺跡では、9世紀代の築地塀に伴うと見られる溝や掘立柱建物群等が認められ、上野廃寺では8世紀～9世紀代に比定される基壇跡と基壇上に築かれた礎石建物跡が検出され、百濟系軒丸瓦や豊後国分寺と同范瓦が出土している。大道遺跡群では第23次調査地点で8世紀末から9世紀前半の掘立柱建物跡14棟が検出されている。隣接する第5次調査地点では、奈良三彩陶器壺が出土している。

(中世)

守護大友氏が13世紀中頃に入部して以来、守護所がこの地域におかれた事が想定されている。この時期の遺構としては、古国府地区で池状遺構等を有する大規模な遺跡が調査されている。15世紀から16世紀代には、大友氏館跡や、大友氏の菩提寺で十刹に名を連ねる旧万寿寺跡を含む、中世大友城下町が大いに栄える。「府内古絵図」が忠実に描写した国際都市「府内」は、大分県教委、市教委による調査が現在も全国有数の規模で進行中であり、遺存率の極めて高い中世都市の調査成果は、今後とも中世史に貴重な資料を提供し続けるものと考えられる。本調査も、中世都市の景観復原にあたって示唆的なデータが提供できるであろう。

(近世)

文禄2(1593)年に大友氏は豊臣秀吉により豊後から除国される。慶長2(1597)年に府内に入部した福原直孝は、府内城の築城を開始する。慶長6(1601)年に竹中重利が入部し、府内城及び城下町の建設を再開し、慶長13(1608)年頃までに完成させた。竹中氏の改易を受けて、寛永十一(1634)年、日根野吉明が入封する。府内城・城下町の再整備を行ったほか、初瀬井路をはじめ、用水路の開削・整備を精力的に行い、新田開発を進めた。日根野氏の断絶後、万治元年(1658)、松平忠明が入封して大給松平氏の府内藩が成立し、十二代を経て明治を迎えるに至った。

大分市教育委員会1999『城南遺跡 大分市大字永興所在 第2次発掘調査報告書 第3次発掘調査報告書（確認調査）』

大分市教育委員会2002『城南遺跡第3次調査 永興千人塚古墳発掘調査報告書』

大分市教育委員会2008『大道遺跡群1』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 大分市埋蔵文化財調査報告書 第79集

大分県教育庁埋蔵文化財センター2008『若宮八幡宮遺跡 東横前a、b地区 宮ノ前a～d地区』庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第25集

大分市教育委員会2005『東田室遺跡2』都市計画道路田室町春日線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第55集

大分市教育委員会『下郡遺跡群』Ⅲ～V 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第61・68・76集

大分市教育委員会2008『大道遺跡群1』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 大分市埋蔵文化財調査報告書 第79集

大分市教育委員会2007『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.18 2006年度

大分市教育委員会2005『東田室遺跡2』都市計画道路田室町春日線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第55集

大分県教育庁埋蔵文化財センター2008『東田室遺跡』大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第27集

大分市教育委員会2006『若宮八幡宮遺跡』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第67集

大分市教育委員会2002『城南遺跡第3次調査 永興千人塚古墳発掘調査報告書』

大分市教育委員会2007『大友府内11』中世大友府内町跡第74次調査報告 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第74集

大分市教育委員会1996『国指定史跡古宮古墳保存修理事業報告書』

大分市教育委員会2006『南金池遺跡』大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 大分市埋蔵文化財調査報告書第64集

大分県教育委員会2004『上野町遺跡・顯徳寺遺跡一大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査発掘調査報告書1』大分県文化財調査報告書第164輯

大分市教育委員会1999「上野遺跡群（上野廃寺跡）」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.10 1998年度』

大分市教育委員会2005「12 上野遺跡群（上野廃寺跡2次調査）」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.16 2004年度』

讃岐和夫1985「豊後国府推定地周辺の発掘調査—大分市古国府・羽屋地区の調査から—」『大分県地方史』第117号

2 位置と周辺の環境

調査地点は戦国時代の「中世大友府内町」と江戸時代の「府内城・城下町」の重複する地点にあたる。戦国時代に大友氏の膝下で国際都市として繁栄した「中世大友府内町」であったが、文禄二年（1593）に大友吉統が朝鮮出兵での失態を理由として除国されると、豊後国は豊臣秀吉の直轄地（蔵入地）となり、早川長敏が計六万国で入封した。慶長二年（1597）、豊後白杵から福原直高が計十二万石で入封する。中世府内町北方の別府湾に面する「荷落」に新たな城を築き、地名を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と称した。慶長五年（1600）、関ヶ原合戦の後、豊後高田から竹中重利が三万五千石で入封した。竹中氏は築城事業を再開し、慶長七年（1602）年には城郭中心部が完成する。慶長十年（1605）には城下町がほぼ完成し、城下町を囲繞する堀を築き、城名を「府内城」、城下町を「府内」と改めた。さらに、慶長十二年（1607）、城下の東に塩九升口、西に笠和口、北に堀川口をもうけ、翌年には舟入（京泊）が造られ、城下町が完成する。この新しい城下町に移転させられ、大友氏の整備した「中世大友府内町」は終焉を迎えた。

戦国時代末期の府内町を描いた府内古絵図を下に、現在に残る地割りより作成された「戦国時代の府内復原想定図」は、これまでの発掘調査の成果とほぼ完全に符合しており、正確性は極めて高い。本調査地点の位置をこの想定図と照合してみると、調査地点は「中世大友府内町」の北西に位置した舟入の東にほぼ接するものと考えられる。旧町名としては、最も北側の東西道路と、4本の南北道路のうち最も西側の道路の交差点付近に「中之町」が存在する（第1図）。本調査地点は、この交差点より約80m北に位置しており、かなりの距離を隔てている。

これまでの「中世大友府内町」の発掘調査は、大友氏館跡、旧万寿寺跡の確認調査を含め、現在の県道大分・白杵線以南に集中する傾向にあり、平成21年3月現在で、「中世大友府内町」の北半部にはほとんど発掘調査が及んでいない。「中世大友府内町」の北西端付近に位置する本調査地点周辺の既往の調査は、南西に約200mを隔てた府内城・城下町跡第12次調査のみである。かなりの距離を隔てるとはいえ、この地点も本調査地点と同様に「中世大友府内町跡」と「府内城・城下町跡」の重複する範囲内に位置しており、検出された遺構にも共通点が多い。

「府内城・城下町」は東西十町、南北九町の規模を有し、北東は海に面する。物資の集散のために水上交通の便の確保を目的とした選地であった。城下町には三堀（内・中・外堀）が巡り、さらに土塁が巡っていた。城下町には三口（笠和口・塩九升口・堀川口）が開設され、門内には四十八町が存在し、外町として「東新町」「塩九升町」「西新町」「勢家町」の四町が存在した。本調査地点は、この外町のうち、城下町の東南に位置した「塩九升町」の中に位置する。「中世大友府内町」の舟入は、「府内城・城下町」でも踏襲され、外堀の一部として活用される。本調査区は「中世府内町」の北西隅であると共に、「近世府内城下町」の南東隅にもあたる。

「府内城・城下町」は近世においても豊後国内で最大の城下町であった。貝原益軒は（1694）に府内を訪れた際、「町も頗るひろし。万の売り物備れり。」と評した。当初、府内城・城下町が十二万石の城下町として整備され、また、「中世大友府内町」の繁栄を下敷きとして新たに整備された町であったため、城下は栄えていた。しかしながら、豊後国内諸藩が城下町経営に注力するようになると、府内の地位は相対的に低下した。また、貝原益軒の来る三年前にはすでに城下町へ入る人が減り、城下がさびれてきていた。府内の名産品であった七島筵が「門外脇々」で取引され、城下町商業と村方や近郊での商業他対立していた。寛永三年の大火によって、府内城の本丸天守、東の丸、西の丸の櫓、里郷蔵、中郷蔵、七十一軒の侍屋敷が焼失し、城下町では「塩九升町」を含む四十二町が焼け、千七十九軒が焼失した。経済状況の悪化、度重なる災害によって府内藩の財政は窮乏し、領域全体の人口は文化二年（1805）段階で、正徳二年（1712）段階の78.7%まで減少している。城下町内の人口も81.3%まで減少した。

「塩九升口」は府内城下の東の窓口である。竹田の岡城下へ向かう「直入郡岡城路」、白杵城下へ向かう「海

海部郡臼杵城路」、「海部郡佐賀関路」の三路線が延びていた。「塩九升町」は「戦国時代の府内復原想定図」に記載されていないが、府内古絵図A類、B類には描かれている。ただし、本調査地点が舟入の東に隣接するのに相対して、戦国期の塩九升町は舟入の西隣に立地しており、北には長浜宮、南には臼杵（旧杵）悪六屋敷が描かれている。貞享元年（1684）の「万覚」によれば、長さ南北158間、前置きが南3.5間、北4.5間、入は北は15間、南は18間の規模である。元禄11年（1698）には、町内に府内新田と塩九升新田があった。同年8月に、帶曲輪東北方の潮入部分の新田開発の申請がなされた。塩九升町の鎮守である長浜神社は、応永十三年（1406）に創始され、戦国時代の塩九升町の北端に祀られていたが、文禄五年（1596）の津波のために神宮寺浦に流れ着いてしまう。春日神社境内に安置された後、延宝九年（1681）に近世の塩九升町の北端となる現在地に移転する。本調査区は長浜神社境内から南に約30mの地点に位置している。塩九升町は、明治22年以降は大分町大字大分の字名・通称地名として存続したが、昭和39年の新住居表示直前に大分市長浜町1丁目・金池町5丁目の一部となつたが、「塩九升」の地名は俗名として残っている。

大分市史編纂委員会1987『大分市史』中巻

大分市史編纂委員会1987『大分市史』下巻

木村幾多郎2000「府内古図再考」『Funai府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』IX 大分市歴史資料館

第3章 調査の報告

1 調査の方法

町81次調査の着手にあたって、当初、調査費用を設計するため、遺構密度と深度を導出する必要が生じた。このため、調査区西端部と東端部の2ヶ所で重機による試掘調査を実施した。このうち、東端部に設定した試掘地点では事前の想定通り慶長期の土塁を検出したが、さらに下位の遺構の有無を確認せねばならず、さらに深く掘削した。このため、遺構の検証にとって全く目的的ではないトレーナーとして試掘調査区が残ってしまう事となつた。試掘の方法を含めて、大きな反省材料である。今後の調査に活かしていきたい。

本調査の施行にあたっては、調査範囲が敷地内の大部分を占める事から、廃土置場を担保するため、調査区を2分割し、調査区西半部（第1工区）を先に調査、記録し、埋め戻して反転し、廃土置場としていた東半部（第2工区）の調査に着手する、という段取りで調査を実施した。従って、写真1は、両工区を合成した写真である。ただし、本書では混乱を避けるため、第1、第2工区を合わせて单一の調査区として報告する。

本調査の施行にあたって、当初の想定以上に近世の堆積層、遺構群が中世の遺構と複雑に重複し、中世の遺構が平面的に検出しづらい事が判明した。工期に間に合わせるために効率的な調査の施行が必要となつた事から、調査区のほぼ中央部に、調査区を南北に横断するトレーナーを設定した。遺構の分布、重複状況を多角的に検証するためである。このトレーナーは効果的に機能し、その後の調査を円滑に実施する事ができたが、トレーナー設置箇所に存在した遺構の記録は断念せざるをえなかつた。これも反省材料とし、今後はより効率的かつ記録精度を低下せずに済む調査手法を検討していきたい。

2 近世の遺構と遺物

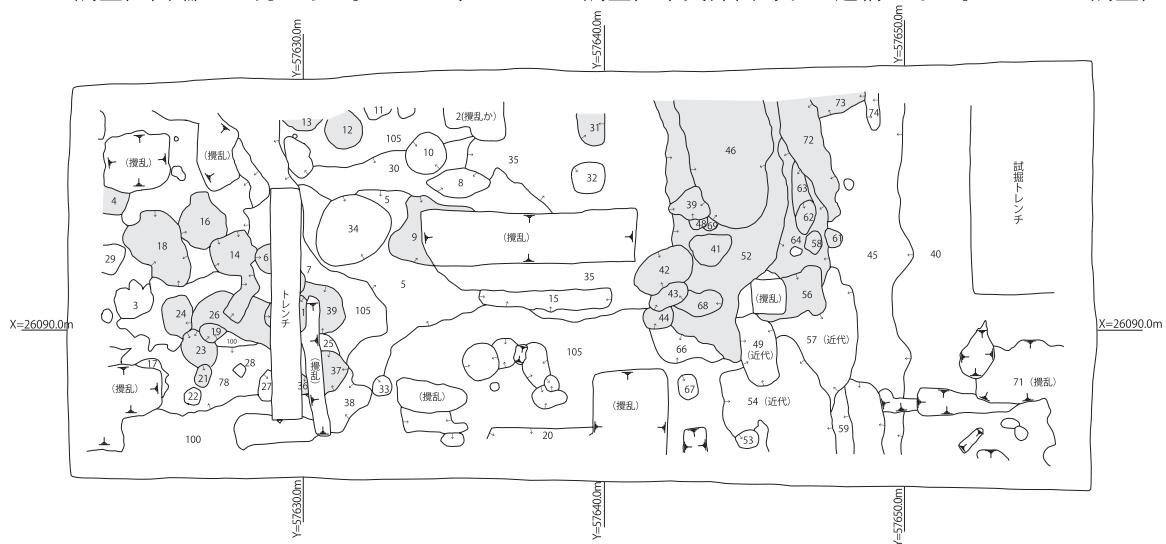
第1面では、近世、近代の遺構面が検出された。遺構の検出面は調査区の西半部と東半部とで異なる。調査区東半部では近世の堆積層(SX045)が堆積しており、この面で近世後期から近現代の遺構が検出された。また、調査区東部の約4分の1で、慶長期に造営された土壙(SF040)がSX045に一部被覆された状態で検出された。対して、西半部では全面を均一な厚みで被覆するような近世の堆積層は観察されず、自然堆積と考えられる黄褐色粘質土層(SX105)の面で、中世および、近世から近現代に帰属する遺構が同一面で検出された。

遺構密度は調査区の西側約四分の一で極めて密であり、不定形な性格不明遺構、土坑、井戸が数多く検出された。土坑の遺物が廃棄状況を示し、埋土の状況が短時間で埋められた事を想起させるため、「塩九升町」の町家に伴う廃棄土坑群か、もしくは近世末期から近世初頭にかけて廃棄空間に変化したものか、と考えられる。また、中央部東寄りでも遺構の密度が高くなるが、調査区南よりで検出された大型遺構の、SX049、053、054、057は、遺構の重複関係より最も古くなるSX057から型紙刷りの染付椀等の近代遺物が多量に出土した事から、近現代の攪乱と想定される。また、調査区北端で検出されたSX046からも、混入の可能性があるが、少量ながら近代の遺物が出土している。従って、調査区東よりの地点に廃棄土坑が形成されたのは主に近代以降で、近世段階には土坑が散在するような状況であった、と推定される。SF040の上面には近現代の攪乱のみが検出され、近世に形成された遺構は検出されなかった。土壙(SF040)の機能停止後、堆積層(SX045)の被覆によって平坦地が形成されるが、江戸時代を通じてSF040の跡地が積極的に活用される事はなかったようである。

第一面に展開する遺構の大多数は、19世紀中頃から近代を含む時期に形成された遺構である。調査区西寄りの廃棄土坑の一部が明らかにこの年代に帰属する。また、調査区中央から東寄りで検出された土坑、性格不明遺構のほぼすべてがこの年代に比定される。出土遺物のみの年代比定からはより古い時期と評価される遺構が複数含まれる。しかし、遺構の重複関係を検証すると、19世紀中頃の遺物が出土する遺構に、多くの遺構が重複して形成されるため、調査区中央部から東部に展開する遺構の多くが19世紀中頃かそれ以降と評価できる。

(1) 近世末

出土遺物の年代と切り合い関係から導出される、この時期の遺構としては、SX001・SK004・SK006・SK007・SX009・SK012・SK013・SK014・SK016・SX017・SX018・SK019・SK021・SK023・SK024・SK026・SK031・SK037・SK039・SK041・SK042・SK043・SK044・SX046・SK048・SX052・SX056・SK058・SK061・SK062・SK063・SX064・SK068・SX072・SX073が挙げられる。SK001は、調査区西寄りの遺構である。土師質甕が正位置で土坑底に据えられた状態で検出された事から、埋甕式便槽遺構と判断した。SK004は調査区西端の土坑である。SK006、SK007は調査区中央部西寄りの遺構である。SX009は調査区中央



第4図 第1面調査区略測図 (S=1/250) ※網掛けは近世末の遺構

部の不整形遺構である。半分以上が攪乱で破壊されている。SK012・SK013は調査区西寄り北端で検出された円形の土坑である。SK014は調査区西寄り地点で検出された不定形の土坑である。出土遺物は若干古相を呈すが、遺構の重複関係より、SK016の後に形成された遺構である事が判明している。SK016は調査区西寄り地点の土坑である。SX017は調査区南西部隅の不定形遺構である。SX018は土師質甕の底部が正位置で据えられた状況で検出された。SX001と同じく、埋甕式便槽遺構と考えられる。出土遺物で、積極的にこの時期に比定されるものはないが、SK016より新しく形成されている。SK019、021、023、024、SX026は調査区西よりの地点に重複する土坑群である。SK019、021、023、024、SX026は調査区に西寄りの地点に重複する土坑群である。SK031は、調査区中央部北端で検出された土坑である。SK037、039は、調査区中央部の不定形土坑である。SK042は調査区中央部の大形土坑である。規模に反して遺物出土量は極めて少ない。SK043は調査区中央部の東西方向の長土坑である。SK044は調査区中央部の土坑である。SX046は調査区中央部北端で検出された大形の長土坑状遺構である。単一の大型遺構と現場では評価したが、複数の廃棄土坑が密接に重複している可能性も考慮される。出土遺物には染付端反碗と型紙刷の染付碗が含まれている。単一遺構であれば近代の攪乱であるが、複数遺構であれば、近世末から近代に形成された廃棄土坑群と評価できる。SK048は調査区中央部の小土坑である。SX052は、調査区中央部から東へ幅約4mに亘って展開する浅い不定形遺構で、遺物包含層と推定される。陶器植木鉢等が出土している事から、帰属年代は19世紀中頃と判断される。SX056は調査区中央部東寄りの東西方向の長土坑。出土遺物は数多いが、切り合い状況から、この年代に比定される。SK058・SK061・SK062・SX063は、調査区東寄り地点の土坑である。SX064は遺物包含層である。SK068は調査区中央部の東西方向長土坑である。19世紀中頃に比定される遺物が出土している。切り合い状況を見ると、SK068よりも新しく形成される遺構が複数存在する。SX072は、SX046の東に隣接する、南北方向に長い不定形の遺構である。SX073はSX072よりも古い。肥前系染付端反碗が出土しており、19世紀中頃に位置付けられる。

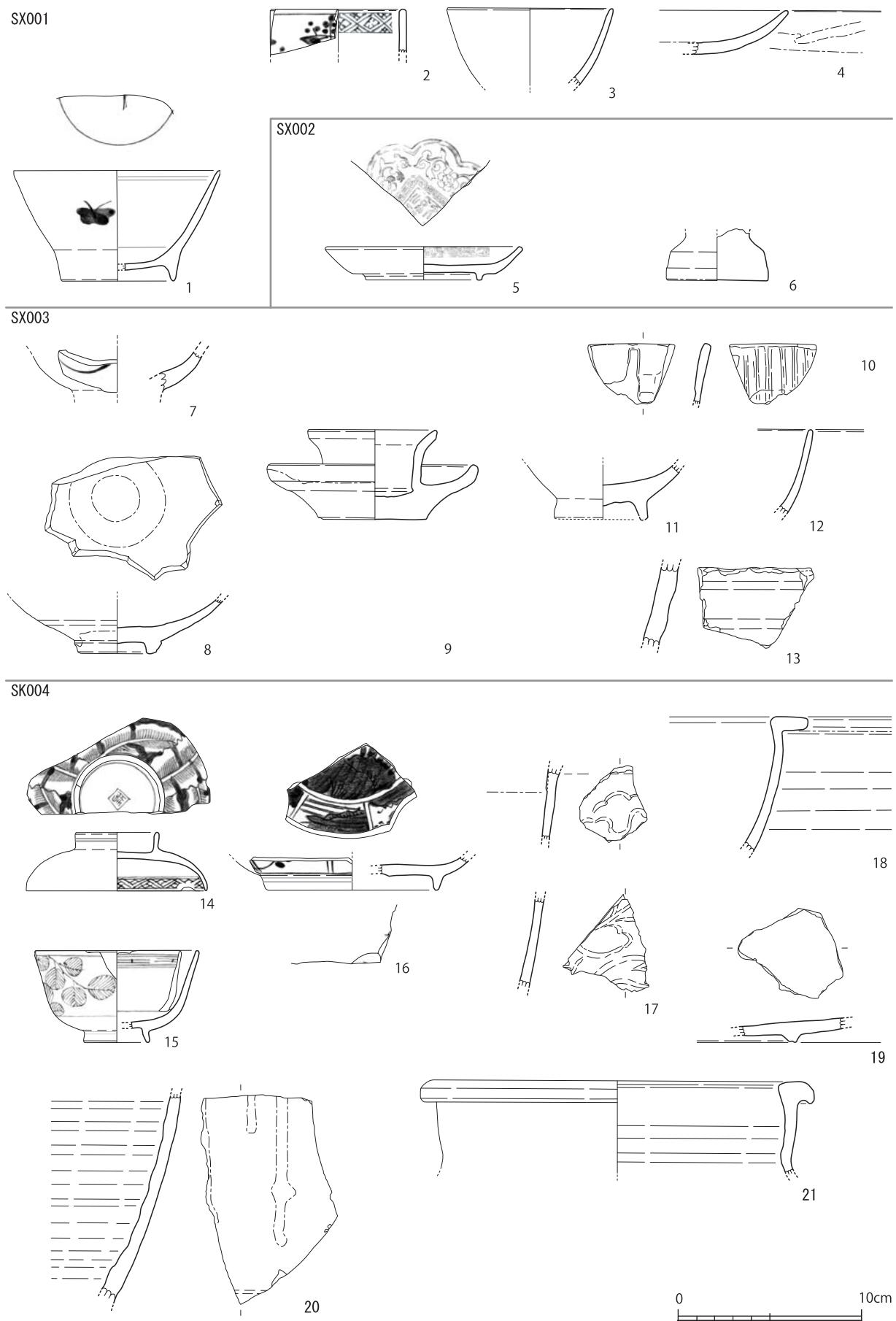
この他に、帰属年代が不確定ではあるがこの時期に帰属する可能性のある近世遺構の出土遺物を含め、以下、遺構番号順に本節で報告する。

第5図

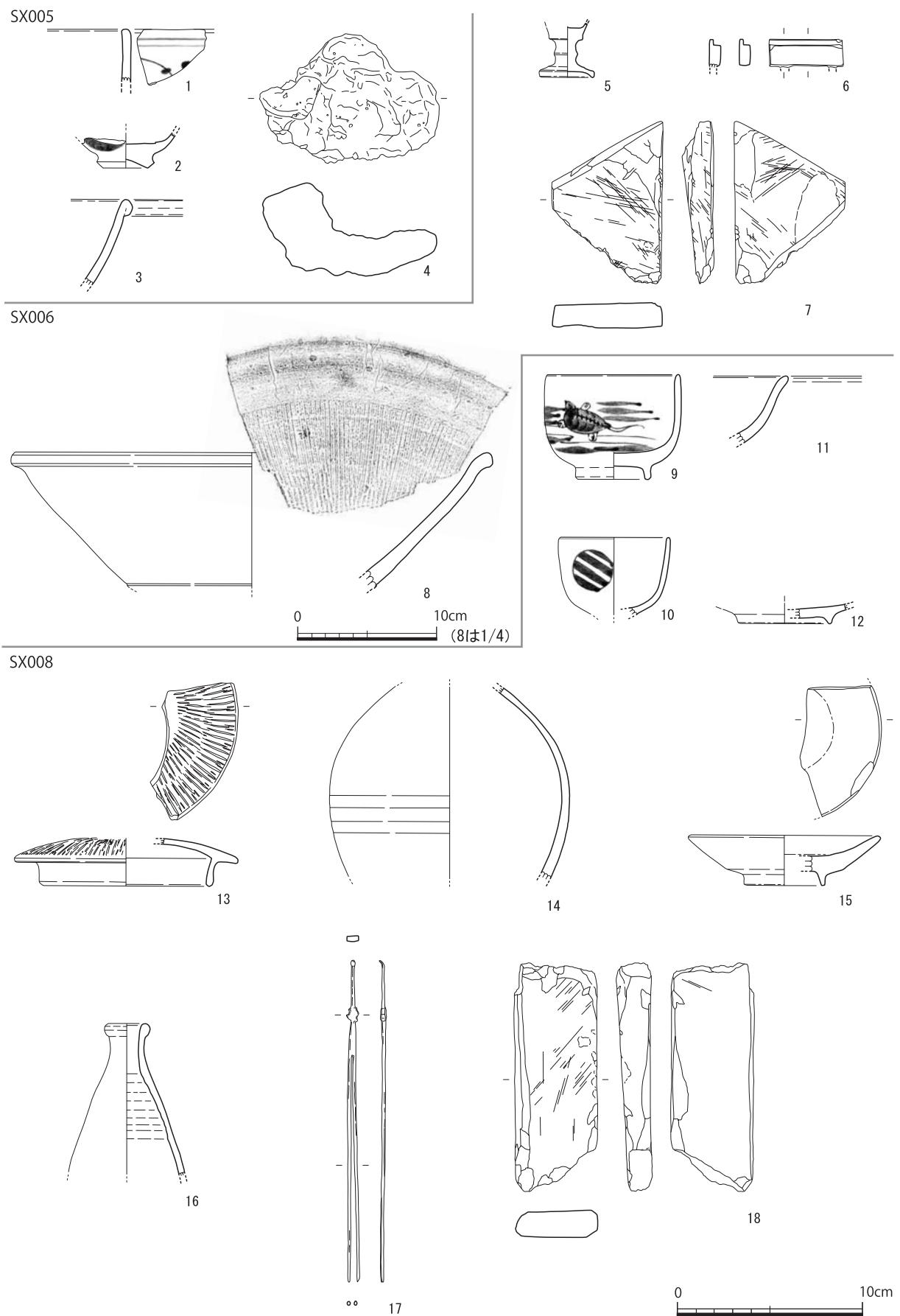
1～4はSX001出土遺物である。1は染付広東碗である。外面に蝶、内面に界線が絵付けされる。2は染付筒形碗である。外面に草花、内面に四方襷文。3は陶器碗である。瀬戸美濃産か。4は陶器皿で、内面見込み部が釉剥である。5、6はSX002出土遺物である。5は染付皿である。瀬戸美濃産か。型紙刷りで絵付けされる。6は陶器台座か。7～13はSX003出土遺物である。7は陶胎染付碗である。8は陶器皿である。9は陶器灯火具である。底径部糸切りで、鉄釉が施される。外面下半部は露胎である。10は白磁だが器種不明。11、12は陶器碗である。13は陶器鉢か。外面に青色釉が施される。14～21はSK004出土遺物である。14は染付蓋である。15は染付端反碗である。口鋸で、外に葉、内面に幾何学文が施される。16は染付皿である。判読不明であるが、高台内に焼き継ぎ文字が観察される。17は青磁片である。施釉前に外面に文様が陰刻される。植木鉢か。18は陶器鉢、19は瓦質土器だが器種不明、20は陶器瓶、21は陶器甕または壺である。

第6図

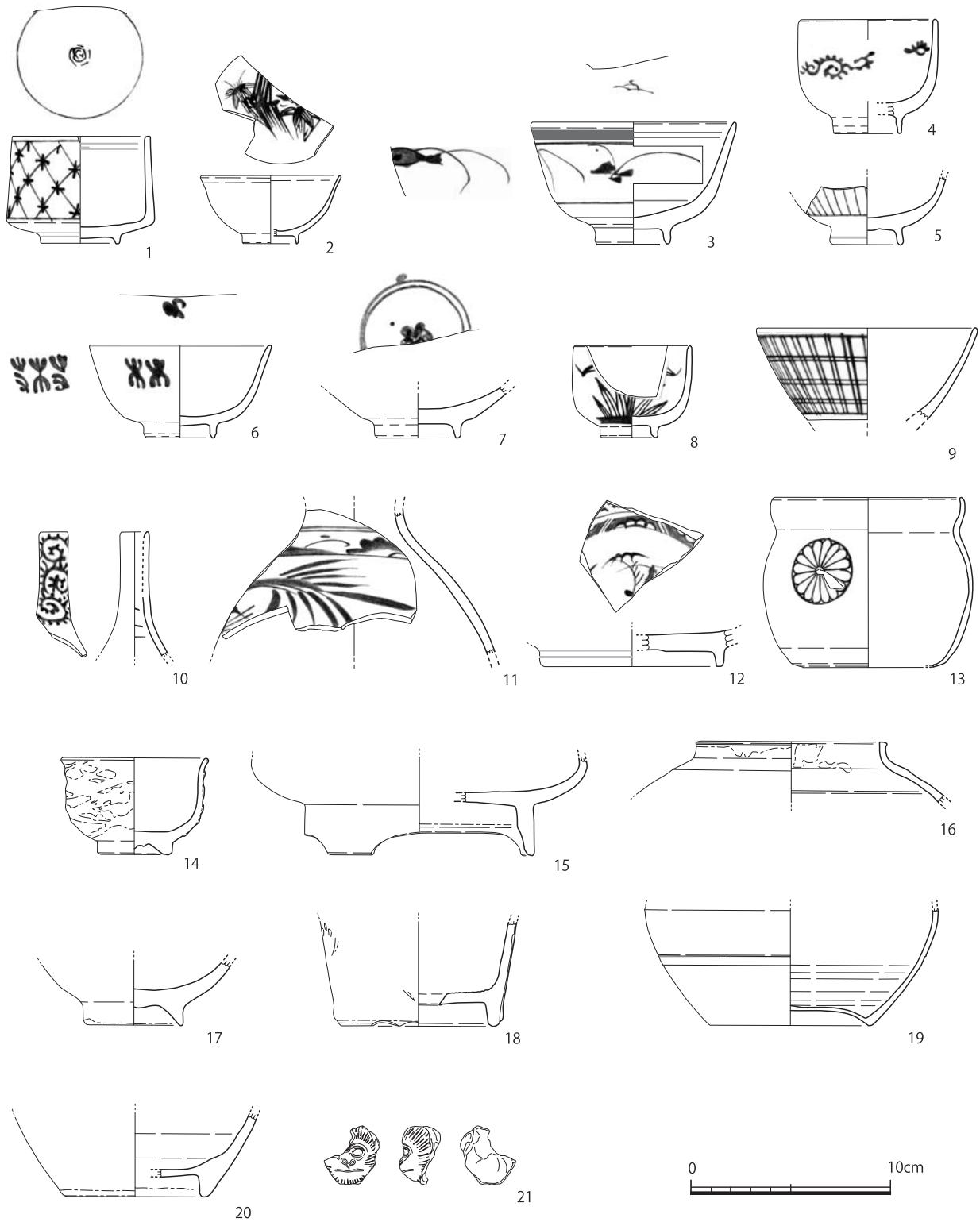
1～4はSX005出土遺物である。1は陶胎染付碗である。2は染付小杯である。3は陶器鉢か。4は椀形鉄滓である。5～8はSX006出土遺物である。5は白磁仏飯器、6は陶器不明器種。7は砥石破片である。流紋岩もしくは頁岩である。8は陶器擂鉢である。9～18はSX008出土遺物である。9は染付丸椀、10は口鋸の染付小杯である。11は陶器椀である。信楽産か。12は青磁椀か。13は関西系陶器土瓶蓋である。飛びカンナを施す。14は白磁瓶、15は白磁皿、16は陶器瓶である。17は青銅製かんざしである。18は結晶片岩製砥石である。



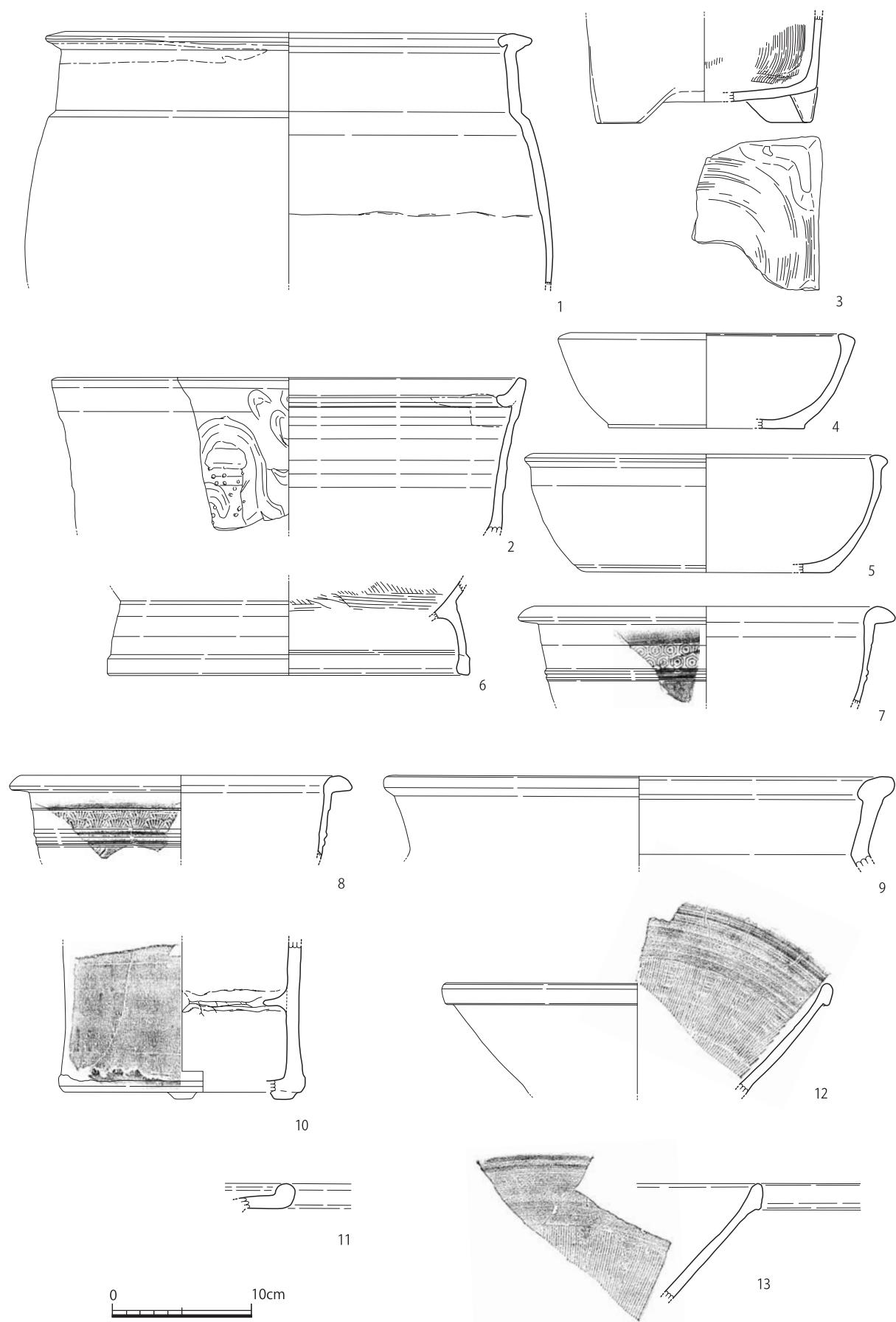
第5図 SX001・002・003・004出土遺物実測図 (S=1/3)



第6図 SX005・006・008出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

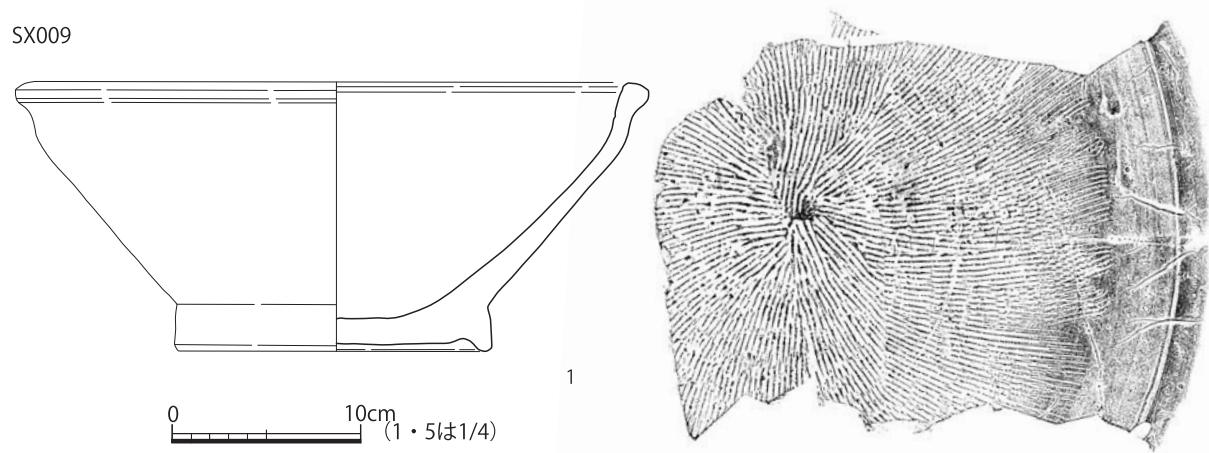


第7図 SX009出土遺物実測図① (S=1/3)

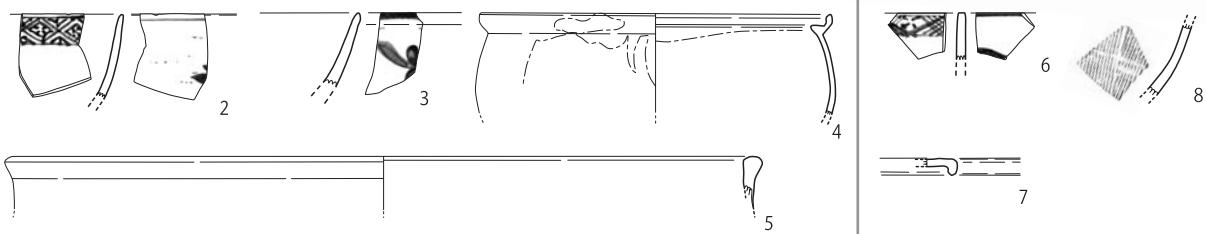


第8図 SX009出土遺物実測図② (S=1/4)

SX009

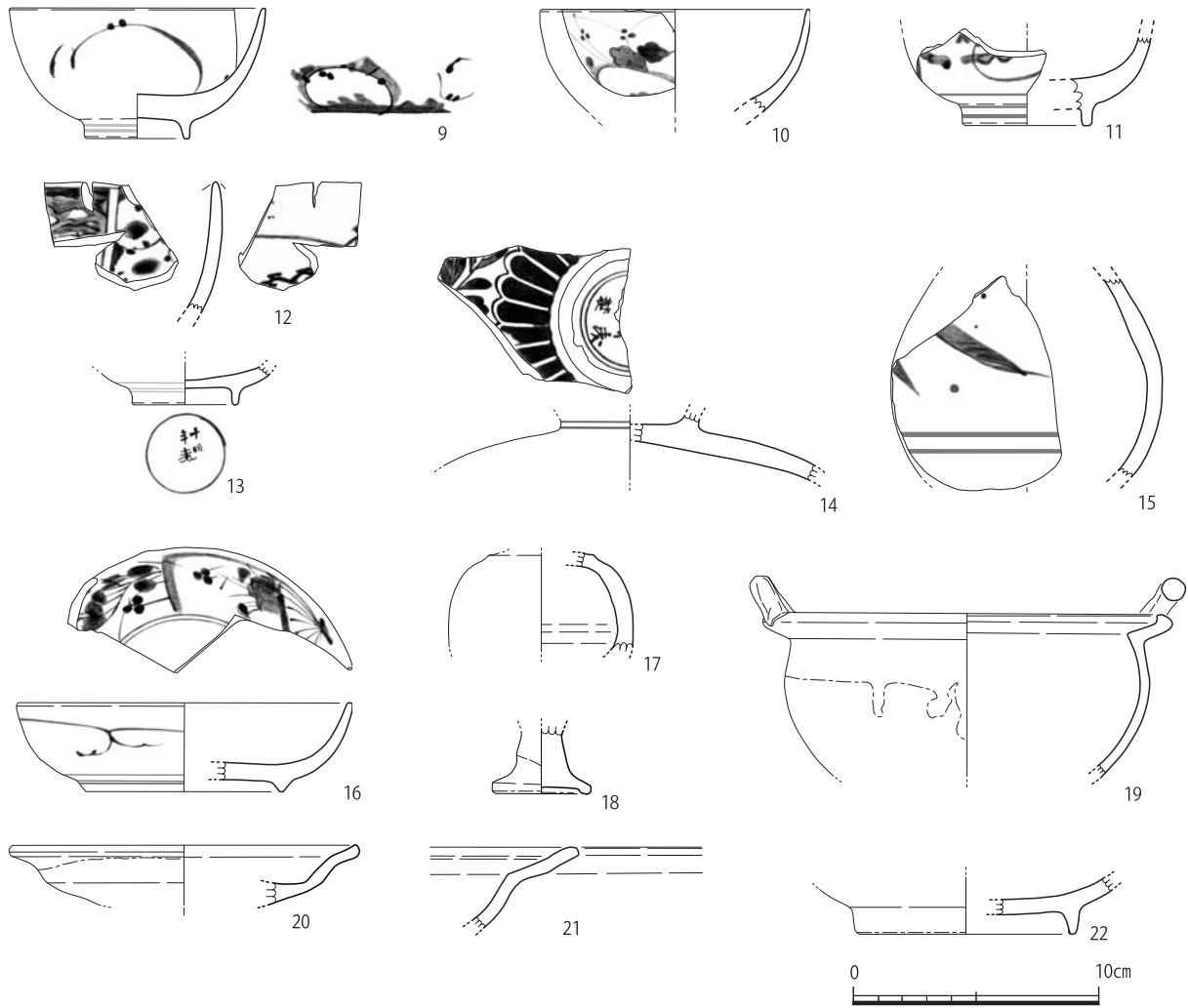


SK012

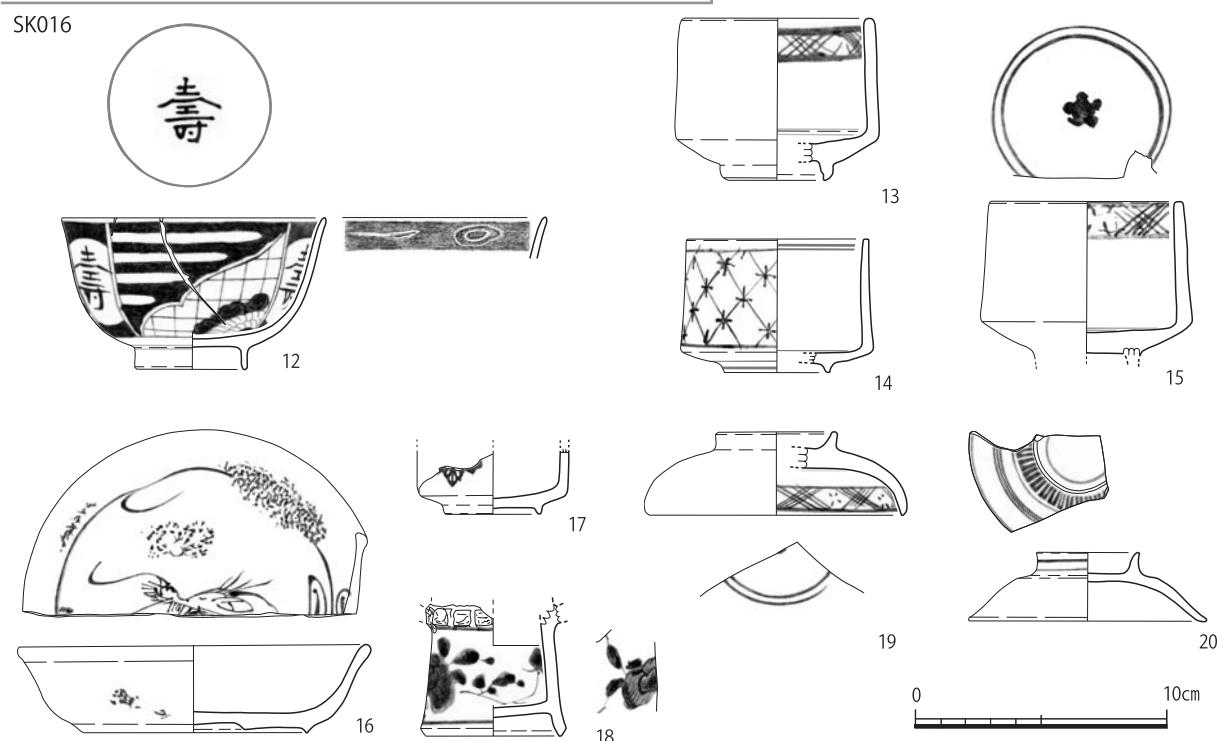
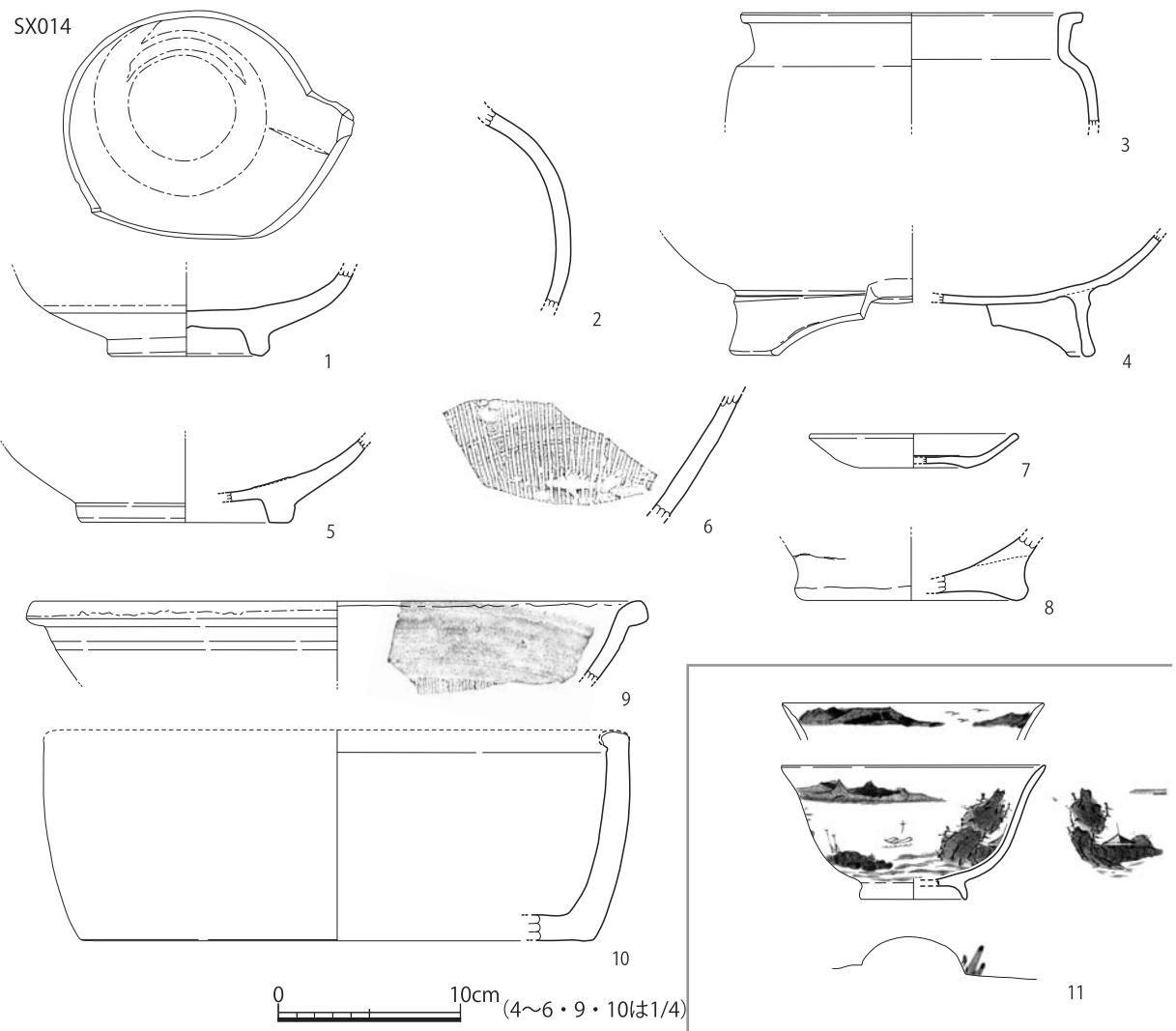


SK013

SX014



第9図 SX009出土遺物実測図③・SK012・SX014 (S=1/3・1/4)



第10図 SX014②・SK016出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

第7図

SX009出土遺物である。1～6は染付椀である。1～5は肥前系であるが、6は瀬戸美濃産。6は外面に隸字体文様、内面に不明文様が施される、口鋸の端反椀である。7は青磁染付椀である。8は染付小坏、9は染付椀である。10～11は染付瓶である。12は染付皿で、高台蛇目はぎ。13は関西系陶器水差しである。口クロ成形で、外面に菊花文の鉄絵が描かれる。14は陶器椀。内面施釉で、外面に鉄釉、白色釉の「いっちゃんがけ」が施される。15は陶器鉢、16は陶器土瓶で、青緑色釉が施される。17は陶器椀、18は青磁植木鉢である。施釉前に文様が陰刻される。第5図17と近似する資料である。19は陶器土瓶、20は陶器瓶。21は土人形である。猿の頭部を型押成形している。

第8図

SX009出土遺物である。1は、「ハンズ一甕」と称される肥前系陶器甕である。2は、瀬戸美濃産陶器水甕。外面文様を型押し成形する。3は瓦質土器方形火鉢である。4～5は瓦質土器鉢。6は瓦質土器焜炉台部か。7は瓦質土器火鉢か。8は瓦質土器火鉢。9は瓦質土器甕である。10は瓦質土器火鉢、11は瓦質土器甕である。12、13は陶器擂鉢である。

第9図

1のみSX009出土遺物である。1は陶器擂鉢。2～5はSK012出土遺物である。2、3は染付椀である。4は関西系陶器土瓶、5は瓦質土器不明器種である。6～8はSK013出土遺物である。6は染付筒形椀である。7は陶器蓋か。8は陶器擂鉢である。9～22はSK014出土遺物である。9～11は染付椀である。12は染付輪花皿もしくは鉢である。13は染付椀である。14は染付蓋、15は染付瓶、16は染付皿、17は青磁瓶である。18は白磁仏飯器、19は肥前系陶器鍋である。20は陶器蓋もしくは皿である。21は陶器皿もしくは鉢である。22は白磁皿である。瀬戸美濃産か。

第10図

1～10はSX014出土遺物である。1は陶器鉢である。2は陶器瓶か。3は陶器壺である。4は土師器焜炉か。5は陶器鉢である。6は陶器擂鉢である。7は土師器小皿である。中世遺物のかきあげか。8は縄文土器深鉢底部である。9は陶器擂鉢、10は土師器火鉢である。11～20はSK016出土遺物である。11、12は染付椀である。13～15は陶胎染付椀である。16は染付皿、17は染付筒形椀である。18は染付盆台、19は陶胎染付蓋、20は染付蓋である。器肉が光沢のある白色である事から、瀬戸美濃産の可能性がある。

第11図

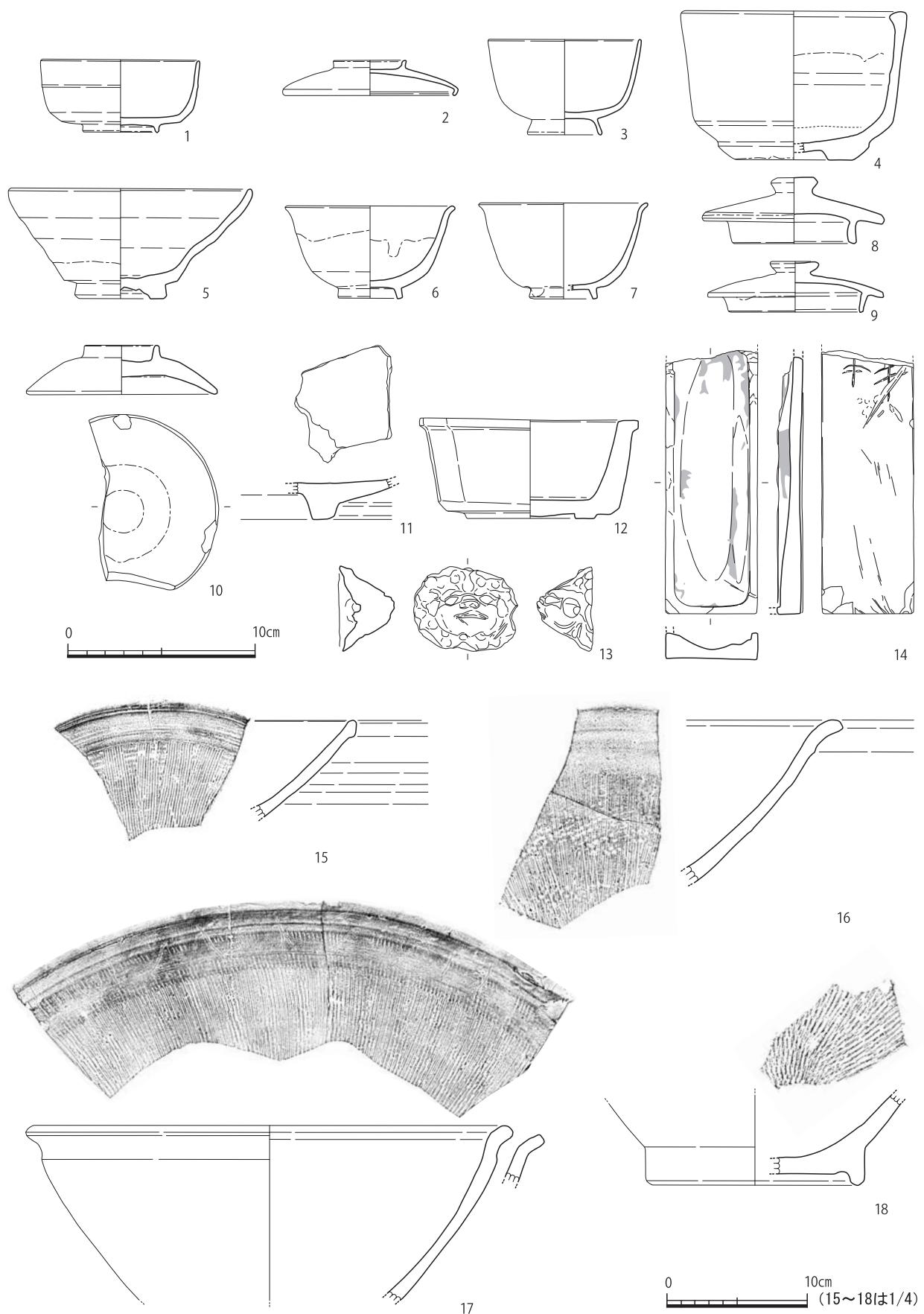
SK016出土遺物である。1は白磁筒形椀で、胴部に削り出し突帯が一条巡る。2は白磁蓋で、3は白磁椀である。4は青磁火入れである。5は陶器椀である。萩焼であろう。6は京・信楽系陶器椀である。高台露胎で、胴部内外面全体に緑色釉を施す。7は京・信楽系陶器椀である。8は陶器蓋、9は関西系陶器蓋である。白色土で絵付けされる。土瓶蓋か。10は白磁蓋である。11は陶器皿または鉢である。12は土師器小型鉢である。13は瓦質土器火鉢把手。14は結晶片岩製硯である。正面および側面に墨が付着する（網掛け部）。裏面に「キ」字を左右に2つ並べたような線刻が施される。15～18は陶器擂鉢である。

第12図

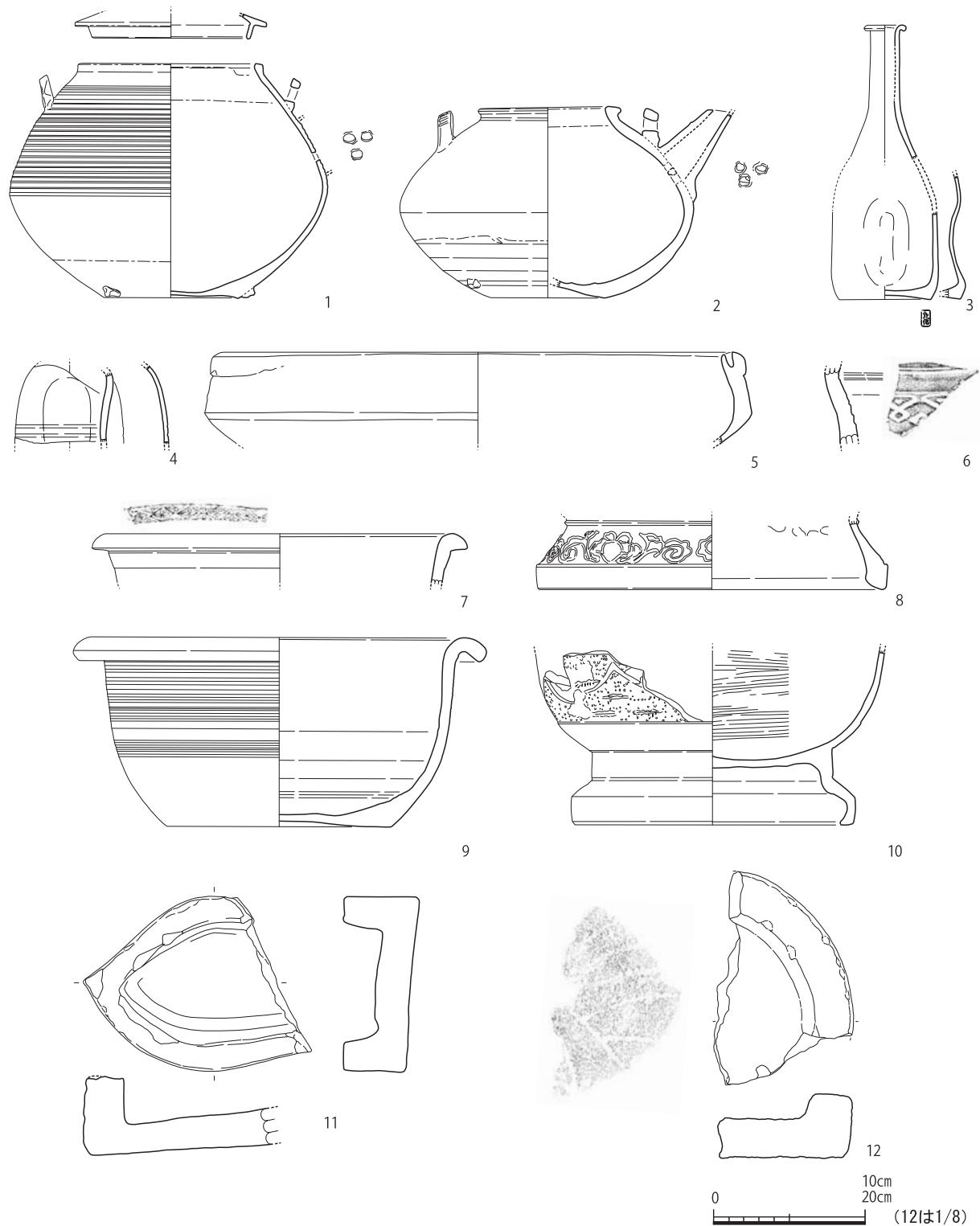
SK016出土遺物である。1は関西系陶器土瓶である。2は肥前系陶器土瓶で、鉄釉が施される。3は現川焼の陶器土瓶である。外底部に方形の印刻がある。字は「た化」であろうか。4は備前系の貼付徳利の胴部片か。5は瓦質土器焙烙、6は瓦質土器甕か。7は土師器火鉢である。8は瓦質土器焜炉台部か。9は瓦質土器火鉢か。10は瓦質土器焜炉。11は軒端飾瓦（鬼瓦）、12は凝灰岩製石臼の上臼である。

第13図

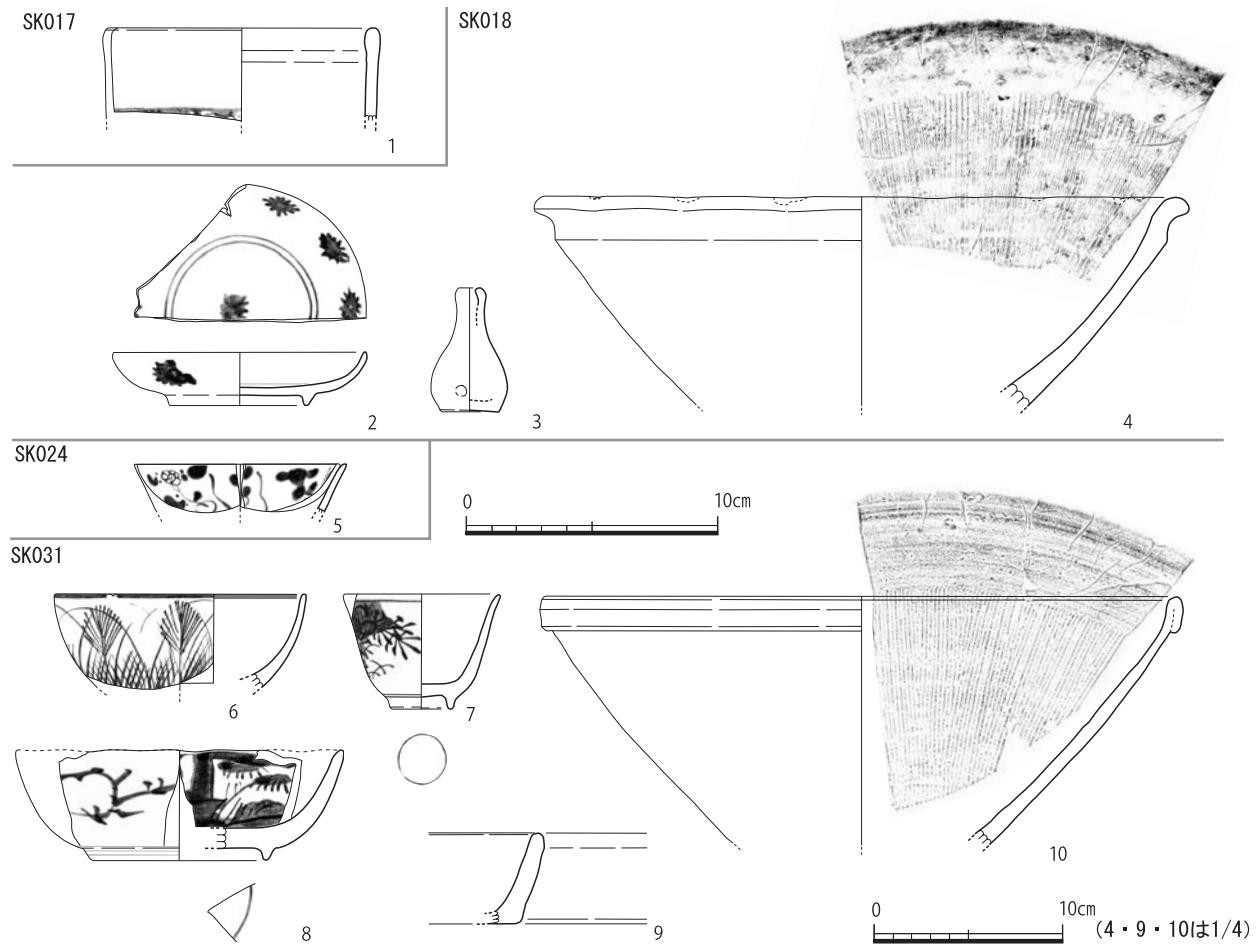
1はSK017出土染付火入れもしくは香炉である。青磁の素地に絵付けしている。2～4はSK018出土遺物



第11図 SK016出土遺物実測図② (S=1/3・1/4)



第12図 SK016出土遺物実測図③ (S=1/4・1/8)



第13図 SK017・018・024・031出土遺物実測図 (S=1/3)

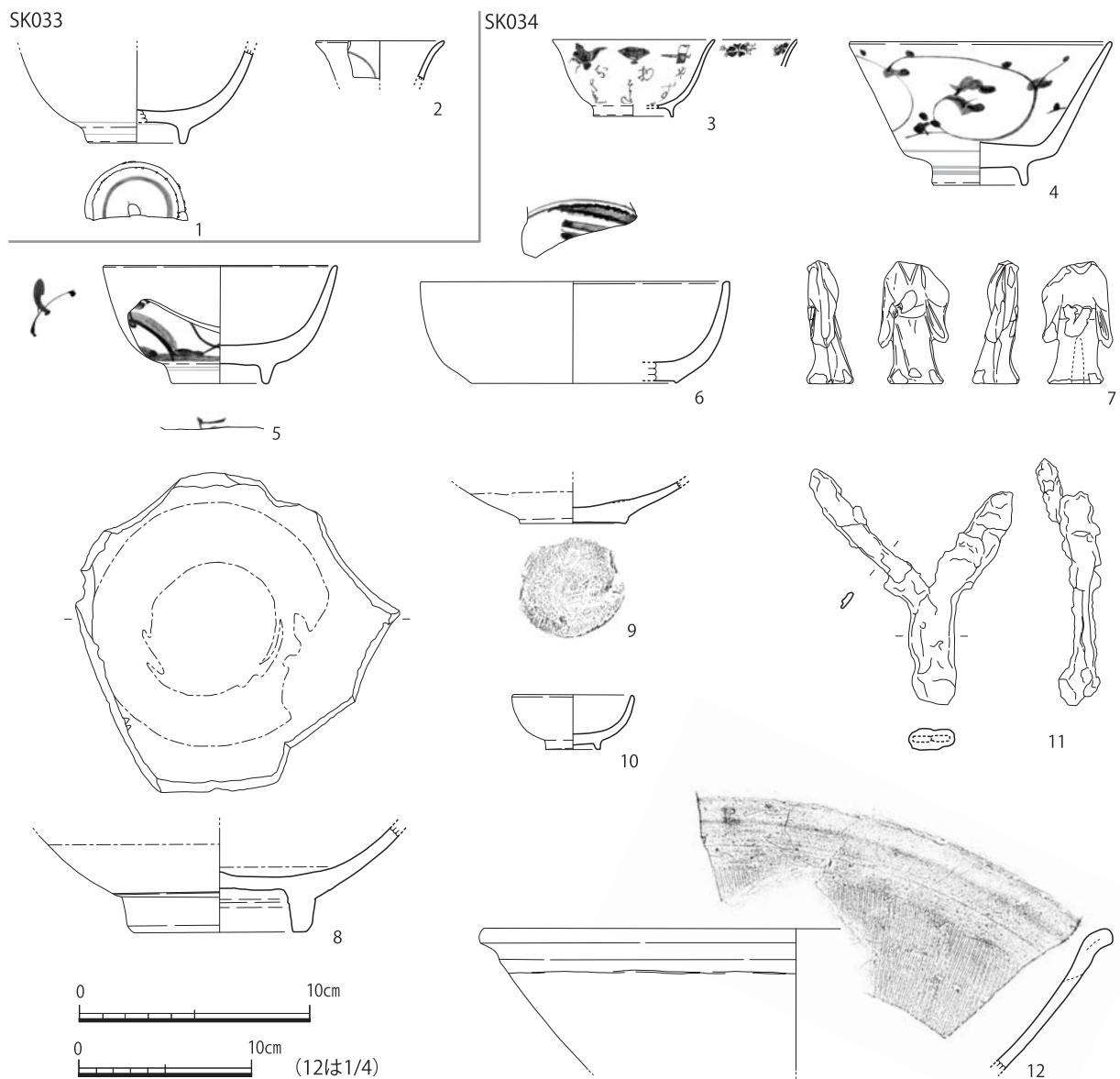
である。2は陶胎染付小皿である。内外面に花形のコンニャク印判を用いて絵付けする。3は陶器ミニチュア瓶、4は陶器擂鉢、5はS024出土遺物である。染付小坏か。6～10はSK031出土遺物である。6は染付椀である。7は染付小坏である。8は染付皿である。9は瓦質土器焰烙である。10は陶器擂鉢である。

第14図

1～2はSK033出土遺物である。1は染付椀である。SX046と遺構間接合する。畠付が露胎で、高台内外に砂が付着する。2は染付小坏である。3～12はSK034出土遺物である。3は染付小坏である。4、5は染付椀である。6は青磁染付皿である。7は土人形である。2つの型を合わせて成形しており、右手に団扇を持った女性を表すようである。8は陶器鉢、9は陶器皿か。10は白磁小坏である。11は雁又形鉄製品で、用途は不明。12は陶器擂鉢である。

第15図

1～4はSX035出土遺物である。1、2は土師器皿で、いずれも焼成が堅緻である。3は中国産白磁椀である。下層遺構からのかきあげか。4は瓦質土器鉢で、5は瓦質土器火鉢である。6～8はSX036出土遺物である。6は瓦器椀で、7は在地系土師質土器坏、8は中国産天目椀破片である。SX036出土遺物はいずれも下層遺構からのかきあげ資料と考えられる。9～16はSX037出土資料である。9は染付小椀、10は色絵染付小坏である。11は染付仏飯器、12は白磁仏飯器、13は白磁小坏、14は染付筒形椀、15は陶器鉢、16は陶器椀である。17～21はSX039出土遺物である。17は色絵染付瓶か。18は染付蓋、19は染付小皿である。20は染付椀、21は染付皿である。



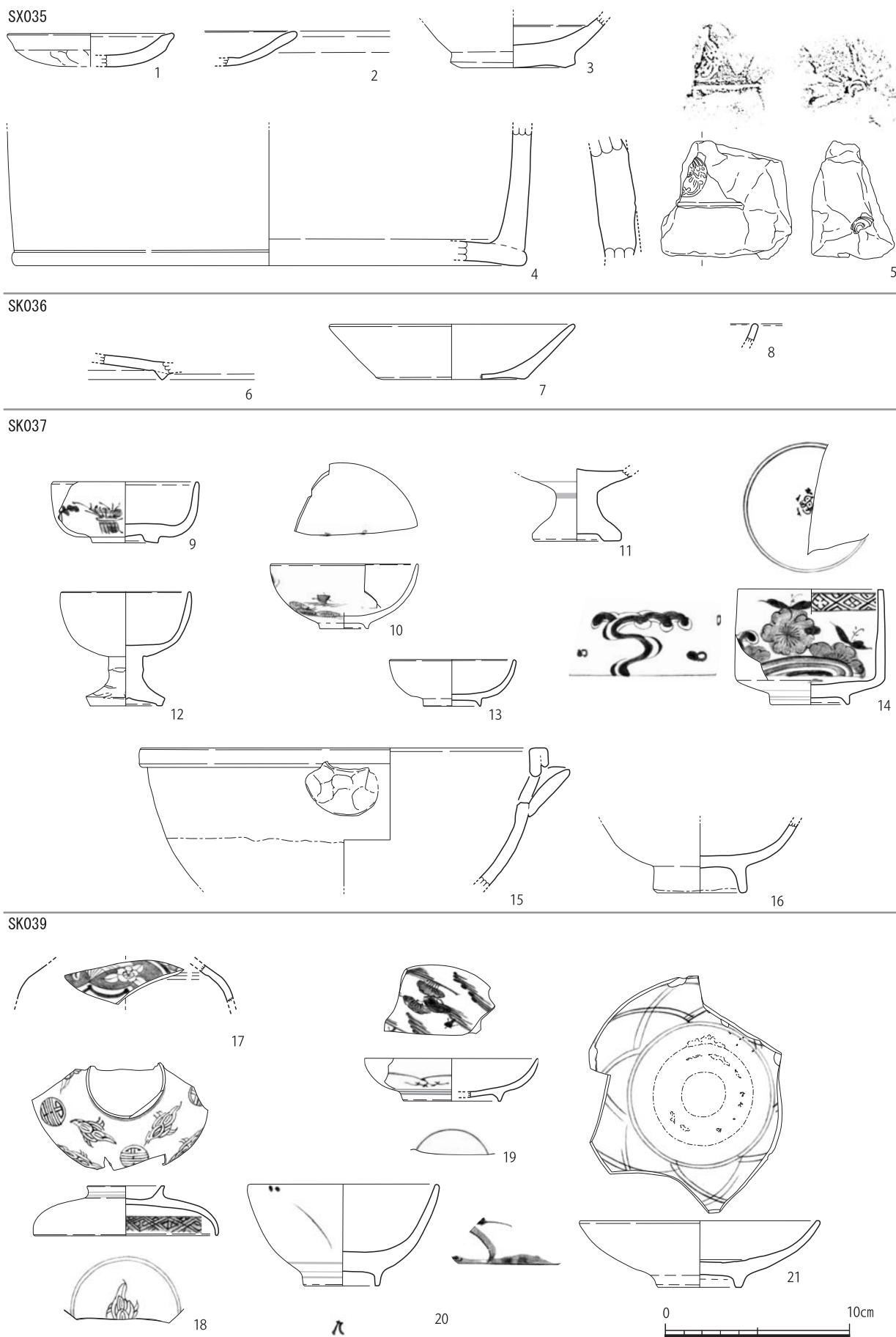
第14図 SK033・034出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

第16図

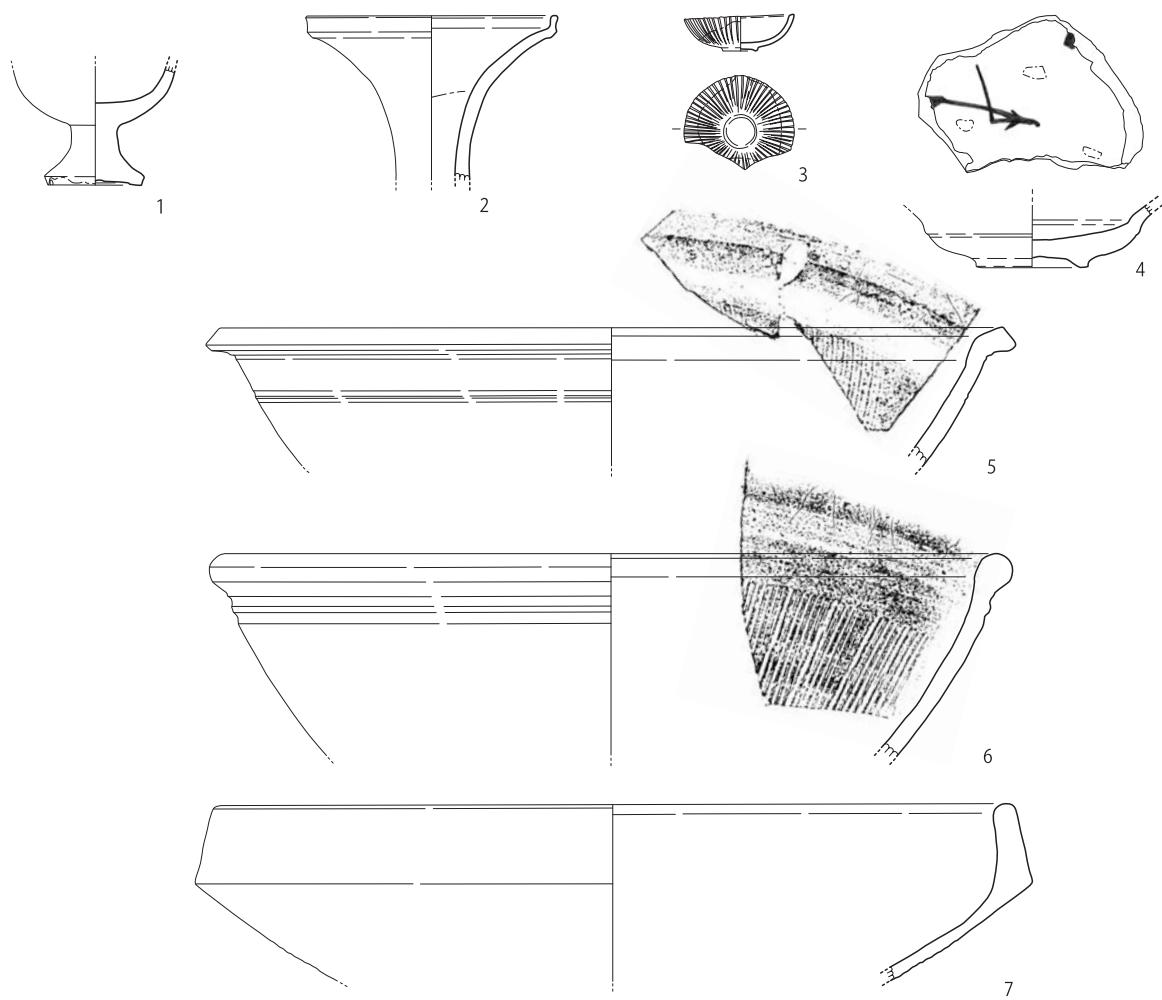
SX039出土遺物である。1は青磁仏飯器である。2は青磁瓶、3は白磁菊皿、4は絵唐津の皿である。胎土目積で、兜巾は不明瞭である。16世紀末から17世紀初頭の所産か。下層遺構からのかきあげである。5、6は陶器擂鉢、7は瓦質土器焰焰である。

第17図

1～6はSX044出土遺物である。1は染付小皿、2は円形の瓦質土器火鉢で、四つの脚を有する。3は陶器蓋か。4は京都系土師器皿である。5、6は鉄製釘である。7～11はSX045出土遺物である。7は染付碗破片、8は陶器皿で17世紀後半頃に比定される器形である。9は端反の白磁皿で、中国産である。10は白磁皿で内面にヘラ彫り。11は陶器皿か。鍔縁状の口縁を有し、17世紀前半頃に比定される。SX045は慶長期にめぐらされた土壘(SF040・後述)の廃絶後に堆積する遺物包含層であるため、土壘造営段階の遺物を若干量含んでいる。SX045の堆積年代は、18世紀代以前まで遡る可能性があるが、遺物量が少なく、年代の確定には至らなかった。

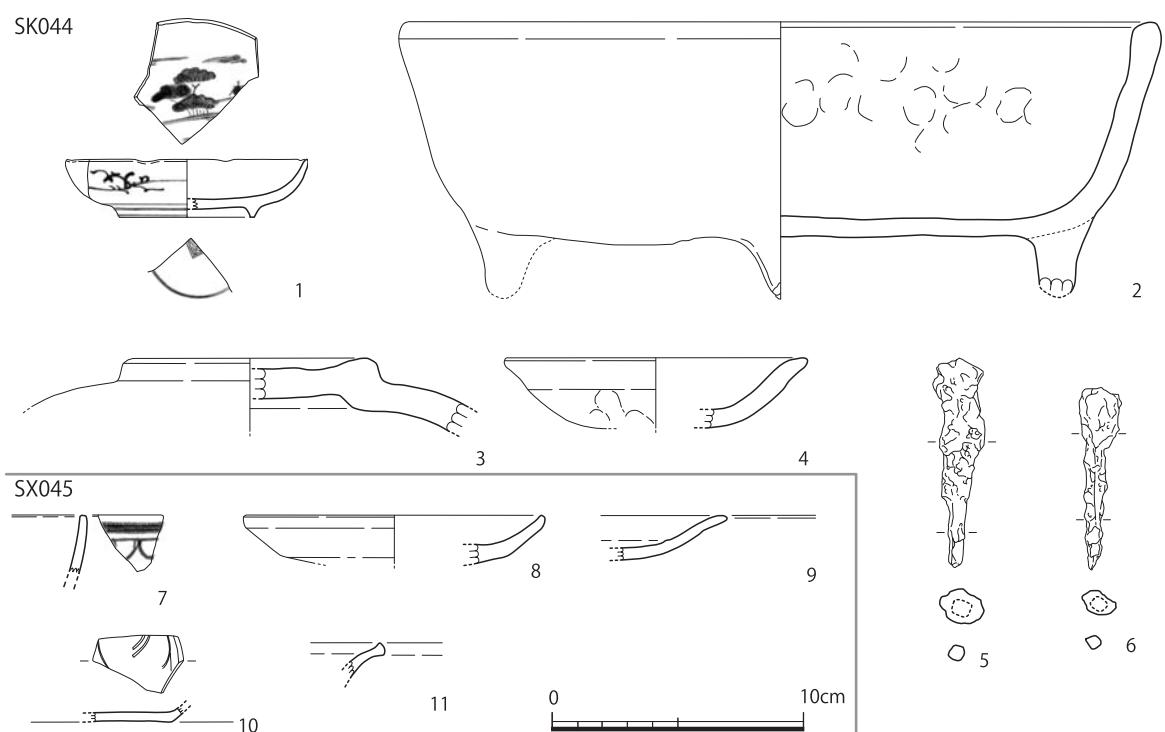


第15図 SX035・SK036・037・039出土遺物実測図 (S=1/3)



第16図 SX039出土遺物実測図 (S=1/3)

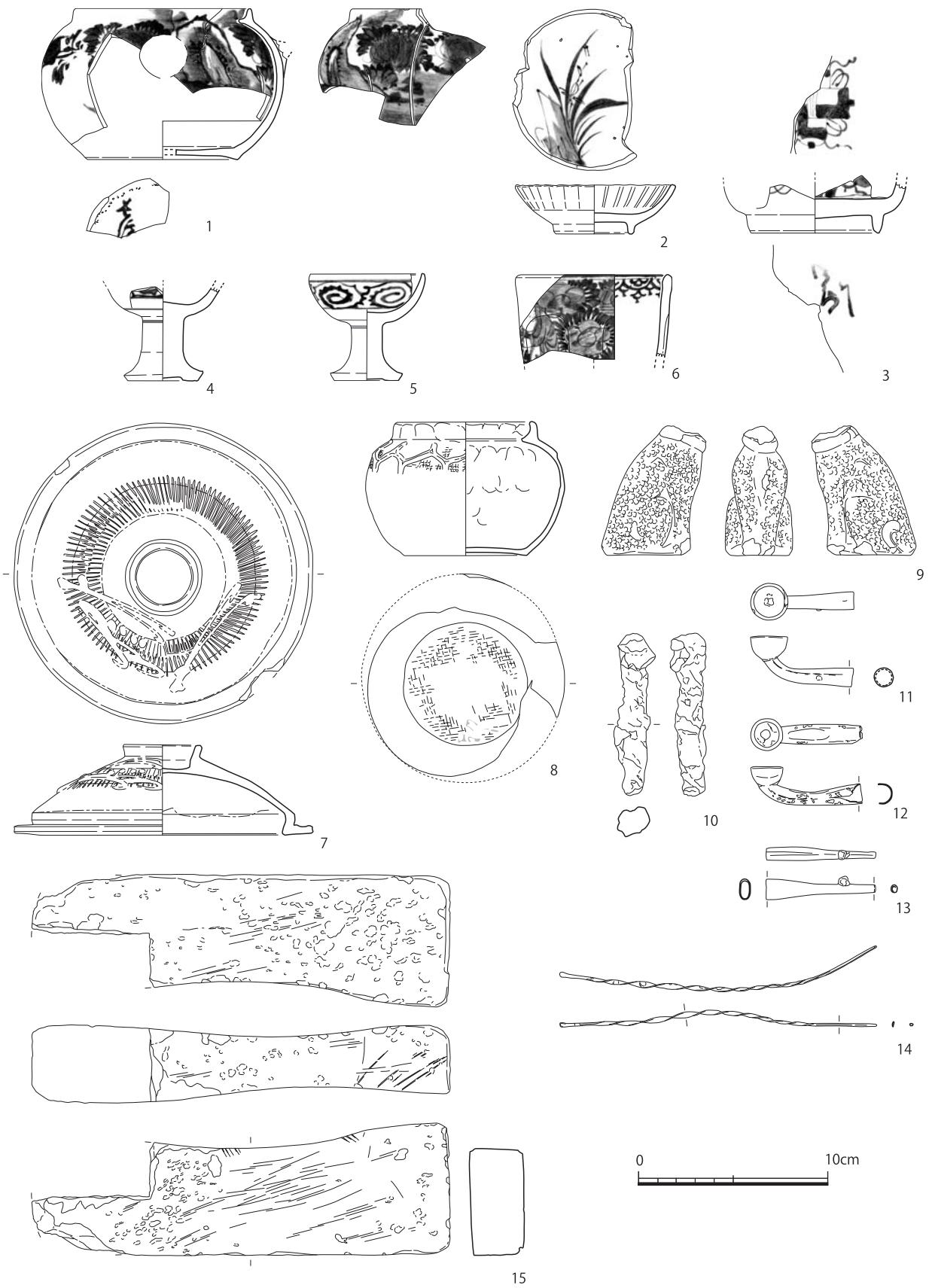
0 10cm



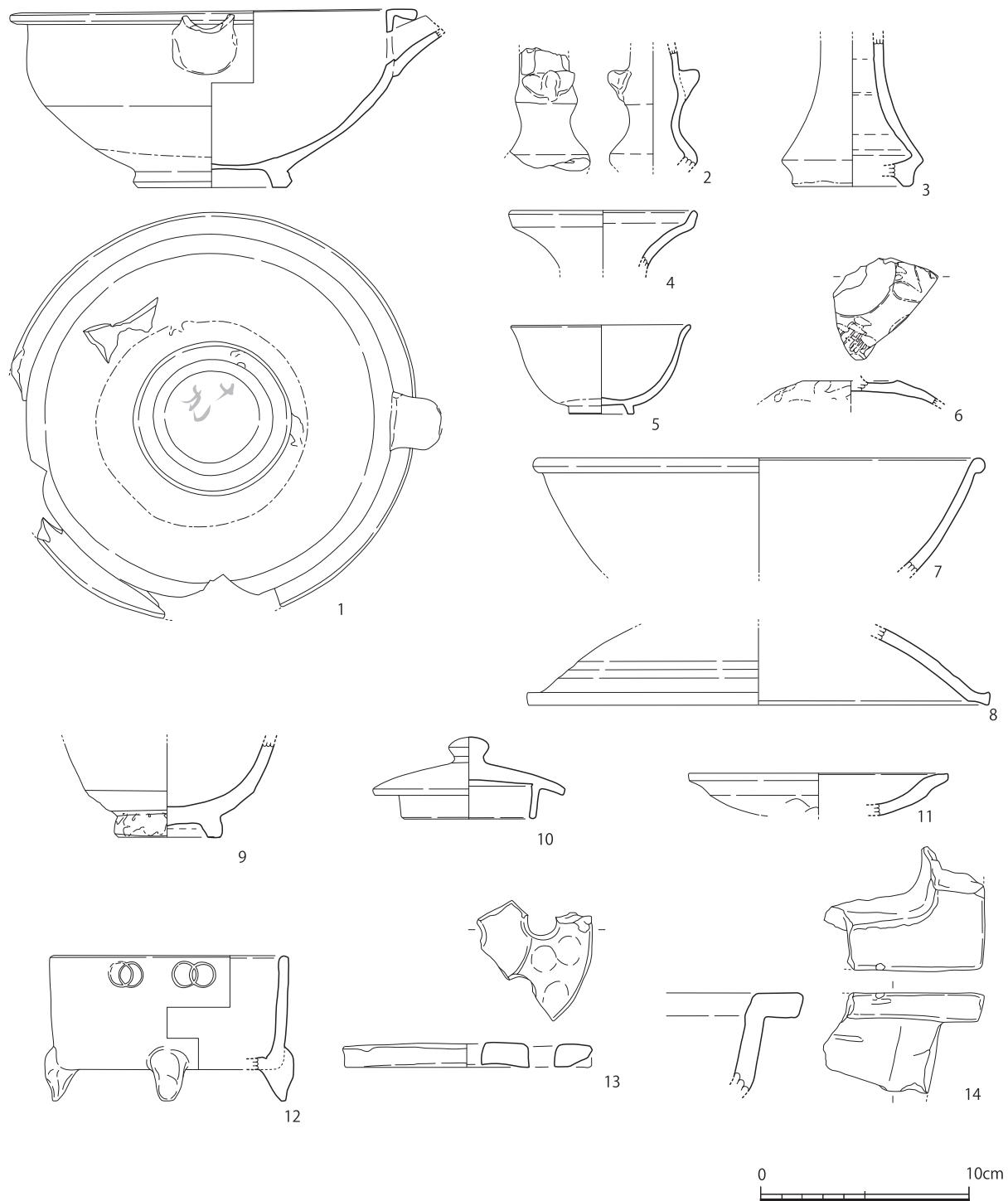
第17図 SX044・045出土遺物実測図 (S=1/3)



第18図 SX046出土遺物実測図① (S=1/3)



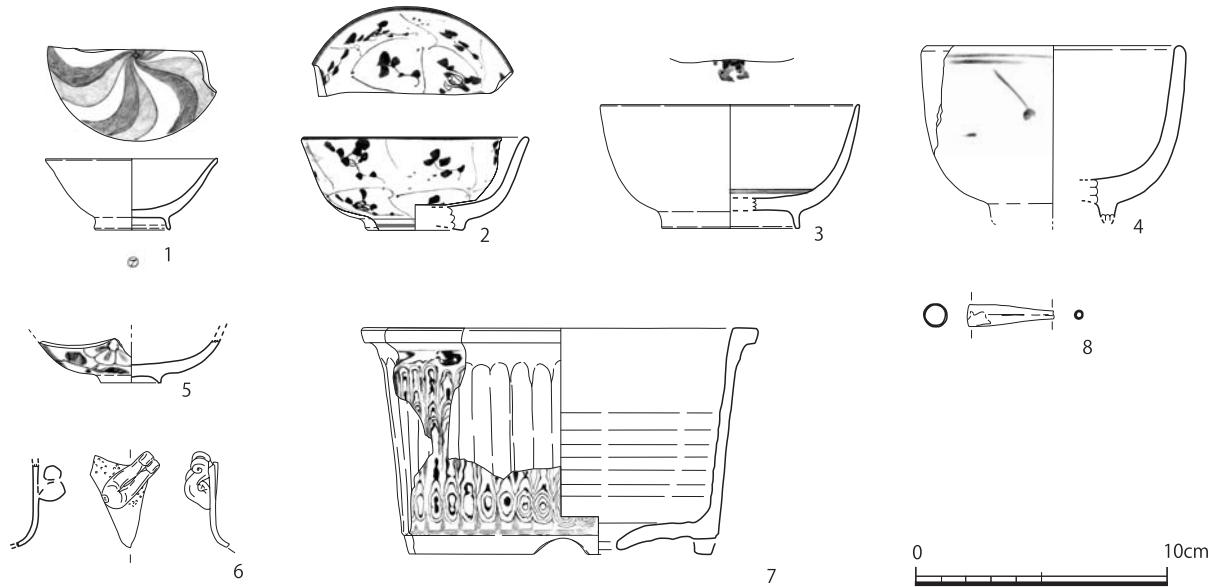
第19図 SX046出土遺物実測図② (S=1/3)



第20図 SX046出土遺物実測図③ (S=1/3)

第18図

SX046出土遺物である。1～9は染付椀、10は染付紅皿、11～16は染付小壺である。1の外面絵付は発色より、幕末期から明治初頭段階に比定される。11の絵付けは鉄釉で施される。14は型紙刷で絵付けが施される。17～19は染付椀の蓋である。20は色絵染付人形である。兎を表現したものか。21は瀬戸美濃産白磁寿字文皿である。22は染付輪花皿、23は染付瓶、24は染付猪口、25は色絵染付小型瓶である。「お神酒徳利」であろう。26は染付皿である。高台部のみ、円形に削りだした転用品である。



第21図 SX052出土遺物実測図 (S=1/3)

第19図

SX046出土遺物である。1は染付水注である。焼き継いであり、外底部に焼き継ぎ文字が観察される。2は染付小皿である。3は染付角皿である。外底部に焼き継ぎ文字が観察される。4、5は染付仏飯器である。6は染付筒形椀である。7は関西系陶器蓋である。飛びカンナの上に白土で絵付けする。鍋蓋か。8は土師器急須である。関西産か。型押成形で、内面に型押し段階の指圧痕が残る。外底部に墨書がある。9は犬形の土鈴である。型合わせで成形する。10は不明鉄製品、11、12は青銅製キセル火皿で、13は青銅製キセル吸い口である。14は用途不明青銅製品で、一枚の薄い青銅板を捩って成形している。

第20図

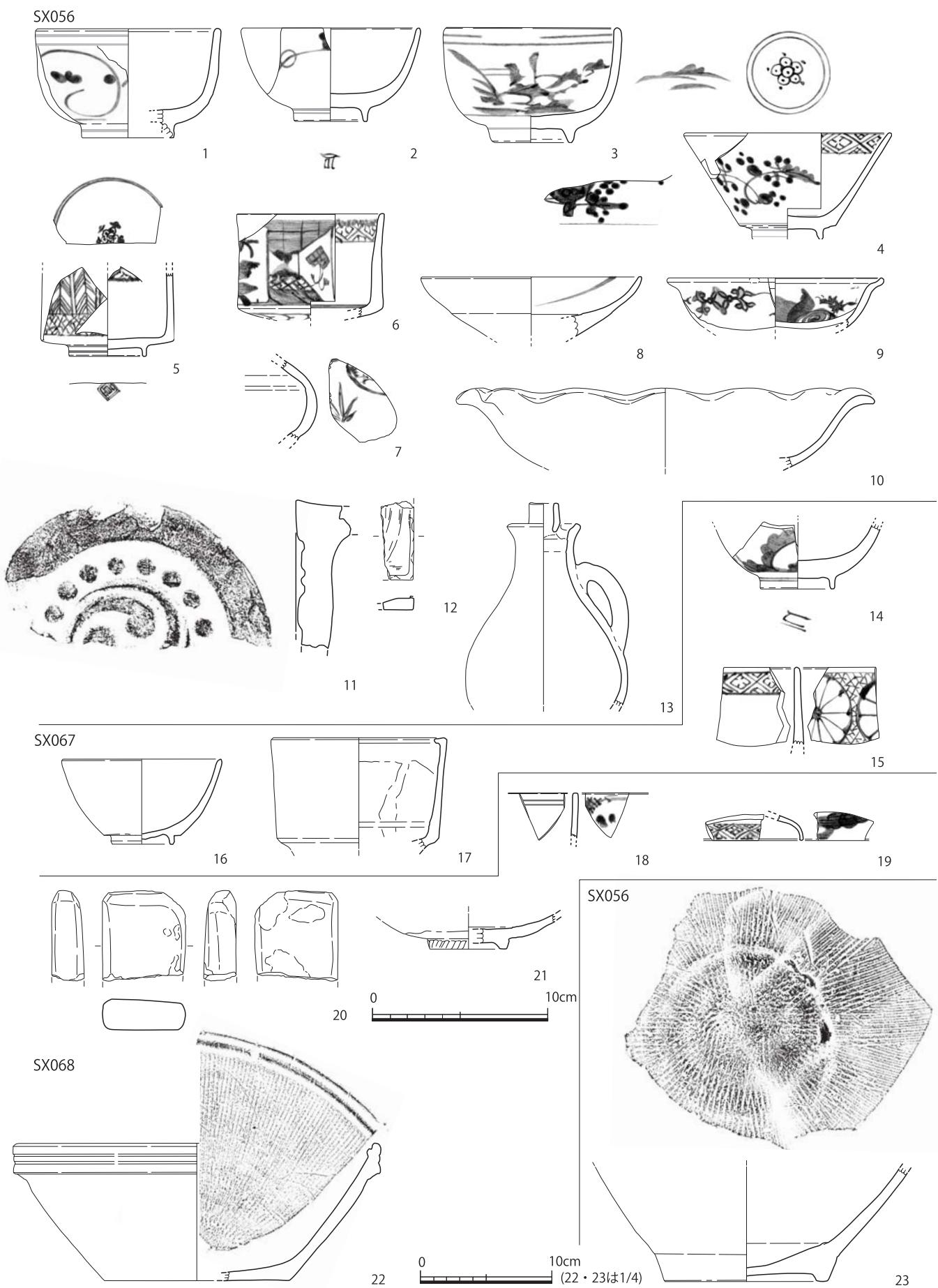
SX046出土遺物である。1は注口付陶器鉢である。高台外底部に墨書を施す。2、3は青磁小瓶である。花生けか。4は青磁瓶口縁部である。花生けか。5は関西系陶器小椀である。6は陶器蓋である。黄橙色を呈す。7は陶器鉢である。8は蓋か。全面に施釉し、白色を呈す。9は陶器椀である。釉が高台畳付、高台内部までかかる。10は陶器蓋である。土瓶蓋か。青緑色釉を施す。11は土師器皿、12は瓦質土器火鉢か。13は土師器焜炉のサナである。14は瓦質土器火鉢である。箱形を呈し、方形火鉢の可能性がある。

第21図

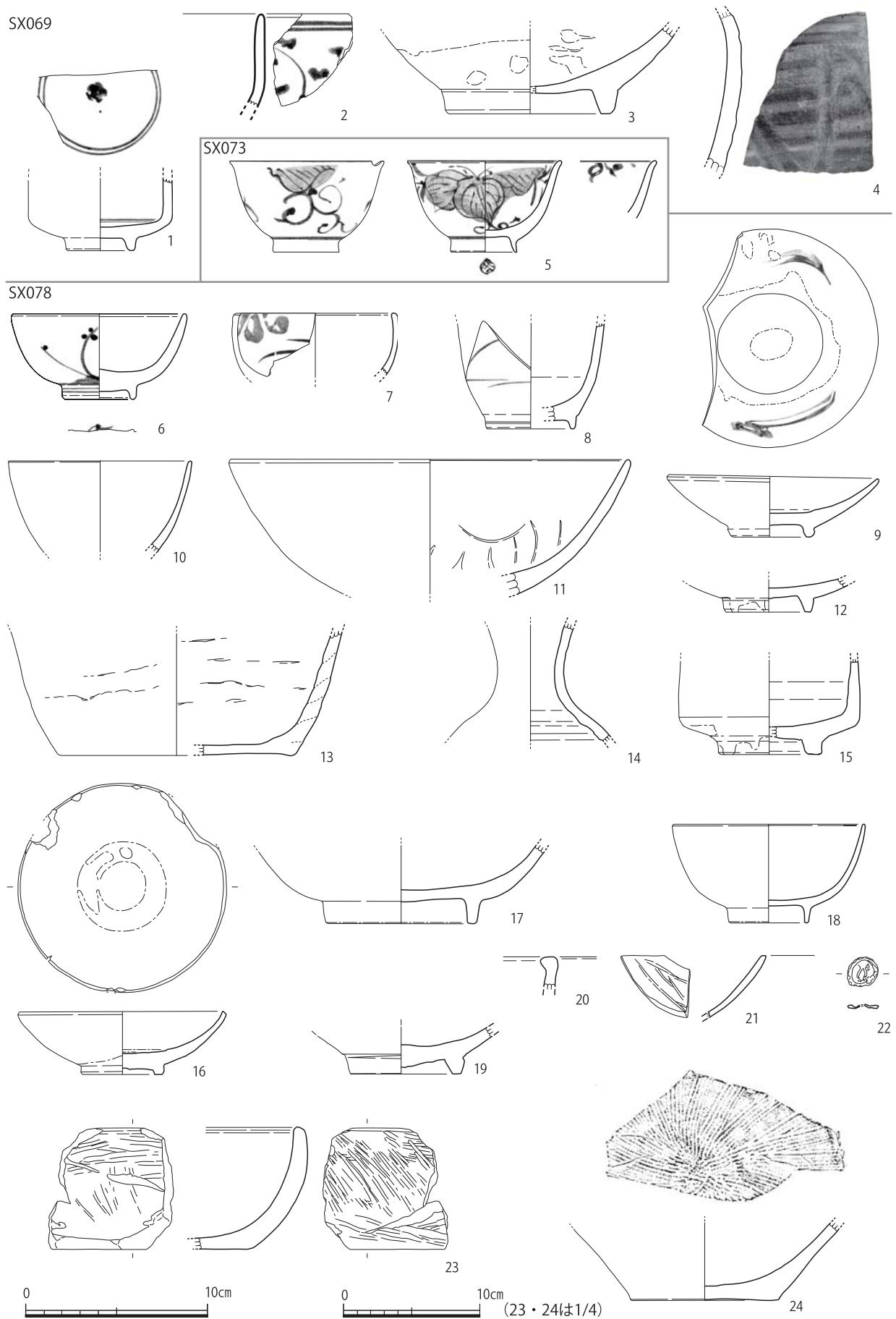
1～8はSX052出土遺物である。1、2は染付小壺である。3は青磁染付小椀、4は陶胎染付椀、5は色絵染付小椀か。6は土師器把手で、内面に紅が付着する。関西系か。7は土師器植木鉢である。赤、白、二種類の精良な胎土の練り上げ手で、外面を縦方向にヘラ削りする。8は青銅製キセル吸い口である。

第22図

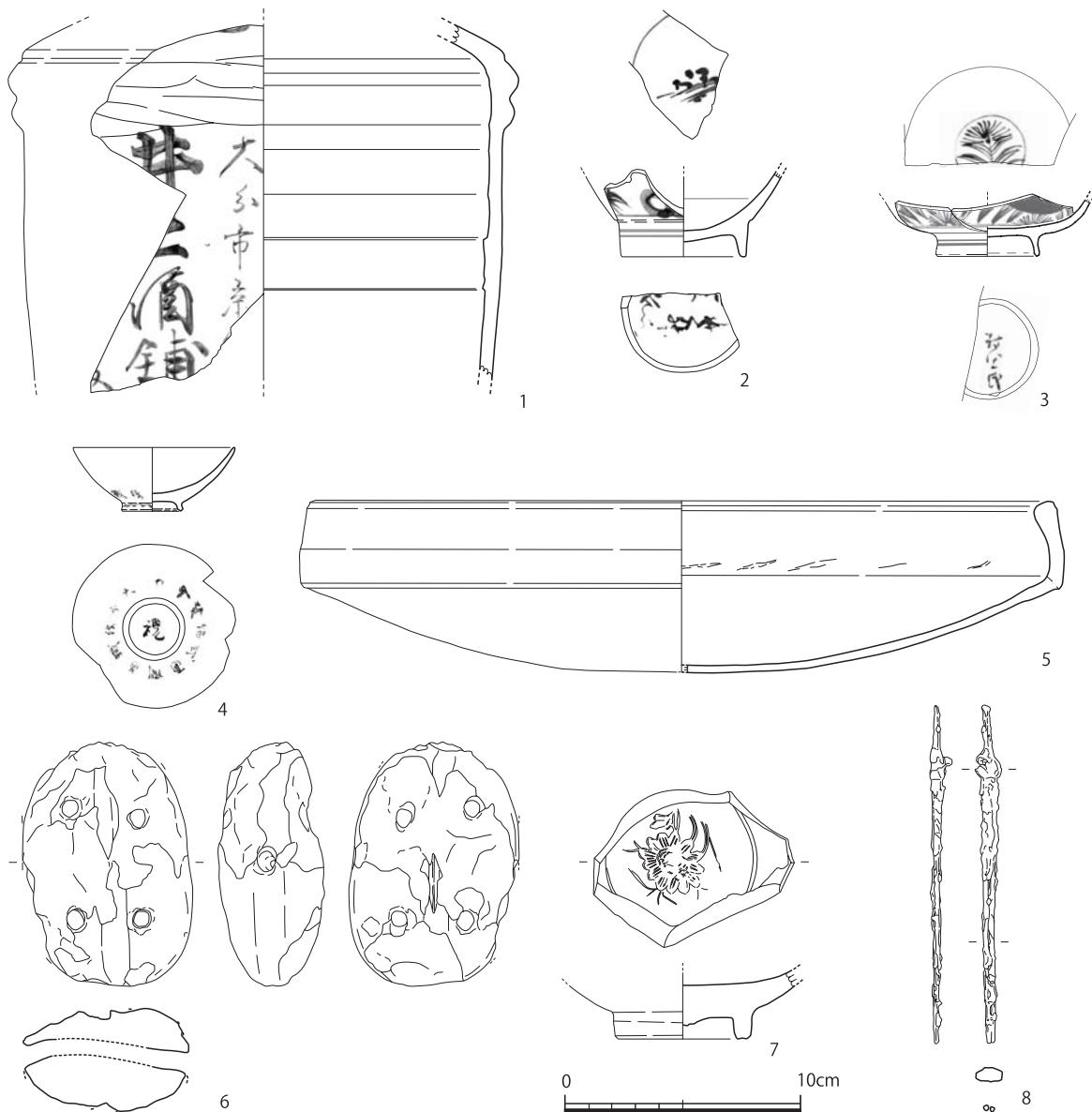
1～13、23はSX056出土遺物である。1は陶胎染付椀、2は染付椀、3は陶胎染付椀、4～5は染付椀、6は染付椀、7は色絵染付小瓶か。8は陶胎染付皿、9は染付蓋または皿、10は陶器輪花皿、11は軒丸瓦、12は結晶片岩製小型硯、13は陶器油差である。23は陶器擂鉢である。14～17はSX067出土遺物である。14は染付椀、15は染付筒形椀、16は白磁椀、17は陶器火入れ、18～22はSX068出土遺物である。18は染付椀、19は染付蓋、20は砂岩製不明石製品、21は陶器皿である。22は焼締陶器擂鉢である。明石産か。



第22図 SX056・067・068出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)



第23図 SX069・073・078出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)



第24図 表土出土遺物実測図 (S=1/3)

第23図

1～4はSX069出土遺物である。1は青磁染付筒形椀、2は陶胎染付椀、3は陶器鉢、4は陶器瓶である。5はSX073出土遺物で、瀬戸美濃産染付椀である。6～24はSX078出土遺物である。6は染付椀、7は陶胎染付小椀である。8は染付瓶、9は陶胎染付皿、10は白磁椀、11は青磁鉢で、内面にヘラ彫りが施される。12は白磁皿、13は陶器甕、14は陶器瓶、15は陶器火入れ、16は陶器皿、17は陶器鉢、18は、19は焼締陶器瓶、20は流泉窯系青磁片である。香炉か。21は瓦器椀である。22は青銅製キセル火皿であるが、敲打によって扁平に変形している。二次的転用品である。23は瓦質土器鉢、24は焼締陶器擂鉢である。

第24図

表土出土品である。1は近現代の染付甕である。「大分市京○井(上)酒舗」と読める。2、3は外底部に焼継ぎ文字のある染付で、4は近代の染付小壺である。外底部に「祝」、外面に「大分線鉄道開通式協賛会」と記されている。5は土師器焙烙、6は大型の土錘、7は竜泉窯系青磁椀で、見込み部に陰刻花文が存在する。8は青銅製かんざしである。

表1-1 第5・6・7・8・9図掲載遺物観察表

図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
05-01	SX001	R002	染付	碗	-	-	6.0	11.2	-	-	広東碗 外:蝶 内:界線
05-02	SX001	R004	染付	碗	-	-	-	(7.2)	-	-	筒形碗 外:草花 内:四方襯
05-03	SX001	R001	陶器	碗	(釉)10Y7/1灰白	(生)2.5Y8/1灰白	(4.2)	8.9	-	-	瀬戸・美濃か
05-04	SX001	R003	陶器	皿	(釉)緑釉	(生)10YR8/1灰白	2.4	-	-	-	内面見込み部釉剥
05-05	SX002	R001	染付	皿	-	-	1.8	(10.3)	-	(6.2)	型紙刷、近代、瀬戸・美濃産
05-06	SX002	R002	陶器	不明	(釉)N1.5/黒	(生)10YR8/3浅黄橙	(2.6)	-	-	5.4	台座か
05-07	SX003	R003	陶胎染付	碗	-	-	-	-	-	-	
05-08	SX003	R007	陶器	皿	(釉)7.5Y7/1灰白	(生)2.5Y7/1灰白	(2.9)	-	-	4.0	見込み部蛇目はぎ
05-09	SX003	R001	陶器	灯火具	(釉)7.5YR2/2黒褐	(生)5YR6/6橙	4.9	(6.8)	(11.5)	5.6	糸切り・鉄釉・外面下半部露胎
05-10	SX003	R005	白磁	不明	(釉)N8灰白	(生)5Y8/1灰白	(3.3)	-	-	-	
05-11	SX003	R002	陶器	碗	(釉)2.5YR6/3にぶい黄	(生)2.5Y8/3淡黄	残2.4	-	-	-	
05-12	SX003	R004	陶器	碗	5Y3/2オーリーブ黒	2.5Y5/1灰灰	(4.6)	-	-	-	外:白土刷毛目 内:白土
05-13	SX003	R006	陶器	鉢	(釉)内:5YR5/6明赤褐 外:青	(生)5YR8/3淡橙	残4.4	-	-	-	外面青色釉
05-14	SK004	R002	染付	蓋	-	-	3.2	9.8	-	4.4	外:葉(野菜か) 高台内:落款 内:幾何学文 口銘
05-15	SK004	R004	染付	碗	-	-	5.0	(8.8)	-	(3.5)	端反 外:葉 内:幾何学文
05-16	SK004	R005	染付	皿	-	-	-	-	-	9.1	外:区画、花 内:区画、山水 高台内:焼継ぎ文字
05-17	SK004	R007	青磁	植木鉢か	(釉)5GY6/1緑灰色	(生)5Y7/1灰白	3(3.8)6(4.8)	-	-	-	
05-18	SK004	R001	陶器	鉢	(釉)2.5Y6/3にぶい黄	(生)10YR8/3浅黄橙	(7.3)	-	-	-	
05-19	SK004	R008	瓦質土器	不明	-	(生)2.5Y8/2灰白(内)黒	(1.3)	-	-	-	
05-20	SK004	R006	陶器	瓶	(釉)10R2/2極暗赤褐	色	残11.3	-	-	-	
05-21	SK004	R003	陶器	壺×壺	(釉)5YR3/2暗赤褐	(生)7.5YR8/2灰白	(5.0)	(20.0)	-	-	
06-01	SX005	R002	陶胎染付	碗	-	(生)5Y8/1灰白	-	-	-	-	外:草か
06-02	SX005	R004	染付	小坏	-	-	-	-	-	2.4	高台露胎 見込み部:蛇目はぎ 外:草
06-03	SX005	R003	陶器	鉢か	(釉)7.5YR4/4褐	-	残(4.9)	-	-	-	内外:化粧土刷毛目
06-04	SX005	R005	鉄製品	鉄滓	-	(生)5YR7/4にぶい橙	長7.0	幅9.6	厚5.0	重	-
06-05	SK006	R003	白磁	仏飯器	(釉)N8/灰白	-	(2.9)	-	-	2.7	
06-06	SK006	R004	陶器	不明	(釉)7.5Y6/1灰	(生)N8/灰白	(1.5)	-	-	4.0	
06-07	SK006	R002	石製品	砥石	-	(生)5Y6/1灰	長8.7	幅6.0	厚1.7	重	流紋岩×頁岩
06-08	SK006	R001	陶器	擂鉢	(釉)10YR2/2黒褐	-	(9.7)	(34.0)	-	-	
06-09	SX008	R007	染付	碗	-	(生)7.5YR7/4にぶい橙	5.6	7.0	-	3.3	外:亀、水
06-10	SX008	R008	染付	小坏	-	-	5.9	-	-	-	外:丸 口銘
06-11	SX008	R002	陶器	碗	(釉)2.5Y7/3浅黄	-	残3.6	-	-	-	信楽
06-12	SX008	R009	青磁	碗か	(釉)7.5GY7/1明緑灰	-	(1.1)	-	-	(4.7)	
06-13	SX008	R001	陶器	土瓶蓋	(釉)2.5Y4/6オーリーブ褐	(生)10YR6/2灰黄褐	2.6	-	(12.0)	(9.0)	関西系陶器 外:飛びカンナ
06-14	SX008	R005	白磁	瓶	(釉)5GY8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	(10.2)	-	(12.8)	-	
06-15	SX008	R006	白磁	皿	(釉)5GY8/1灰白	(生)2.5Y6/3にぶい黄	2.7	10.0	-	(4.0)	内面見込み蛇目はぎ
06-16	SX008	R003	陶器	瓶	(釉)10YR3/4暗褐	(生)N8灰白	(8.1)	1.9	-	-	
06-17	SX008	R010	青銅製品	かんざし	-	(生)7.5Y8/1灰白	長17.3	幅0.8	厚0.3	重	-
06-18	SX008	R004	石製品	砥石	-	(生)2.5Y7/1灰白	長12.3	幅4.5	厚1.9	重	結晶片岩
07-01	SX009	R015	染付	筒形碗	-	-	5.3	6.9	-	4.0	外:斜格子 見込み部:花弁
07-02	SX009	R006	染付	小坏	-	-	3.4	(7.0)	-	(2.7)	草花・素地上に絵付け。近代か。
07-03	SX009	R014	染付	碗	-	-	6.1	(10.1)	-	(3.6)	外:蝶
07-04	SX009	R011	染付	小碗	-	-	5.7	(6.7)	-	(3.2)	外:蛸唐草
07-05	SX009	R018	染付	碗	-	-	-	-	-	3.4	外:麦わらか 被熱で変色
07-06	SX009	R017	染付	碗	-	-	4.6	(9.0)	-	(3.4)	口銘。外:隠字 内:不明文様 瀬戸・美濃産、端反碗
07-07	SX009	R009	青磁染付	碗	-	-	-	-	-	(4.6)	見込み部:コンニャク印判
07-08	SX009	R002	染付	小坏	-	-	5.6	5.8	-	2.7	外:草花
07-09	SX009	R010	染付	碗	-	-	-	(10.9)	-	-	外:格子
07-10	SX009	R004	染付	瓶	-	-	-	1.4	-	-	外:蛸唐草
07-11	SX009	R003	染付	瓶	-	-	-	-	-	-	外:笹
07-12	SX009	R016	染付	皿	-	-	-	-	-	9.0	高台蛇目はぎ 内:笹
07-13	SX009	R023	陶器	水差し	(釉)2.5Y8/4浅黄	-	(8.5)	(9.4)	-	-	関西系陶器。外面:鉄絵菊花文。ロクロ成形。
07-14	SX009	R019	陶器	碗	(釉)5Y8/2灰白	-	4.8	(7.1)	-	3.4	内面:施釉。外面:露胎。いっちゃんがけ(鉄釉・白色釉)
07-15	SX009	R007	陶器	鉢か	10YR4/3にぶい黄褐	(生)2.5Y8/3淡黄	(4.9)	-	(11.3)	-	内面に化粧土でハケ目
07-16	SX009	R005	陶器	土瓶	(外)青緑色釉	(生)5Y7/1灰白	残(2.2)	(9.5)	-	-	青緑色釉
07-17	SX009	R008	陶器	碗	(釉)2.5Y7/3浅黄	10YR6/3にぶい黄橙	残(3.2)	-	-	4.7	
07-18	SX009	R013	青磁	植木鉢	(外)5GR5/1緑灰	(生)5Y4/1灰	残5.2	-	-	(7.6)	外:ヘラ描
07-19	SX009	R012	陶器	土瓶か	(外)7.5YR5/3にぶい褐	(生)2.5Y8/2灰白	(5.9)	-	-	8.1	関西系。胴部下半部のみ。全面露胎。
07-20	SX009	R020	陶器	瓶	10YR5/4にぶい黄褐	(生)N8/0灰白	(4.2)	-	-	6.9	内:露胎 外:化粧土刷毛目。S052、S068と遺構間接合
07-21	SX009	R024	土製品	人形	(外)10YR7/4にぶい黄橙	(内)10YR6/6明黄橙	高(3.0)	幅(2.8)	厚(2.0)	-	頭部のみ
08-01	SX009	R034	陶器	壺	(釉)7.5YR3/2黒褐	7.5YR6/4にぶい橙	(18.0)	(32.0)	-	-	ハンズー壺
08-02	SX009	R001	陶器	水甕	(釉)5Y8/3淡黄	(内)10YR7/4にぶい黄橙	(10.9)	(33.0)	-	-	瀬戸・美濃産 外面型押
08-03	SX009	R031	瓦質土器	火鉢	(外)N5灰	(生)2.5YR4/1赤灰	(7.5)	-	-	-	脚幅(15.2)
08-04	SX009	R029	瓦質土器	鉢	(外)2.5Y5/1黄灰	(生)5YR4/2灰褐	6.8	(19.4)	-	(14.0)	
08-05	SX009	R030	瓦質土器	鉢	(外)5Y4/1灰	(内)N5灰	8.5	(24.6)	-	(17.6)	
08-06	SX009	R027	瓦質土器	焜炉か	(外)N4/0灰	(内)2.5Y5/1黄灰	残(6.7)	-	-	25.7	
08-07	SX009	R032	瓦質土器	火鉢か	(外)7.5Y4/1灰	(内)5Y4/1灰	残(6.9)	(24.6)	-	-	
08-08	SX009	R025	瓦質土器	火鉢	(外)7.5Y5/1灰	(生)N7/0灰白 (内)残(6.0)	(22.8)	-	-	-	
08-09	SX009	R035	瓦質土器	壺	(外)7.5YR4/1褐灰	(内)N4/0灰	(6.4)	(34.5)	-	-	
08-10	SX009	R028	瓦質土器	火鉢	(外)5Y3/1オーリーブ黒	(内)7.5Y4/1灰	(11.3)	-	-	(15.8)	
08-11	SX009	R026	瓦質土器	鉢	(外)N41灰	(生)2.5Y8/1灰白 (内)7.5Y5/1灰	1.8	-	-	-	
08-12	SX009	R022	陶器	擂鉢	(外)5YR4/3にぶい赤褐	(内)7.5YR4/1褐灰	(7.9)	(27.2)	-	-	唐津系。薄く鉄釉。ハケ目上端がナデそろえられる。
08-13	SX009	R033	陶器	擂鉢	(釉)7.5YR2/3極暗褐	(内)5Y3/1オーリーブ黒	残(8.2)	-	-	-	上野・高取系
09-01	SX009	R021	陶器	擂鉢	(釉)5YR3/4暗赤褐	(内)N41灰	14.2	(31.3)	-	16.2	上野・高取系擂鉢Gタイプ
09-02	SK012	R001	染付	碗	-	(内)7.5YR3/2黒褐	-	-	-	-	内:四方襯文 外:葉か
09-03	SK012	R002	染付	碗	-	(生)7.5YR4/1褐灰	-	-	-	-	外:草花か
09-04	SK012	R003	陶器	土瓶	(釉)2.5GY5/3黄褐	(生)7.5YR7/4にぶい橙	(4.0)	(13.8)	-	-	関西系陶器
09-05	SK012	R004	土師質土器	焙烙か	(外)7.5YR6/4にぶい橙	-	残(2.8)	(39.2)	-	-	
09-06	SK013	R002	染付	筒形碗	-	-	-	-	-	-	内:四方襯文
09-07	SK013	R003	陶器	蓋か	(釉)10YR2/3黒褐	(生)5YR6/4にぶい橙	0.7	-	-	-	鉄釉
09-08	SK013	R001	陶器	擂鉢	(釉)7.5YR4/3褐	(内)7.5YR6/4にぶい橙	残(2.7)	-	-	-	関西系か
09-09	SK014	R001	染付	碗	-	-	5.2	10.2	-	4.2	外:草花

表1-2 第9・10・11・12・13・14図掲載遺物観察表

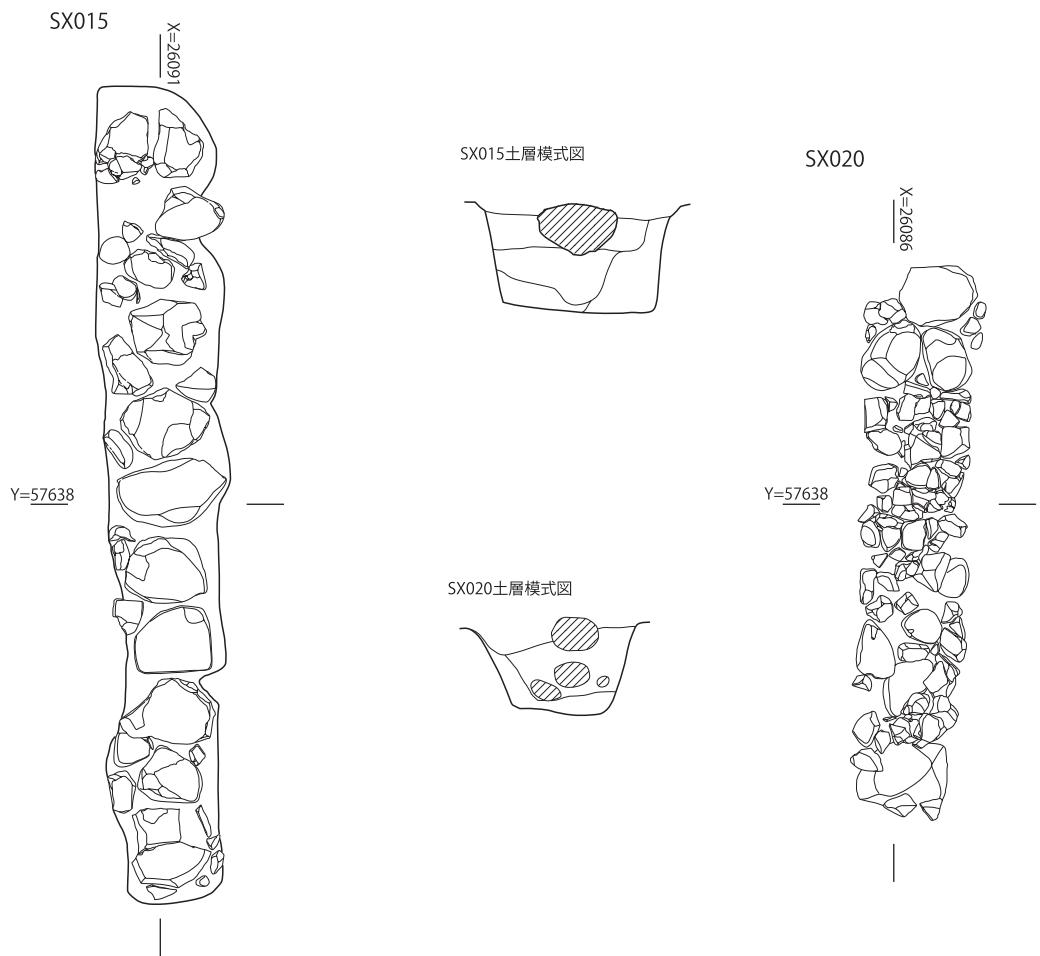
図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
09-10	SK014	R002	染付	碗	-	-	-	(10.8)	-	-	外:草花
09-11	SK014	R023	染付	輪花皿×鉢	-	-	-	-	-	-	外:唐草か 内:草花・区画
09-12	SK014	R014	陶胎染付	碗	-	-	-	-	-	5.0	
09-13	SK014	R003	染付	碗	-	-	-	-	-	(4.2)	
09-14	SK014	R004	染付	蓋	-	-	-	-	-	-	外:菊弁、草 高台内:「成・製」...「大明成化年製」鉢か
09-15	SK014	R007	染付	瓶	-	-	-	-	-	-	外:笹
09-16	SK014	R006	染付	皿	-	-	3.6	13.6	-	8.0	内:扇に草花 外:唐草文
09-17	SK014	R019	青磁	瓶	(釉)5GY7/1明オリーブ灰	(生)5Y8/1灰白	(4.0)	-	-	-	
09-18	SK014	R008	白磁	仏飯器	(釉)5GY8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	(2.6)	-	-	3.8	
09-19	SK014	R005	陶器	鍋	(釉)7.5YR3/3暗褐	(生)2.5Y6/3にぶい黄	(8.1)	(15.6)	-	-	肥前系 取っ手付き
09-20	SK014	R022	陶器	蓋×皿	(釉)5Y4/4暗オリーブ	(生)7.5YR5/3にぶい褐	(2.4)	(13.9)	-	-	
09-21	SK014	R013	陶器	皿×鉢	(釉)N8/灰白	(生)7.5YR5/6明褐	(3.3)	-	-	-	
09-22	SK014	R017	白磁	皿	-	-	(2.3)	-	-	(8.4)	瀬戸美濃産か
10-01	SK014	R024	陶器	鉢	(釉)7.5Y5/3灰オリーブ	(生)10YR7/1灰白	(3.5)	-	-	6.2	内面蛇目はぎ
10-02	SK014	R012	陶器	瓶か	(釉)10YR2/2黒褐	(生)7.5YR6/4にぶい橙	(8.0)	-	-	-	
10-03	SK014	R020	陶器	壺	(釉)10YR3/1黒褐	(生)5YR4/2灰褐	(4.6)	(13.9)	-	-	
10-04	SK014	R009	土師質土器	焜炉か	(外)10YR4/1褐灰	(内)10YR7/4にぶい黄橙	(6.7)	-	-	(19.4)	
10-05	SK014	R021	陶器	鉢	5Y8/1灰白	2.5Y6/2灰黄	(4.6)	-	-	(11.4)	
10-06	SK014	R011	陶器	擂鉢	(釉)7.5YR3/1黒褐	(生)5YR4/2灰褐	(6.7)	-	-	-	唐津系か
10-07	SK014	R015	土師質土器	小皿	(外)7.5YR7/4にぶい橙	(内)7.5YR7/4にぶい橙	(1.4)	(8.4)	-	(4.4)	中世か
10-08	SK014	R018	繩文土器	深鉢	(外)2.5Y6/2灰黄	(内)2.5Y5/1黄灰	(2.6)	-	-	(8.8)	
10-09	SK014	R010	陶器	擂鉢	(釉)10YR2/1黒	(生)5YR5/4にぶい赤褐	(4.3)	(33.2)	-	-	
10-10	SK014	R016	土師質土器	火鉢	(外)2.5Y6/1黄灰	(内)2.5Y5/1黄灰	(11.4)	(30.5)	-	(28.0)	
10-11	SK016	R004	染付	端反碗	-	-	5.5	(10.8)	-	(4.3)	外:山水 内:山と鳥
10-12	SK016	R038	染付	碗	-	-	6.0	(10.4)	-	(4.3)	外:寿、区画、格子、花 内:「寿」抽象文
10-13	SK016	R012	陶胎染付	筒形碗	-	-	6.4	(7.4)	-	(3.8)	青磁染付 内:四方襷文 内外面共に青釉
10-14	SK016	R024	陶胎染付	筒形碗	-	-	5.3	(7.2)	-	(4.2)	外:不明 内:界線 筒形碗
10-15	SK016	R001	陶胎染付	筒形碗	-	-	-	7.5	-	-	青磁染付 内:四方襷文 五花弁文(コンニャク印判)
10-16	SK016	R008	染付	皿	-	-	(13.9)	3.5	-	8.9	高台蛇目はぎ 内:吹墨・唐草・虫(蝶か)
10-17	SK016	R027	染付	筒形碗	-	-	-	-	-	3.8	外:桐文か(コンニャク印判)
10-18	SK016	R010	染付	盆台	-	-	-	-	-	(5.4)	外:草花
10-19	SK016	R019	陶胎染付	蓋	-	-	3.3	(10.0)	-	(4.7)	青磁染付 内:四方襷文 被熟
10-20	SK016	R018	染付	蓋	-	-	2.7	(9.4)	-	(4.1)	瀬戸美濃産か(胎土より) 外面:幾何学文
11-01	SK016	R003	白磁	筒形碗	(釉)N8/0灰白	(生)N8/0灰白	3.8	(8.3)	-	9.0	
11-02	SK016	R006	白磁	蓋	(釉)N8/0灰白	(生)N8/0灰白	1.9	つまみ3.8	-	3.8	
11-03	SK016	R009	白磁	碗	(釉)N8/灰白	(生)5Y8/1灰白	5.1	8.0	-	3.8	
11-04	SK016	R005	青磁	火入れ	(釉)2.5GY7/1明オリーブ灰	(生)10Y8/1灰白	7.9	(11.2)	-	(6.2)	内面露胎 高台置付露胎
11-05	SK016	R007	陶器	碗	(釉)5Y7/2灰白	(生)2.5Y6/2灰黄	5.8	(12.7)	-	4.5	萩焼
11-06	SK016	R002	陶器	端反碗	(釉)7.5Y7/2灰白	(生)10Y8/2灰白	4.9	(8.8)	-	(3.3)	京・信楽系 端反 高台露胎 内外面上部に緑釉
11-07	SK016	R013	陶器	端反碗	(釉)5Y7/3浅黄	(生)5Y8/1灰白	5.1	(8.8)	-	(3.1)	京・信楽系
11-08	SK016	R014	陶器	蓋	(釉)7.5Y6/2灰オリーブ	(生)2.5YR4/2灰赤	3.5	つまみ2.5	9.6	6.4	
11-09	SK016	R026	陶器	蓋	7.5Y5/3灰オリーブ	2.5Y7/3浅黄	2.7	つまみ2.6	-	(6.8)	関西系陶器 白色土絵付け 土瓶蓋か
11-10	SK016	R015	白磁	蓋	(釉)5GY8/1灰白	(生)N8/灰白	2.6	(3.7)	-	(9.8)	内面見込み釉はぎ
11-11	SK016	R028	陶器	皿×鉢	-	-	2.5YR5/6明赤褐	残(2.1)	-	-	
11-12	SK016	R039	土師質土器	小型鉢	(外)5YR7/6橙	(内)5YR7/6橙	5.3	11.5	-	6.8	方形
11-13	SK016	R017	瓦質土器	火鉢把手	(外)5Y4/1灰	(内)10YR6/3にぶい黄橙	4.5	-	-	-	獅子頭形(型押し成形)
11-14	SK016	R035	石製品	硯	-	-	長14.0	幅(4.9)	厚1.4	重	裏面線刻あり。結晶片岩
11-15	SK016	R032	焼締陶器	擂鉢	5YR4/1褐灰	7.5YR4/1褐灰	(6.8)	-	-	-	堺・明石産か
11-16	SK016	R021	陶器	擂鉢	(外)5YR3/1黒褐	(内)5YR3/1黒褐	(11.5)	-	-	-	
11-17	SK016	R031	陶器	擂鉢	(釉)7.5YR3/2黒褐	(生)7.5YR5/4にぶい褐	(12.4)	(33.4)	-	-	鉄釉厚く、擂目先端ナデそろえる
11-18	SK016	R016	陶器	擂鉢	(外)7.5YR3/1黒褐	(内)7.5YR3/1黒褐	(6.4)	-	-	(14.4)	上野・高取系擂鉢Gタイプ
12-01	SK016	R040	陶器	土瓶	(釉)2.5Y6/2灰オリーブ	(生)2.5Y6/2灰黄	(11.7)	-	(20.8)	8.8	関西系
12-02	SK016	R041	陶器	土瓶	(釉)10YR3/2黒褐	(生)7.5YR5/6明褐	(12.6)	(7.8)	19.2	7.4	肥前系 鉄釉
12-03	SK016	R011	陶器	瓶	(釉)2.5YR3/4暗褐	(生)2.5Y6/3にぶい黄	(20.0)	2.2	-	6.0	現川焼
12-04	SK016	R023	焼締陶器	瓶	(外)5YR4/4にぶい赤褐	(生)5R6/4にぶい赤褐	残(5.1)	-	-	-	備前系貼付地利の一部
12-05	SK016	R034	瓦質土器	焙烙	(外)5YR6/6橙	(内)5Y6/6橙	残(6.0)	(33.4)	-	-	
12-06	SK016	R022	瓦質土器	蓋か	(外)7.5YR6/6橙	(内)7.5YR7/4にぶい橙	残(5.0)	-	-	-	
12-07	SK016	R020	土師質土器	火鉢	(外)N4/灰	(内)N4/灰	(3.2)	(22.8)	-	-	
12-08	SK016	R033	瓦質土器	焜炉か	(外)10Y4/1灰	(生)5Y7/1灰白 (内)10Y4/1灰	残(4.7)	-	-	(22.3)	外:蓮華唐草文 型押し成形
12-09	SK016	R030	瓦質土器	火鉢か	(外)2.5Y4/1灰灰	(内)2.5Y4/1灰灰	12.4	(24.6)	-	14.8	
12-10	SK016	R029	瓦質土器	焜炉	(外)5Y5/1灰	(内)5Y5/1灰 (生)5Y7/1灰白	11.5	-	-	17.7	高台付
12-11	SK016	R042	瓦	擂鉢(瓦) (瓦)	(外)10Y3/1オリーブ黒	(内)10Y3/1オリーブ黒	長11.4	幅15.0	厚5.2	重	-
12-12	SK016	R037	石製品	石臼	-	-	長28.0	幅17.5	厚8.5	重	上臼。凝灰岩
13-01	SX017	R001	染付	火入×香炉	-	-	-	(10.6)	-	-	素地は青磁
13-02	SX018	R003	陶胎染付	小皿	-	-	2.1	(10.0)	-	5.5	漳州窯。内:コンニャク印判(花) 外:コンニャク印判(花)
13-03	SX018	R001	陶器	ミニチュア瓶	(外)10YR8/3浅黄橙	(内)10YR8/3浅黄橙	4.9	0.8	3.0	2.2	玩具か
13-04	SX018	R002	陶器	擂鉢	(釉)5YR2/2黒褐	(生)5YR4/2灰褐	(11.0)	(33.4)	-	-	
13-05	SK024	R001	染付	小壺か	-	-	-	(8.4)	-	-	内:草か 外:草花
13-06	SK031	R005	染付	碗	-	-	-	(10.0)	-	-	外:秋草 口唇部:青色
13-07	SK031	R004	染付	小壺	-	-	4.6	(6.1)	-	2.3	端反 外:草花
13-08	SK031	R002	染付	皿	-	-	4.4	(13.0)	-	(7.0)	外:唐草文
13-09	SK031	R003	瓦質土器	焙烙	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR6/4にぶい橙	残4.8	-	-	-	
13-10	SK031	R001	陶器	擂鉢	(外)2.5YR3/1暗赤灰	(内)2.5YR4/1赤灰	(13.1)	(33.4)	-	-	SX046と遺構間接合
14-01	S033	R001	染付	碗	-	-	-	-	-	(4.2)	畳み付き露胎・高台内外に砂
14-02	S033	R002	染付	小壺	-	-	-	(5.5)	-	-	端反
14-03	SK034	R005	染付	小壺	-	-	3.3	(7.0)	-	(3.4)	端反 外:絵、文字 内:花
14-04	SK034	R001	染付	碗	-	-	5.2	(11.2)	-	(4.0)	広東碗 外:梅唐草
14-05	SK034	R004	染付	碗	-	-	5.1	(10.0)	-	(4.2)	
14-06	SK034	R009	青磁染付	皿	-	-	4.4	(13.3)	-	(8.9)	蛇目高台はぎ
14-07	SK034	R008	土製品	人形	7.5YR5/3にぶい橙	-	(5.3)	-	-	-	
14-08	SK034	R006	陶器	鉢	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR8/2灰白	(4.5)	-	-	7.5	外面下半露胎・白色土刷毛目
14-09	SK034	R003	陶器	皿か	(釉)2.5YR6/2灰黄	(生)7.5YR6/6橙	(1.8)	-	-	4.6	糸切り 外面下半部露胎・砂目積み

表1-3 第14・15・16・17・18・19図掲載遺物観察表

図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
14-10	SK034	R002	白磁	小壺	(釉)7.5GY8/1明綠灰	(生)N8/灰白	2.4	(5.1)	-	(2.4)	
14-11	SK034	R010	金属製品	不明鉄製品	-	-	長10.2	幅8.8	厚0.9	重	雁股形
14-12	SK034	R007	陶器	擂鉢	(外)10YR3/1暗赤灰	(生)7.5YR5/6暗褐 (内)10Y3/1暗赤灰	(8.1)	(36.0)	-	-	上野・高取系擂鉢D*Eタイプ
15-01	SX035	R004	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/2灰褐	(内)7.5YR5/3にぶい褐	1.8	(8.8)	-	-	堅緻
15-02	SX035	R005	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(生・内)7.5YR6/4にぶい橙	残(1.9)	-	-	-	堅緻
15-03	SX035	R001	白磁	碗	(釉)5Y6/2灰オリーブ	(外)5Y7/2灰白	残(2.7)	-	-	5.6	内:施釉 外:露胎
15-04	SX035	R003	瓦質土器	鉢	(外)5Y3/1オリーブ黒	(内)5Y4/1灰	(7.3)	-	-	(27.6)	焼成堅緻
15-05	SX035	R002	瓦質土器	火鉢	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR6/4にぶい橙	(6.4)	-	-	-	焼成堅緻
15-06	SK036	R001	瓦器	椀	(外)10Y2/1黒	(生)10Y7/1灰白 (内)10Y2/1黒	残(1.4)	-	-	-	
15-07	SK036	R002	土師質土器	壺	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(生・内)7.5YR6/4にぶい橙	3.0	(13.0)	-	(7.6)	在地系土師質土器
15-08	SK036	R003	陶器	天目碗	(釉)7.5YR3/2黒褐	(生)2.5Y7/1灰白	(0.9)	-	-	-	瀬戸産
15-09	SK037	R003	染付	小碗	-	-	3.3	7.8	-	3.6	外:花、花束
15-10	SK037	R007	色絵染付	小壺	-	-	3.5	(8.0)	-	(3.6)	外:草花、舟
15-11	SK037	R006	染付	仏飯器	-	-	-	-	-	(4.6)	
15-12	SK037	R002	白磁	仏飯器	(釉)7.5Y7/1灰白	(生)5YR6/6橙	6.2	(6.8)	-	3.8	
15-13	SK037	R001	白磁	小壺	(釉)7.5Y8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	2.5	6.2	-	3.0	
15-14	SK037	R008	染付	碗	-	-	6.2	7.9	-	4.1	筒形碗、内:四方襷、見込:手描五花弁 外:草花・水
15-15	SK037	R004	陶器	鉢	(釉)10YR3/2黒褐	(生)2.5YR4/3にぶい赤褐	残(7.5)	(22.0)	-	-	鉄釉、白色土
15-16	SK037	R005	陶器	碗	(外)10YR7/2にぶい黄橙	(生)7.5R7/4にぶい黄橙 (内)10Y8/3にぶい黄橙	(3.8)	-	-	(4.7)	
15-17	SK039	R007	色絵染付	瓶か	-	-	-	-	-	-	外:花、扇、内面露胎
15-18	SK039	R004	染付	蓋	-	-	2.7	(9.8)	-	(4.1)	外:寿文 内:寿文 四方襷文
15-19	SK039	R005	染付	小皿	-	-	2.3	(9.4)	-	(5.2)	外:連続唐草 内:山水か
15-20	SK039	R009	染付	碗	-	-	5.5	(9.9)	-	4.0	外:草か
15-21	SK039	R006	染付	皿	-	-	3.6	(12.9)	-	(4.5)	内:四方襷文
16-01	SK039	R008	青磁	仏飯器	(釉)5GY7/1明綠灰	(生)7.5Y8/1灰白	(4.7)	-	-	3.7	外:青磁 内:白磁 青磁染付か。
16-02	SK039	R011	青磁	瓶	(釉)5GY7/1明綠灰	(生)5Y8/1灰白	(6.5)	(9.8)	-	-	
16-03	SK039	R010	白磁	菊皿	(釉)N8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	1.5	4.3	-	1.2	
16-04	SK039	R012	陶器	皿	-	-	-	-	-	(4.4)	絵唐津 胎土目積 兜巾不明瞭
16-05	SK039	R002	陶器	擂鉢	(釉)7.5YR2/2黒褐	(生)5YR5/4にぶい赤褐	(5.5)	(31.2)	-	-	鉄釉。刷目上端をナデそえる。
16-06	SK039	R003	陶器	擂鉢	(釉)5YR4/2灰褐	(生)7.5YR6/4にぶい橙	(8.0)	(30.8)	-	-	玉縁。上野・高取系Eタイプ。鉄釉。
16-07	SK039	R001	瓦質土器	焙烙	(外)7.5YR4/2灰褐	(内)7.5YR6/6橙	(7.0)	(31.0)	(33.4)	-	
17-01	SK044	R001	染付	小皿	-	-	2.3	(9.6)	-	(5.4)	外:連続唐草 内:松(山水か)
17-02	SK044	R004	瓦質土器	火鉢	(外)7.5Y4/1灰	(生)2.5G15/1オリーブ灰(内)7.5Y4/1灰	残10.8	(29.5)	-	-	円形。四脚
17-03	SK044	R002	陶器	蓋か	(釉)7.5YR3/4暗褐	(生)7.5YR5/3にぶい褐	(2.9)	(9.0)	-	-	外:褐釉 内:露胎
17-04	SK044	R003	土師質土器	皿	(外)10YR6/3にぶい黄橙	(内)10YR6/3にぶい黄橙	(28)	(11.8)	-	-	
17-05	SK044	R005	金属製品	鉄釘	-	-	長8.3	幅2.1	厚1.4	重18.6g	
17-06	SK044	R006	金属製品	鉄釘	-	-	長7.2	幅1.7	厚0.9	重10.8g	
17-07	SX045	R001	染付	碗	-	-	-	-	-	-	外:界線
17-08	SX045	R002	陶器	皿	(釉)7.5Y3/2オリーブ黒	(生)7.5Y4/1灰	(1.9)	(11.6)	-	-	
17-09	SX045	R003	白磁	皿	(釉)2.5GY8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	(1.8)	-	-	-	端反皿 森田分類E-2群
17-10	SX045	R004	白磁	皿	(釉)5GY8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	(0.6)	-	-	-	内面ヘラ彫り
17-11	SX045	R005	陶器	皿か	(釉)5Y6/3オリーブ黄	(生)2.5Y7/4浅黄	残(1.4)	-	-	-	鎌縁状口縁
18-01	SX046	R027	染付	碗	-	-	4.8	(9.0)	-	(2.8)	格子に吹墨、笹
18-02	SX046	R051	染付	碗	-	-	6.0	(10.6)	-	(4.0)	外:帆。青海波紋 内:雷文 見込部:山水
18-03	SX046	R021	染付	碗	-	-	-	-	-	(4.0)	内:井桁 外:
18-04	SX046	R006	染付	碗	-	-	5.0	(10.0)	-	(4.0)	草花文
18-05	SX046	R043	染付	碗	-	-	5.1	(9.7)	-	(4.0)	陶胎染付。外:蝶と草
18-06	SX046	R022	染付	碗	-	-	-	-	-	4.3	内面見込み:五弁花纹 外底:大明成化年製
18-07	SX046	R038	染付	碗	-	-	-	-	-	(3.2)	内面赤絵円図文
18-08	SX046	R003	陶胎染付	碗	-	-	-	(11.8)	-	-	草花文
18-09	SX046	R005	染付	碗	-	-	4.9	9.0	-	3.1	色絵 近代か
18-10	SX046	R014	染付	紅皿	-	-	2.5	6.4	-	3.3	内面に紅付着
18-11	SX046	R041	染付	小壺	-	-	5.2	6.0	-	2.9	
18-12	SX046	R033	染付	小壺	-	-	4.6	6.2	-	2.9	鉄絵 外:円の中に草文
18-13	SX046	R032	染付	小壺	-	-	4.3	(6.4)	-	(2.7)	外:界線
18-14	SX046	R036	染付	小壺か	-	-	-	(6.4)	-	-	型紙刷 近代 外:雲・円・梅樹・詩歌 混入か
18-15	SX046	R035	染付	小壺	-	-	2.9	(6.0)	-	(2.4)	内:草文 混入か
18-16	SX046	R029	染付	小壺	-	-	3.3	(7.5)	-	2.5	内外面:草文
18-17	SX046	R025	染付	蓋	-	-	2.3	(8.8)	-	(3.6)	外:草花文
18-18	SX046	R030	染付	蓋	-	-	-	-	-	(4.0)	外:草花文
18-19	SX046	R058	染付	蓋	-	-	3.0	(9.2)	-	(3.8)	
18-20	SX046	R037	色絵染付	人形	-	-	-	-	-	0.6	ウサギ形
18-21	SX046	R034	白磁	皿	-	-	-	-	-	(5.2)	瀬戸美濃産、寿字文
18-22	SX046	R047	染付	輪花皿	-	-	2.4	8.8	-	4.5	内面:菊花文(押し出し成形) 蜷唐草
18-23	SX046	R031	染付	瓶	-	-	-	-	-	(10.2)	外:草木
18-24	SX046	R024	染付	猪口	-	-	5.1	(7.6)	-	5.4	外面:矢筈文 蛇目高台
18-25	SX046	R052	色絵染付	小瓶(祐神酒器)	-	-	-	-	-	3.9	外:梅に若松、草花文。
18-26	SX046	R045	染付	皿	-	-	-	-	-	(8.2)	内:斜格子。雲木。外底部:渦福
18-27	SX046	R002	陶胎染付	瓶	-	-	-	-	-	6.7	
18-28	SX046	R049	陶胎染付	火入れ	-	-	-	-	-	-	
19-01	SX046	R046	染付	水差し	-	-	8.0	(9.2)	-	(8.0)	焼継文字 外:花
19-02	SX046	R028	染付	小皿	-	-	2.6	8.4	-	4.1	内面:草花文
19-03	SX046	R042	染付	皿か(角皿)	-	-	-	-	-	(6.8)	焼継文字
19-04	SX046	R026	染付	仏飯器	-	-	-	-	-	3.7	外:界線 草文か
19-05	SX046	R012	染付	仏飯器	-	-	5.1	(6.0)	-	3.3	外:蜻唐草
19-06	SX046	R040	染付	筒型碗	-	-	-	(7.8)	-	-	近代か、型押し成形。外:人物と花 内:輪宝繋ぎ
19-07	SX046	R010	陶器	蓋	(釉)5Y6/3オリーブ黄	(生)10YR6/3にぶい黄橙	4.8	つまみ4.2	13.9	15.7	関西系陶器。鍋蓋か
19-08	SX046	R001	土師質土器	急須	(外)2.5Y6/2灰黄	(内)2.5Y6/2灰黄	7.0	(6.9)	(10.4)	6.4	外底部墨書・型押成形。
19-09	SX046	R039	土製品	人形	7.5YR6/4にぶい橙	-	6.8	-	-	-	犬形
19-10	SX046	R057	金属製品	鉄釘か	-	-	長8.6	幅1.9	厚1.4	重25.2g	
19-11	SX046	R054	金属製品	キセル火皿	-	-	長5.5	幅2.7	厚1.0	重10.8g	青銅製
19-12	SX046	R056	金属製品	キセル火皿	-	-	長5.9	幅1.7	厚1.0	重11.8g	青銅製

表1-4 第19・20・21・22・23・24図掲載遺物観察表

図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
19-13	SX046	R053	金属製品	キセル吸口	(-)	-	長5.8	幅1.2	厚1.1	重3.1g	青銅製
19-14	SX046	R055	金属製品	かんざし	-	-	長16.7	幅0.8	厚0.2	重1.8g	青銅製
19-15	SX046	R017	石製品	砥石	-	-	長22.0	幅7.0	厚2.9	重802.2g	三面を砥石として用いる。流紋岩
20-01	SX046	R007	陶器	鉢	(外)2.5Y5/4黄褐	(生)10YR7/3にぶい黄褐(内)2.5Y5/4黄褐	8.4	(18.4)	-	7.1	注口付き。外底部墨書。
20-02	SX046	R050	青磁	小瓶(花生)	(釉)2.5GY6/1オリーブ灰	(生)2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	
20-03	SX046	R023	青磁	小瓶(花生)	(釉)5GY7/1明オリーブ灰	(生)5Y8/1灰白	(7.0)	-	(6.8)	(5.5)	
20-04	SX046	R044	青磁	瓶(花生)	(釉)7.5Y7/2灰白	(生)N8/0灰白	残2.8	(8.7)	-	-	
20-05	SX046	R013	陶器	小碗	(釉)5Y7/4浅黄	(生)5Y8/2灰白	4.3	8.5	-	3.2	関西系陶器。端反
20-06	SX046	R048	陶器	蓋	(釉)7.5Y7/2黄橙	(生)10YR7/3にぶい黄橙	(1.1)	-	(4.4)	-	
20-07	SX046	R015	陶器	鉢	(釉)10YR5/3にぶい黄褐	(生)10YR6/1にぶい黄橙	(5.5)	(21.0)	-	-	内外面に化粧土でハケ目
20-08	SX046	R018	陶器	蓋か	(釉)10Y7/1灰白	(生)2.5Y7/2灰黄	(3.7)	-	-	(22.0)	全面施釉。白色
20-09	SX046	R004	陶器	碗	(釉)7.5Y6/1灰	(生)10YR5/2灰黄褐	(4.5)	-	-	4.8	釉が高台置付、高台内部までかかる。
20-10	SX046	R009	陶器	蓋	(釉)青緑釉	(生)10R4/3赤褐	3.9	つまみ2.0	(9.2)	(6.2)	土瓶蓋か。青緑釉
20-11	SX046	R008	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR6/4にぶい橙	(2.0)	(12.4)	-	-	
20-12	SX046	R011	瓦質土器	火鉢か	(外)2.5Y7/2灰黄	(内)2.5Y7/2灰黄	7.0	(11.0)	-	(11.2)	小型
20-13	SX046	R019	土師質土器	コロロサナ	7.5YR6/4にぶい橙	-	1.2	(12.0)	-	(10.8)	多孔皿状製品
20-14	SX046	R016	瓦質土器	火鉢か	(外)10YR6/3にぶい黄橙	(内)2.5Y7/2灰黄	(4.7)	-	-	-	角型。箱火鉢か
21-01	SX052	R001	染付	小坏	-	-	2.8	6.8	-	2.9	端反 内:幾何学文 外底部:「イ」
21-02	SX052	R002	染付	小坏	-	-	3.7	(8.8)	-	3.8	端反 外:草花 口唇部 青釉
21-03	SX052	R003	青磁染付	小碗	-	-	4.9	(10.2)	-	(5.4)	内:コンニャク印判5花弁文
21-04	SX052	R004	陶胎染付	碗	-	-	-	(10.0)	-	-	外:不明 被熱により文様の詳細不明
21-05	SX052	R005	色絵染付	小碗か	-	-	-	-	-	2.4	外:鳥(色絵)
21-06	SX052	R007	土師質土器	把手	(外)2.5Y6/2灰黄	(内)2.5Y5/3黄褐	(3.8)	-	-	-	内面紅付着 関西系陶器か
21-07	SX052	R006	土師質土器	植木鉢	(外)10YR8/4浅黄橙	(内)10YR7/4にぶい黄橙	9.0	(14.5)	-	(12.0)	練上手、胎土精良
21-08	SX052	R008	金属製品	キセル吸口	-	-	長3.5	幅0.9	厚0.05	重2.9g	青銅製
22-01	SX056	R012	陶胎染付	碗	-	-	6.2	(10.2)	-	(5.2)	外:唐草文
22-02	SX056	R011	染付	碗	-	-	5.3	(10.1)	-	4.1	外:草花文か
22-03	SX056	R007	陶胎染付	碗	-	-	6.6	9.7	-	4.3	外:草花、抽象文
22-04	SX056	R009	染付	碗	-	-	-	-	-	(4.4)	筒形碗 外:矢筈文 外底:箇筒 内:四方襷文、五弁花纹
22-05	SX056	R010	染付	筒形碗	-	-	-	(8.4)	-	-	筒形碗 内:四方襷文 外:草花、幾何学文
22-06	SX056	R006	染付	筒形碗	-	-	6.1	(11.5)	-	(3.9)	広東碗 外:梅樹 内:四方襷文 5弁花纹
22-07	SX056	R013	赤絵染付	小瓶か	-	-	-	-	-	-	
22-08	SX056	R004	陶胎染付	皿	-	-	-	(12.5)	-	-	見込み蛇目はぎ
22-09	SX056	R005	染付	皿×蓋	-	-	-	(12.0)	-	-	口銃
22-10	SX056	R008	陶器	輪花皿	(釉)2.5Y5/4黄褐	(生)2.5Y6/1灰黄	(4.5)	(23.8)	-	-	内:化粧土ハケ目
22-11	SX056	R001	瓦	軒丸瓦	-	-	長(3.1)	幅(8.5)	厚 -	重 - g	
22-12	SX056	R003	石製品	小型硯	-	-	長(4.5)	幅(1.9)	厚(0.7)	重9.5g	結晶片岩
22-13	SX056	R002	陶器	油さし	(釉)2.5Y2/1黒	(生)10YR6/4にぶい黄橙	(11.5)	1.6	-	-	外面鉄釉
22-14	SK067	R002	染付	碗	-	-	-	-	-	4.2	外:草か
22-15	SK067	R003	染付	筒形碗	-	-	-	-	-	-	外:菊花 内:四方襷文
22-16	SK067	R004	白磁	碗	(釉)10Y8/1灰白	(生)5Y7/2灰白	4.8	8.9	-	3.5	
22-17	SK067	R001	陶器	火入	(釉)2.5Y7/2灰黄	(生)2.5Y8/3淡黄	(6.3)	9.7	-	-	
22-18	SX068	R003	染付	碗	-	-	-	-	-	-	
22-19	SX068	R004	染付	蓋	-	-	-	-	-	-	外:不明 内:四方襷文
22-20	SX068	R001	石製品	不明	-	-	長(5.2)	幅(4.7)	厚(1.8)	重74.4g	砂岩製
22-21	SX068	R002	陶器	皿	(釉)10Y5/2オリーブ灰	(生)2.5Y7/1灰白	(2.0)	-	-	(4.4)	高台露胎 見込み部:蛇目はぎ
22-22	SX068	R005	焼締陶器	擂鉢	(外)10R4/6赤	(内)10R4/6赤	10.4	(27.0)	-	(14.1)	明石焼か
22-23	SX056	R014	陶器	擂鉢	(釉)2.5YR3/1暗赤	(生)2.5YR5/4にぶい赤褐	(8.6)	-	-	12.1	
23-01	SX069	R003	青磁染付	筒形碗	-	-	-	-	-	(3.6)	高台量付露胎。見込み部:コンニャク印判(五弁花纹)
23-02	SX069	R004	陶胎染付	碗	-	-	-	-	-	-	外:草
23-03	SX069	R001	陶器	鉢	(釉)10YR4/3黄橙	(生)2.5YR4/4にぶい赤褐	残(4.7)	-	-	(9.0)	
23-04	SX069	R002	陶器	鉢	(釉)7.5YR3/1黒褐	(生)5YR4/6赤褐	(7.7)	-	-	-	二彩唐津。鉢体部
23-05	SX073	R001	染付	端反碗	-	-	5.0	8.4	-	3.6	瀬戸・美濃産 端反碗 口銃 外:草 内:葉
23-06	SX078	R006	染付	碗	-	-	4.7	(9.4)	-	(3.8)	
23-07	SX078	R010	陶胎染付	小碗	-	-	-	(8.7)	-	-	外:葉
23-08	SX078	R016	染付	瓶	-	-	-	-	-	(4.7)	外:草 置付内面に砂付着
23-09	SX078	R017	陶胎染付	皿	-	-	3.3	11.4	-	4.2	内:葉 高台露胎。見込み蛇目はぎ
23-10	SX078	R014	白磁	碗	(釉)N8/0灰白	(生)7.5Y8/1灰白	(5.0)	(10.0)	-	-	
23-11	SX078	R008	青磁	鉢	(釉)10GY7/1明緑灰	(生)N8/0灰白	(7.4)	(21.8)	-	-	内面ヘラ彫り
23-12	SX078	R011	白磁	皿	(釉)7.5GY8/1明緑灰	(生)N8/0灰白	(1.8)	-	-	4.6	高台露胎
23-13	SX078	R004	陶器	壺	(外)2.5Y6/4にぶい黄	(生)5YR5/4にぶい赤褐(内)5Y7/3淡黄	(6.7)	-	-	(12.7)	
23-14	SX078	R007	陶器	瓶	(釉)10YR2/3黒褐	(生)2.5Y7/2灰黄	残(6.4)	-	-	-	
23-15	SX078	R009	陶器	火入れか	(外)5Y3/2オリーブ黒	(生)2.5Y7/2灰黄	(5.2)	-	-	(5.6)	外:化粧土でハケ目。内:露胎
23-16	SX078	R012	陶器	皿	(釉)7.5Y5/3灰オーブ	(生)2.5Y8/2灰白	3.5	11.1	-	4.4	灰釉。高台露胎。見込み部:蛇目はぎ
23-17	SX078	R001	陶器	鉢	(釉)2.5Y8/3淡黄	(生)10YR8/4浅黄橙	(4.3)	-	-	(8.0)	内面:同心円状ハケ
23-18	SX078	R019	陶器	碗	(釉)2.5Y8/2灰白	(生)7.5YR4/2灰褐	5.4	(10.4)	-	(4.2)	
23-19	SX078	R003	焼締陶器	瓶か	(外)2.5YR5/6明赤褐	(内)2.5YR5/6明赤褐	(2.6)	-	-	(6.0)	
23-20	SX078	R015	青磁	香炉か	(釉)7.5GY7/1明緑灰	(生)5Y8/1灰白	(1.6)	-	-	-	竜泉窯系。中世
23-21	SX078	R013	瓦器	椀	(外)N5/灰	(内)N7/灰白	(3.4)	-	-	-	産地不明。九州産か。
23-22	SX078	R018	銅製品	セラル火皿転用品	-	-	長1.6	幅1.7	厚0.2	重0.9g	キセル火皿を敲打し、銅錢として転用したもの。
23-23	SX078	R005	瓦質土器	鉢	(外)N3/0暗灰	(生)7.5YR6/6橙(内)N3/0暗灰	残(8.9)	-	-	-	
23-24	SX078	R002	焼締陶器	擂鉢	(外)2.5YR5/4にぶい赤褐	(内)2.5YR5/6明赤褐	(5.7)	-	-	10.7	
24-01	表土	R002	染付	壺	-	-	-	-	-	-	近現代。外:「大分市京○(京泊か) 井(上)酒舗」
24-02	表土	R004	染付	碗か	-	-	-	-	-	5.2	焼絆文字。外:草花 内:船か
24-03	表土	R005	染付	碗	-	-	-	-	-	(4.2)	焼絆文字。外:若松 内:若松
24-04	表土	R001	染付	小坏	-	-	2.7	6.8	-	2.5	近代。外底部:「祝」 外:「大分線鉄道開通式協賛会」
24-05	表土	R007	土師質土器	焙烙	(外)10YR4/2灰黄褐	(内)7.5YR7/4にぶい橙	7.3	(31.0)	(32.2)	-	
24-06	表土	R006	土製品	土錘	7.5Y6/4にぶい橙	7.5Y6/4にぶい橙	10.3	-	-	-	
24-07	表土	R003	青磁	碗	(釉)10Y5/2オリーブ灰	(生)5Y7/1灰白	(2.9)	-	-	5.4	龍泉窯系。見込み部:陰刻花文 高台外面施釉
24-08	表土	R009	青銅製品	かんざし	-	-	長14.3	幅1.1	厚0.6	重9.3g	青銅製



第25図 SX015・020平面図 (S=1/30)・土層堆積状況模式図

(2) 近世後期（18世紀後半～19世紀前半）

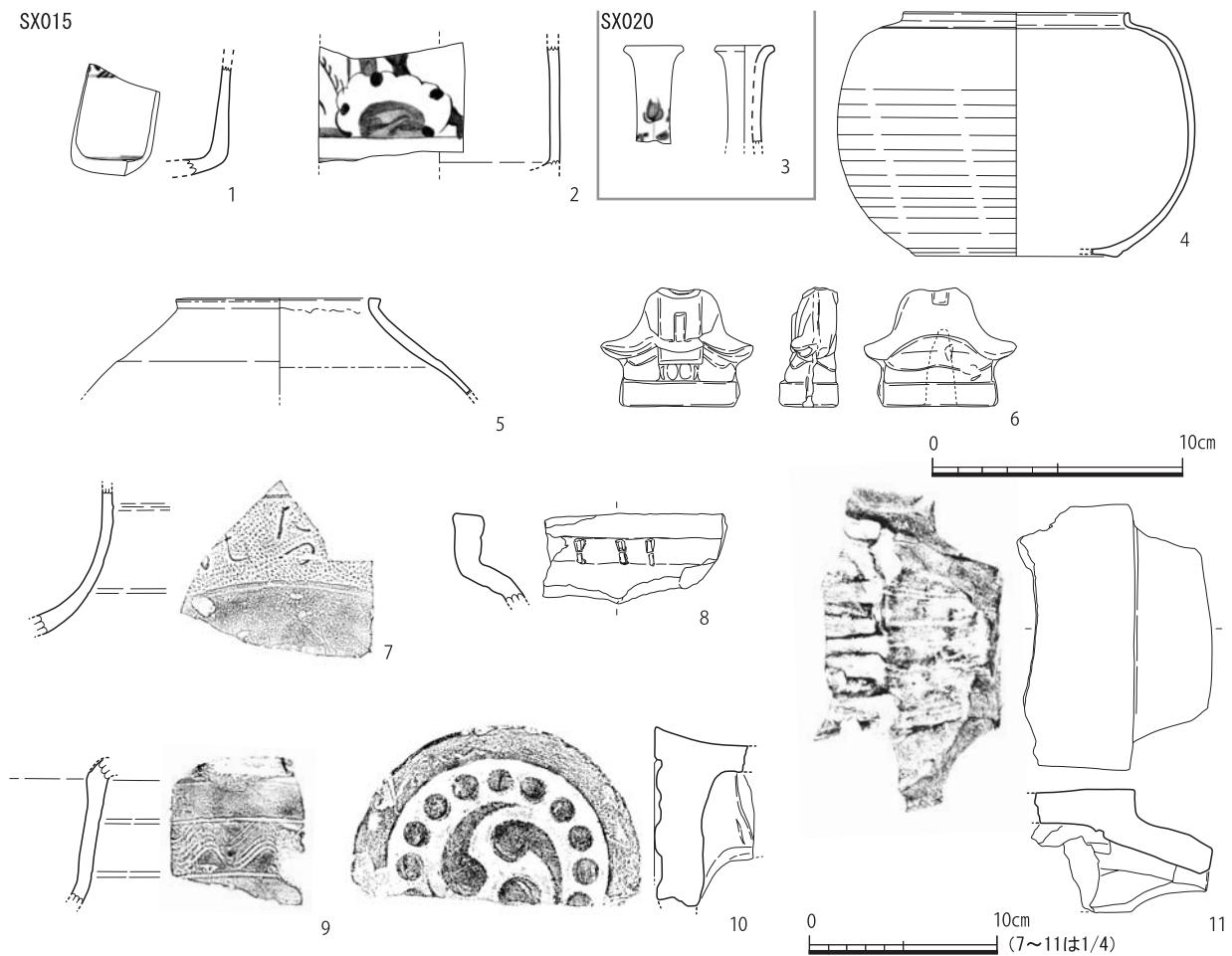
この時期に比定される遺物は調査区の大部分を占める土坑群から一定量出土しているが、明確にこの時期に比定される遺構は数少ない。

SX015・SX020

SX015、SX020は東西方向の石組遺構である。当初、石組の溝と想定したが、礫が充されるため、溝である可能性は低い。両遺構は内法で約6.7～6.8m、外法で約9.0～9.2mを隔てて平行に位置する。SX015の方が長大であるが、双方共、単一の施設に伴う遺構の可能性がある。

SX015は全長4.3m、最大幅0.65mの石組遺構である。断割の結果より、深さ約0.6mの溝状遺構を掘削した後に石を充填して造られたものと推測される。中央部には上面の平たいやや大型の石が設置されている。SX020は現存長2.9m、最大幅0.6mの石組遺構である。東部が攪乱を被っており、規模は不明である。SX015と同様の構造物であるが、充填される石は中央部では小さく、東端、西端では大きい傾向がある。

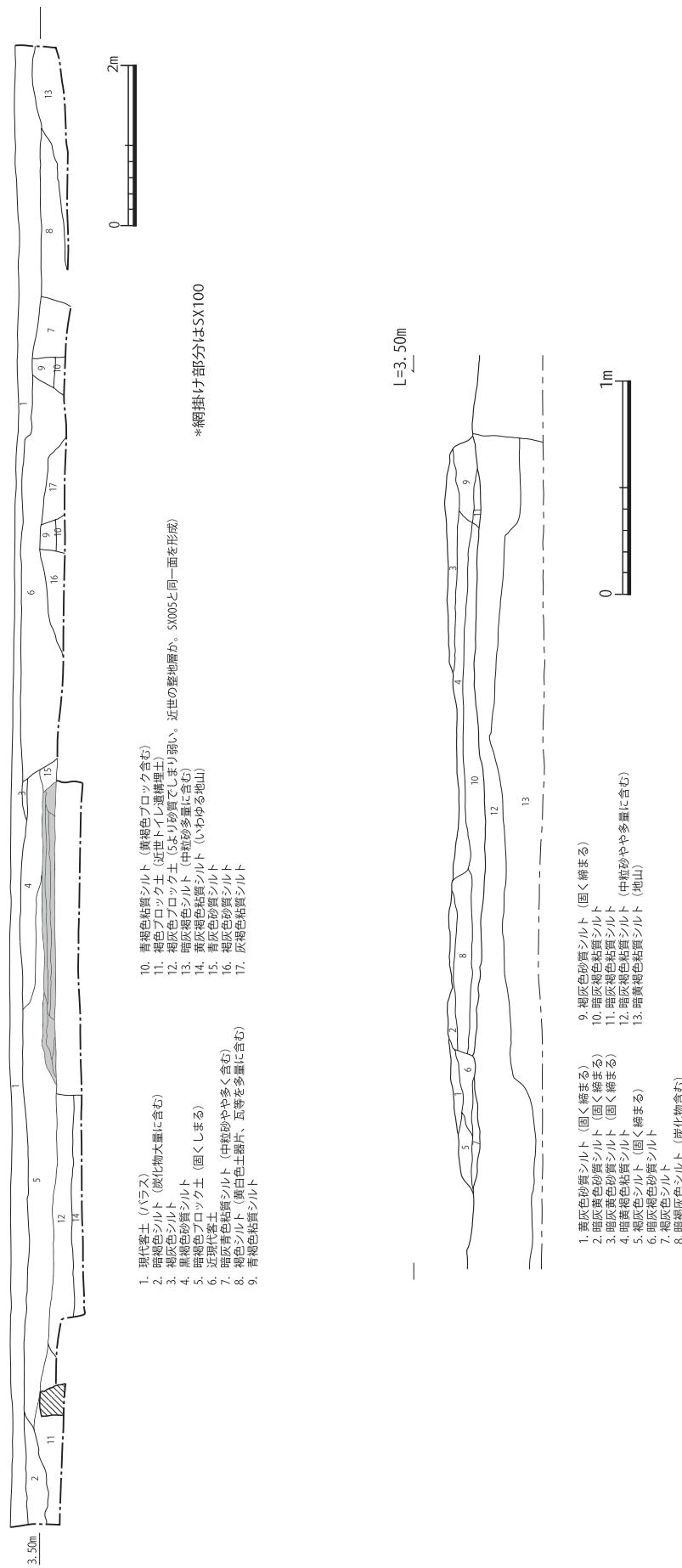
県内の近世城下町遺跡における石列の類例としては、杵築城下町遺跡19調査区1や、府内城・城下町跡第12次SF073、府内城・城下町跡第14次SX230が挙げられる。府内城・城下町跡第12次SF073は18世紀



第26図 SX015・20出土遺物実測図 (S=1/3)

末～19世紀初頭以降に比定される方形の石組み遺構であり、石の埋置に伴う溝の存在も確認されている。石組の一辺の長さは約6.3mである。調査担当者は礎石建物跡と解釈している。また、府内城・城下町跡第14次SX230の石列は同時期の遺構であるが、こちらは町割の区画と想定されている。町81次調査におけるSX015、SX020は、仮に方形の礎石建物跡の対辺と想定すると一辺の長さ9.0～9.2m、即ち約五間の建物跡となる。とはいえ、SX015、SX020に隣接する空間には顕著な削平が見受けられないにも拘らず、他の2辺が検出されなかった。よって、区画遺構である可能性もある。しかし、両遺構の内法は通常の区画としては狭すぎる。建物跡・区画施設の想定はいずれも棄却される。

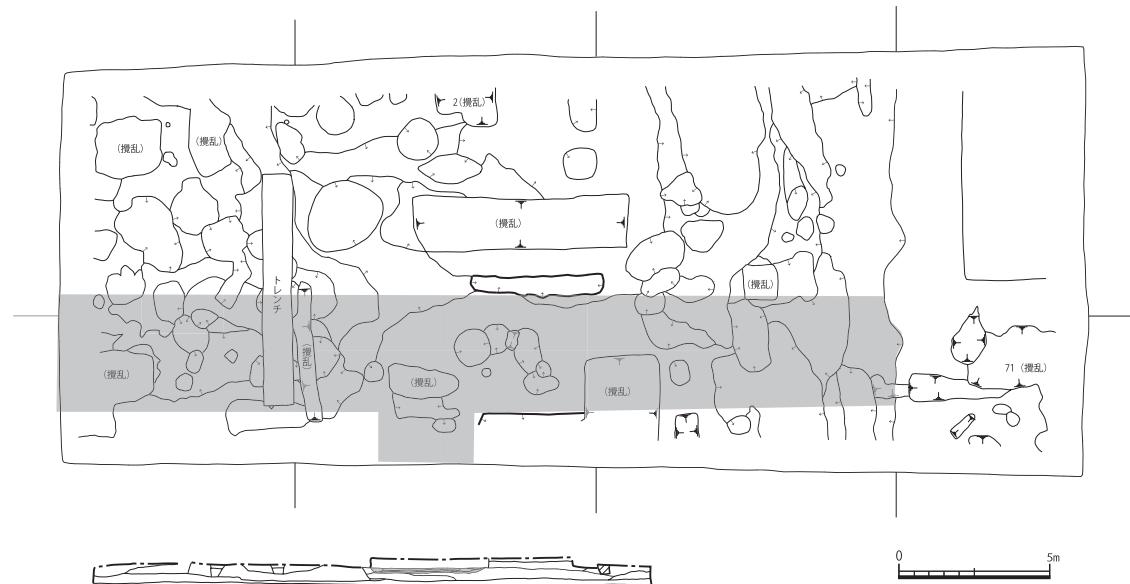
そこで、調査担当者としては、SX015、SX020を町道に関連する遺構と評価したい。というのも、調査区南壁の堆積状況の観察、明治時代の地籍図の照合等より、両遺構間に東西方向の道路が存在した蓋然性が高いからである。SX015、SX020は調査区南端付近で検出された東西方向の石列であるが、両遺構の真南に平行移動すると、調査区南壁で幅約3.8mの積土状堆積 (SX100) が検出されている。SX015、SX020の西端部を真南に平行移動すると、SX100の東端部にほぼ接する位置関係にある。SX100は南北方向の断面台形の積土状堆積である。堆積土は硬化しており、道路状遺構と推測される。ただし平面的には良好に検出されず、また、対面の調査区北壁では確認できていない。即ち、発掘現場ではその性格と、SX015、SX020との関連性を明確に示す所見は得られていない。しかしながら、明治時代の調査地点周辺の地籍図と照合すると、東西方向の町道(本道)と南北方向の町道(脇道)とのT字形地割がほぼこの地点で見出されるのである。明治時代の地籍図が近



第27図 調査区南壁土層図 (S=1/80)・SX100土層図 (S=1/30)



第28図 近世府内城下町の地割と町81次調査区（網掛け部が町81）



第29図 地割・SX015・020・100より復原される町道

世城下町の短冊形地割を踏襲している事は、既往の府内城・城下町の発掘調査によって判明している。よって、SX015・020・100は地割に関連する遺構と推定できる。また、SX015・020の内法と積土堆積基部の幅の間尺は、それぞれ約3.5間、約2間となるが、この数値は近世府内城下町の道幅とほぼ一致する。貞享元年(1684)の「万覚」には町人町の町名及び町の道幅が記されているが、塩九升町の町道は南で3.5間、北で4.5間である。また、城下町の脇道も2間でほぼ統一されている。SX015、SX020、SX100は地割線上に存在した町道関連遺構であろう。現地の調査では攪乱の影響もあって十分な材料が必ずしも得られなかつたが、上記の検討より、SX015、SX020は東西方向の町道に伴う遺構と判断され、SX100はこの町道にT字形に交差する南北方向町道と評価できる。道路状遺構本体は機能停止後に破壊されたために、SX015・020以外の遺構が遺存していないであろう。SE034

調査区西寄り地点で検出された井戸跡である。SX015・020の延長線上に想定される東西町道のちょうど北に隣接する位置にあたる。瓦質の井筒が中心部で検出され、井筒内には砂が充填されていた。安全性の考慮と工期の都合上、この遺構は完掘できなかつたが、出土遺物の帰属年代は18世紀後半から19世紀前半に比定され、道路と並存した可能性がある。

SX015・SX020出土遺物（第26図）

3のみSX020、他はSX015またはSX015断ち割りの際に出土した遺物である。1は青磁染付碗である。内面に四方禪文を施す。2は染付瓶か。外面に笹の文様、内面は露胎。3は染付瓶か。外面に草花文を施す。4は土瓶、5は陶器壺もしくは土瓶である。6は土製品人形である。6は瓦質土器鉢破片である。火鉢か。焼成が堅固で、外面に「たつ」「み」の2文字が表現される。ひらがなの十二支が体部をめぐっていたものか。8は瓦質土器甕、9は瓦質土器鉢か。10は三つ巴文軒丸瓦、11は丸瓦である。

表2 第26図掲載遺物観察表

図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
26-01	SX015	R010	青磁染付	碗	-	-	-	-	-	-	内:四方禪文
26-02	SX015下層	R005	染付	瓶か	-	-	-	-	-	-	外:笹 内:露胎
26-03	SX020	R001	染付	瓶か	-	-	-	2.3	-	-	外:草花
26-04	SX015	R008	土師質土器	土瓶	(外)7.5Y6/2灰オリーブ	(生)N8/0灰白 (外)7.5Y6/2灰オリーブ	9.7	(8.9)	(14.2)	(8.0)	
26-05	SX015下層	R004	陶器	壺×土瓶	(釉)5YR3/1黒褐	(生)5YR6/6橙	(3.9)	(7.2)	-	-	
26-06	SX015	R009	土製品	人形	10YR7/4にぶい黄橙	-	(4.8)	幅(6.1)	厚(2.4)	-	
26-07	SX015下層	R003	瓦質土器	鉢	(外)N4/灰	(内)N4/灰	(7.6)	-	-	-	焼成堅緻 外:「たつ」「み」
26-08	SX015	R007	瓦質土器	甕	(外)2.5GY4/0灰	(生)2.5GY8/1灰白 (内)2.5GY4/0灰	残(4.2)	-	-	-	
26-09	SX015	R006	瓦質土器	鉢か	(外)5Y5/1灰	(内)5Y5/1灰	残(7.1)	-	-	-	
26-10	SX015下層	R001	瓦	軒丸瓦	-	-	長(4.9)	幅(9.5)	厚1.4	-	三つ巴文
26-11	SX015下層	R002	瓦	丸瓦	-	-	長(9.4)	幅(4.5)	厚1.7	-	

(3) 近世初頭

近世府内城下町の造営にあたり、慶長期に城下町を巡る外曲輪土塁が完成する。明治時代の地割は近世城下町の地割りをほぼ完全に踏襲しており、地籍図より近世城下町の町割りを正確に復原する事が可能である。本調査区は地割線の位置から、調査区東端付近で府内城下町の外曲輪となる南北方向の土塁の存在が復原されるが、想定通り地割線上を端部とする土塁基部を検出した(SF040)。SF040はSX100（自然堆積層）上面に直接形成されているようである。この遺構と同時期の、近世城下町形成段階に帰属する遺構ならびに整地層は検出されなかつた。SF040は端部から東にかけて堆積が次第に厚くなり、調査区東端では厚さ約0.5mに達する。しかし、上面ではほとんど傾斜が見られず、最も標高の高い調査区東端では標高約3.15mで検出され、最も西では標高約3.10mである。むしろ、いわゆる「地山」であるSX100の標高に差異が認められ、調査区東端では標高約2.7m、SF040西端では標高2.9mで検出されている。土塁の積土は水平堆積である。各層の土質はほぼ均

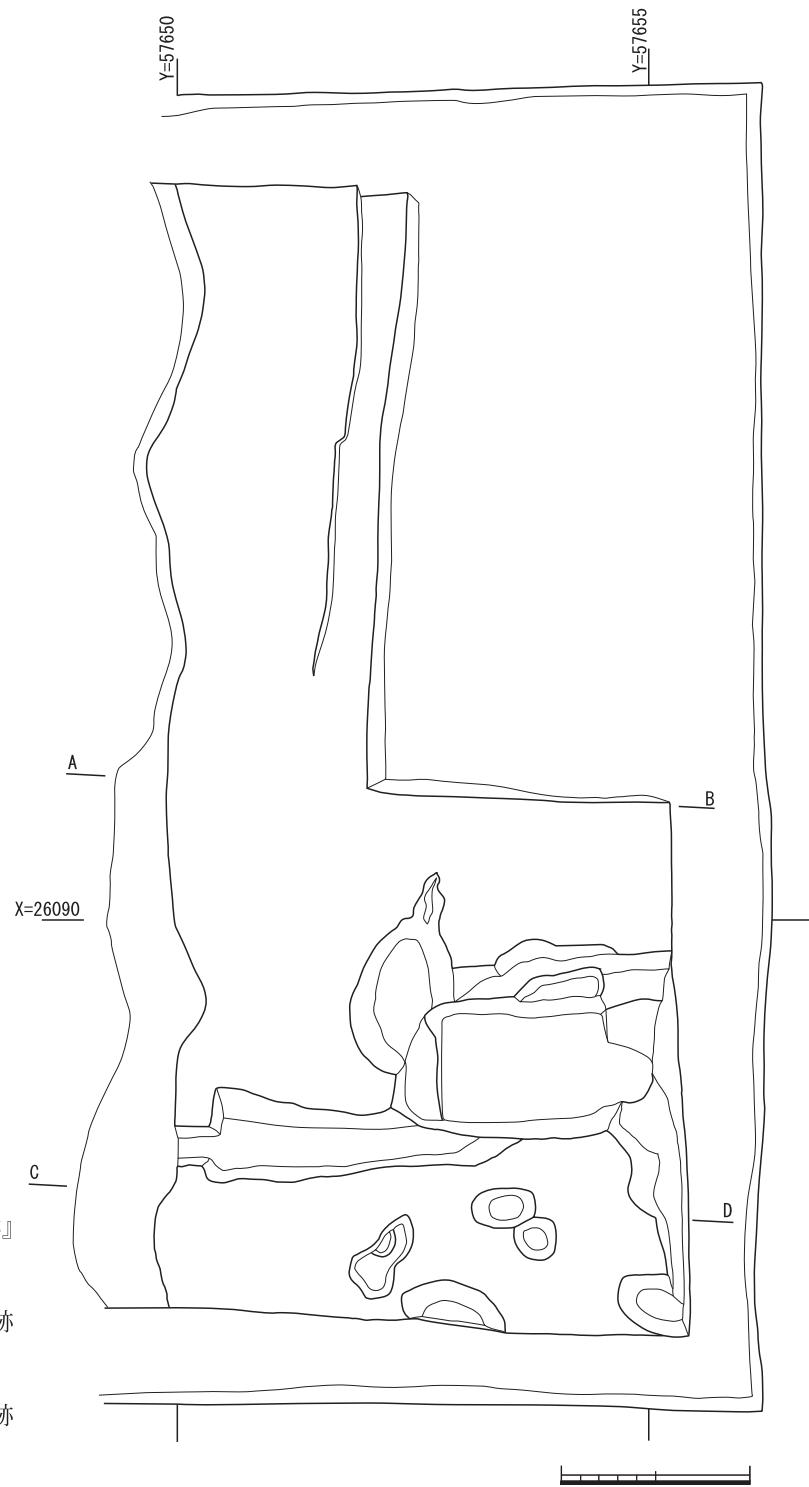
質で、盛土の細かな単位はほとんど判別されなかった。SF040は廃絶後に整地層SX045によって被覆される。SX045は陶磁器の小破片が少量出土しているが、帰属年代は不確定である。17世紀後半以降に位置付けられる可能性がある。SF040の上面に形成される遺構は近現代の攪乱のみで、近世の遺構は確認されていない。

SF040出土遺物

第25図1、2、3は青花碗である。4は京都系土師器皿、5は在地系土師質土器壊、6は肥前系染付蓋である。19世紀中頃か。小破片がSF040から出土しているが、大部分は上層遺構から出土している。混入品か。7は染付碗である。漳州窯産か。8は白磁片、9は青花片である。内外面に花と幾何学文が陰刻されている。10は備前焼交差擂り目擂鉢である。11は椀形鉄滓である。

【参考文献】

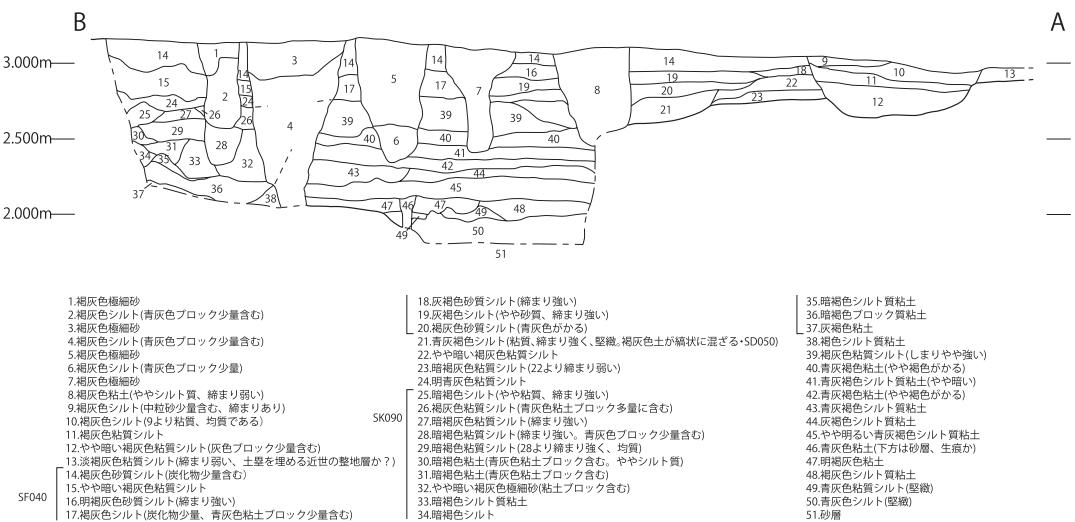
- 大分県教育委員会2004『杵築城下町遺跡』
大分県文化財調査報告書第169輯
大分市教育委員会2003『府内城・城下町跡
第12次調査報告書』
大分市教育委員会2003『府内城・城下町跡
第14次発掘調査報告書』



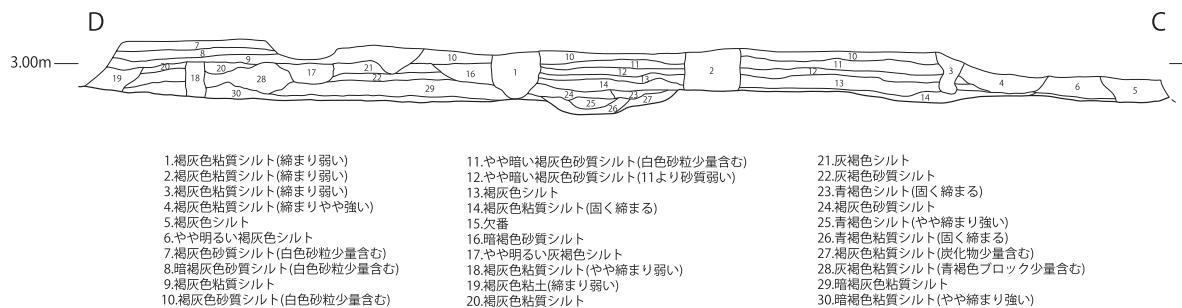
第30図 SF040平面図 (S=1/80)

表3 第33図掲載遺物観察表

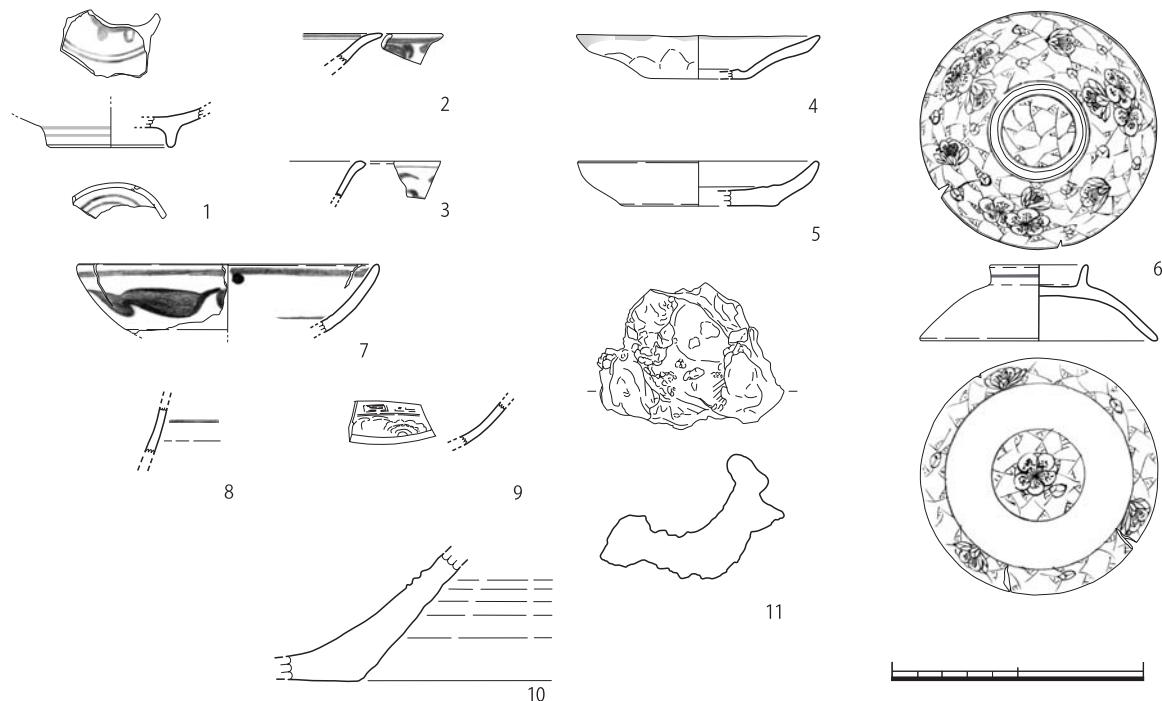
図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
33-01	SF040	R001	染付	碗	-	-	-	-	-	(2.6)	
33-02	SF040	R002	染付	碗	-	-	-	-	-	-	
33-03	SF040	R003	染付	碗	-	-	-	-	-	-	
33-04	SF040	R009	京都系土師器	皿	(外)10YR8/4浅黄橙	(内)10YR8/4浅黄橙	(1.7)	(9.6)	-	(4.0)	
33-05	SF040	R010	土師質土器	小皿	(外)5YR6/4にぶい橙	(内)5YR6/4にぶい橙	1.8	(9.4)	-	(6.2)	在地系口クロ目土師器皿
33-06	SF040	R008	染付	蓋	-	-	3.0	(9.4)	-	(3.8)	内:花と幾何学文 外:花と幾何学文
33-07	SF040	R004	陶胎染付	碗	-	-	-	(11.8)	-	-	外:葉 内:界線 州窯?
33-08	SF040	R005	陶胎染付	碗か	-	-	-	-	-	-	
33-09	SF040	R006	白磁	碗×皿	-	-	-	-	-	-	
33-10	SF040	R011	備前	擂鉢	(外)5YR4/3にぶい赤褐	(内)5YR4/3にぶい赤褐	(5.1)	-	-	-	交差すり目
33-11	SF040	R007	鉄製品	鉄滓	-	-	長(5.8)	幅7.4	厚5.0	重99.0g	



第31図 SF040土層図(1) (S=1/50)



第32図 SF040土層図(2) (S=1/50)

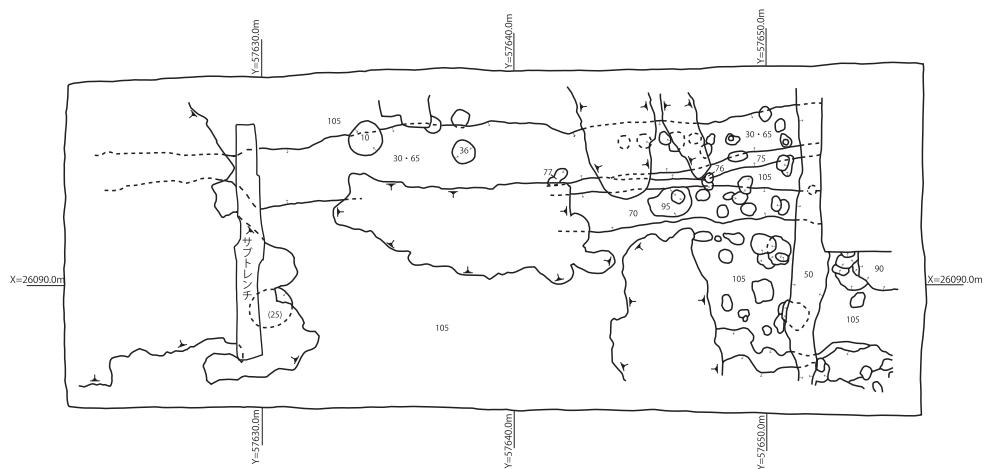


第33図 SF040出土遺物実測図 (S=1/3)

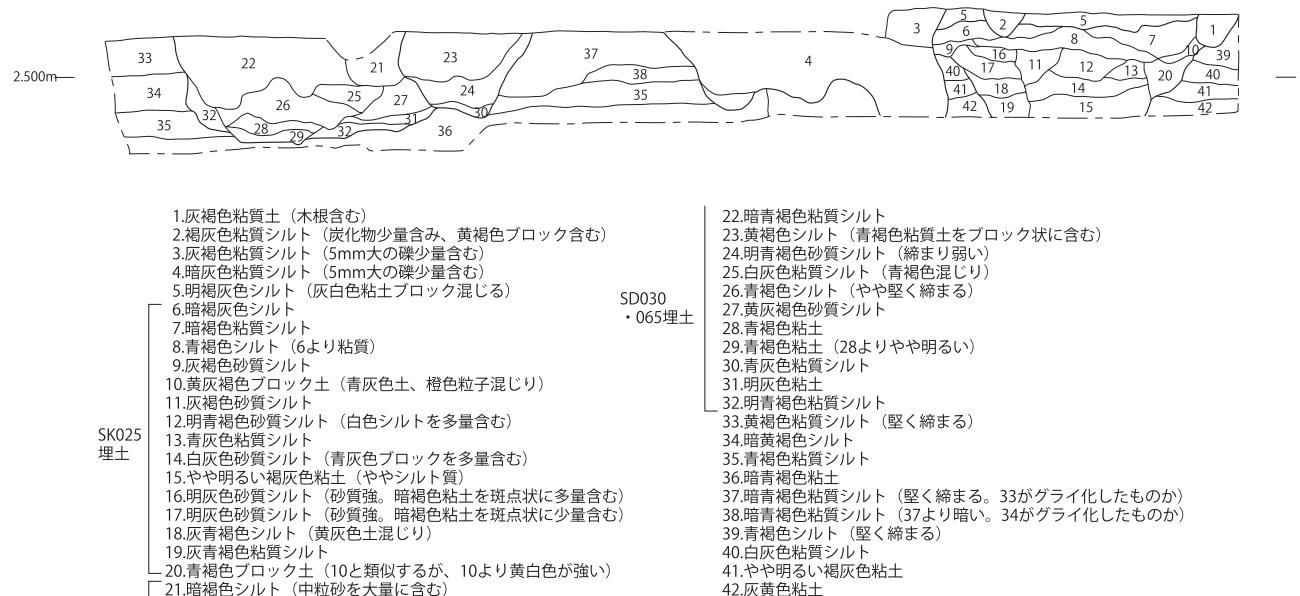
3 中世の遺構と遺物

調査区トレンチ

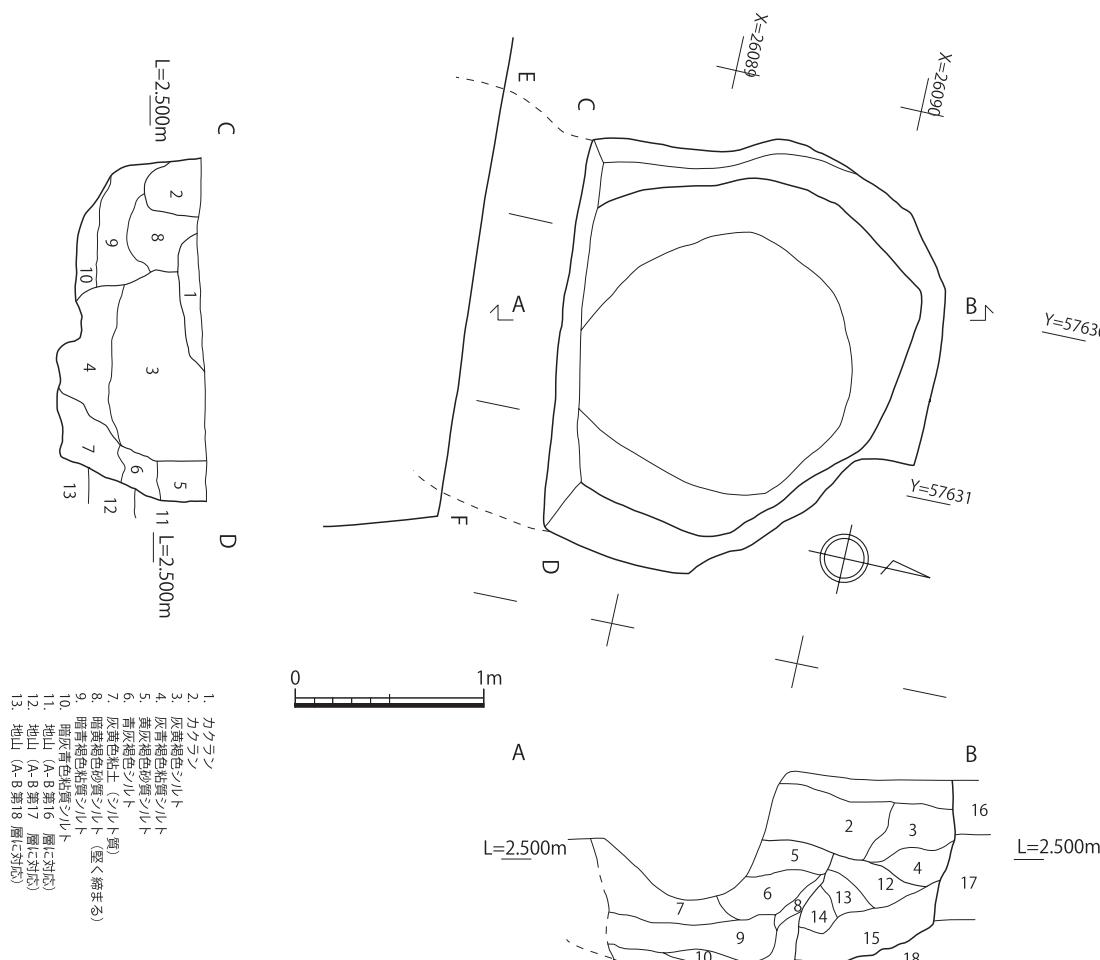
『調査の方法』で記述したとおり、近世、中世の遺構の重複状況、遺構の深さを検討するため、調査区を南北に横断する深さ約1mのトレンチを設定した。近世の包含層が部分的に遺っており、中世の遺構はこの包含層の下位に形成された事を確認した。また、後述する東西方向の溝SD030 (SD065) とSD070は、平行する二条の東西溝として検出されているがこの地点では、土層壁に溝一条しか確認されなかった。SD030(SD065) とSD070は、遺構の切りあいと距離が近すぎることから、同時並存はしないようである。従って、攪乱のために様相は不明確であるが、調査区東半部で重複しているのであろう。



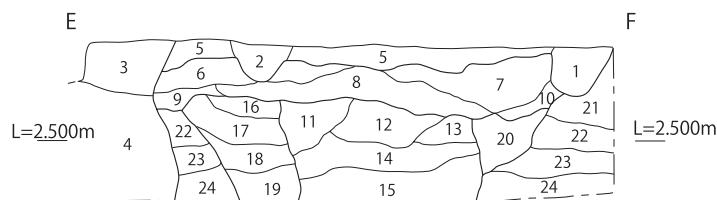
第34図 調査区第2面略測図 (S=1/300)



第35図 調査区中央サブトレンチ土層図 (S=1/60)



1. やや明るい褐色シルト
 2. 褐灰色粘質シルト (青灰褐色粘土ブロック少量含む)
 3. 灰褐色シルト
 4. 褐灰色粘質シルト (粘質強い。青灰褐色粘土ブロック含む)
 5. 明褐色砂質シルト
 6. 明青褐色砂質シルト
 7. 明褐色粘質シルト (ややシルト質)
 8. 明褐色粘質シルト (ややシルト質)
 9. 明褐色粘質シルト (ややシルト質)
 10. 明褐色粘質シルト (ややシルト質)
 11. 明灰褐色粘土
 12. 褐灰色粘質シルト (4よりシルト質)
 13. 明褐色砂質シルト
 14. 明青褐色粘質シルト (ややシルト質)
 15. 褐灰色粘質シルト (青褐色粘土ブロック含む)
 16. 黄褐色粘質シルト (ややブロック質。炭化物少量含む。整地層か。)
 17. 褐灰色粘質シルト (粘質強い)
 18. 明灰青褐色粘土



1. 灰褐色粘質土 (木根含む)
 2. 褐灰色粘質シルト (炭化物少量含み、黄褐色ブロック含む)
 3. 灰褐色粘質シルト (0.5cm大の礫少量含む)
 4. 暗灰褐色粘質シルト (0.5cm大の礫少量含む)
 5. 明褐色シルト
 6. 暗褐色粘質シルト
 7. 暗褐色粘質シルト
 8. 青褐色粘質シルト (6より粘質)
 9. 青褐色砂質シルト
 10. 黄灰褐色ブロック土 (青灰色土、橙色粒子混じり)
 11. 黄灰褐色砂質シルト (繊維弱い)
 12. 地山 (A-B第16 層に対応)
 13. 地山 (A-B第17 層に対応)
 14. 地山 (A-B第18 層に対応)
13. 青褐色粘質シルト
 14. 白灰色砂質シルト (青灰色ブロックを多量含む)
 15. やや明るい褐灰色粘土 (ややシルト質)
 16. 明灰色砂質シルト (砂質強い。暗褐色粘土を斑点状に多量に含む)
 17. 明灰色砂質シルト (砂質強い。暗褐色粘土を斑点状に少量含む)
 18. 灰青褐色シルト (黄灰色土混じり)
 19. 青青褐色粘質シルト
 20. 黄褐色ブロック土 (10と類似するが、10より黄白色が強い)
 21. 白灰色粘質シルト
 22. やや明るい青褐色粘土
 23. 灰黄色粘土

第36図 SK025平面図・土層図 (S=1/40)

SK010

SD030、SD065埋没後に形成される土坑である。性格不明であるが、出土遺物は15世紀後半から16世紀前半の所産に限定され、埋土の質も近世廃棄土坑とは著しく異なる事から、中世末から近世初頭に形成された遺構と判断できる。第37図1～6はSK010出土遺物である。第37図1は白色系土師質土器環である。2、3は在地系土師質土器環である。4は瓦質土器鍋である。5、6は竜泉窯系青磁片である。器種は椀か。

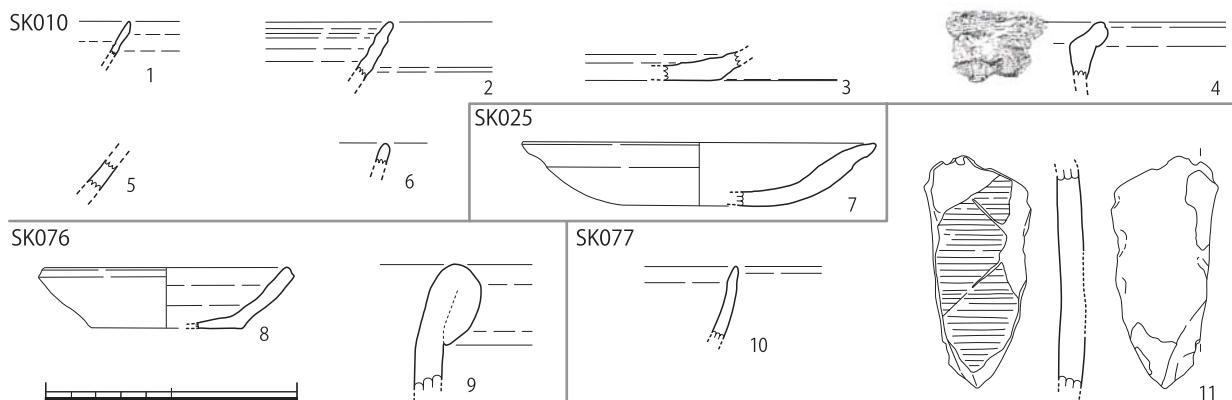
SK025（第36・37図）

調査区中央部南よりの、南北方向トレンチの東に隣接する地点で検出された大型の土坑である。西端部が調査区中央部の南北トレンチと重複しており、東西方向の詳細な規模は不明である。SK025に付随する土層が「南北トレンチ」でも当然観察されたが、SK025との位置関係を照合すると、やや齟齬が認められ西に向かって収束するはずのSK025が、むしろ大きくなっている事が確認された。SK025が平面形態の不定形な土坑である可能性もあるが、SK025とほぼ同規模の別の土坑が重複して存在する、とも考えられる。残念ながら、既に南北方向のトレンチを掘削した後であるため、検証する余地が残されていなかった。

SK025は、南北2.4m、東西2.0m以上で、深さ約1.2mの規模である。土坑底は粘土層まで到達しており、多量の湧水が認められた。また、平面形態、平面規模、深さからもSK025は井戸であった可能性がある。井戸枠の存在は確認されていないが、土層観察によると2回にわたる埋没の過程が想定される。最終埋没段階に井戸枠が掘り返され、除去された可能性がある。第37図7はSK025出土京都系土師器皿である。16世紀第3四半期頃に比定される。

SD030(SD065)(第38・39図)

調査区を東西に横断する溝である。本調査は西半部を先に実施し、埋め戻し後、東半部の調査に着手したため、同一の溝を西半部はSD030、東半部はSD065として遺構番号を付けた。当然、出土遺物もこの番号で取り上げたため、調査時の遺構番号をそのまま用いる事とする。SD030(SD065)は、調査区東端では幅が狭く約1.5～1.6mであるが、東から西へ幅が少しずつ広くなり、最大で幅約2.5mとなる断面逆台形の溝である。主軸方向は座標東から北に約6°振る。上端は中世末から近代の土坑、攪乱によって大幅な削平を被っているが、最も残存状況の良好な箇所では、標高2.8mで検出される。黄褐色の自然堆積層(SX100)で検出され、中世の人為的な堆積層の存在は確認されなかった。遺構底のレベルは標高2.0～2.4mで一定しない。また、溝の埋土は水性の堆積状況を呈さず、溝が機能した当時の流水ないし滯水を示す所見は得られなかった。溝の西端付近では牛または馬



第37図 SK010・SK025・SK076・SK077出土遺物実測図 (S=1/3)

であろう、大形草食獸の頭骨が遺構底付近から出土したが、保存状況は極めて悪く、同定作業を断念した。

SD030(065)出土遺物

第39図1、2は京都系土師器皿である。16世紀第3四半期頃に比定される。3は肥前系陶器皿である。嬉野産か。18世紀以降に比定される。大部分が上層の遺構に帰属するが、小破片がSD030から出土した。混入品と考えられる。4は平瓦、5は菊花文スタンプが施される瓦質土器擂鉢である。6は備前焼擂鉢で、交差擂り目が施されている。7は瓦質土器鍋、8、9は備前焼擂鉢、10、11は在地系土師質土器坏で、10は15世紀後葉、11は16世紀前半に比定される。SD030(SD065)の最終埋没年代は6の年代観より、16世紀第4四半期に比定できる。

SD070（第38・39図）

SD030(SD065)、SD075にほぼ隣接する東西方向の溝である。調査区東半部で検出されたが、調査区中央部から西では、この遺構の延長線上に大規模な深い攪乱があり、この地点では全く残存が確認されなかった。また、攪乱以西でも平面、垂直土層共に検出されなかった。SD070はやや湾曲するが、主軸方向が座標東から1°北に振る。西に延長すればSD030(SD065)と重なる事となる。平面検出状況及び南北トレンチの土層堆積状況からは、SD030(SD065)が最も新しい段階の溝で、SD070が最も古い段階の溝であった可能性が高い。しかし、攪乱のために重複関係は明瞭ではなく、また、これらの遺構は遺物がごく少量しか出土していないため、SD070とSD030(SD065)、SD075の時期差は、厳密には不明である。第39図12はSD070出土輸入白磁皿である。13は同瓦質土器擂鉢である。

SD075

SD030(SD065)に先行し、主軸方向をほぼ同じくする溝である。SD030(SD065)が踏襲して形成されるためか、遺構の南端しか検出されていない。傾斜角度、遺構深度を見るとSD030(SD065)とほぼ同等の規模のようである。埋土の土質は、SD030(SD065)と同じく、水性の堆積状況を示さない。

調査区東部柱穴・土坑群

近世初頭の土塁であるSX040を完掘すると、SX040に被覆された状態で柱穴、土坑がまとまって検出された。調査で検出された柱穴、土坑の配列より、SB060、SB080の2棟の比較的規模の大きな掘立柱建物跡を復原した。柱間距離、柱の配列が必ずしも一定せず、また、大規模な攪乱が隣接し、周辺の状況が復原不可能である為、建物がこのとおり建つか、確実性には欠ける。しかし、この地点で検出された遺構群の特徴として、土坑、柱穴が直径約30cm～80cmの規模であり、分布状況が稠密ではない事から、町屋建物ではなく、比較的大型の建物の存在が想起される。案として、2棟の建物が成立する余地は十分にあるものと考えられる。

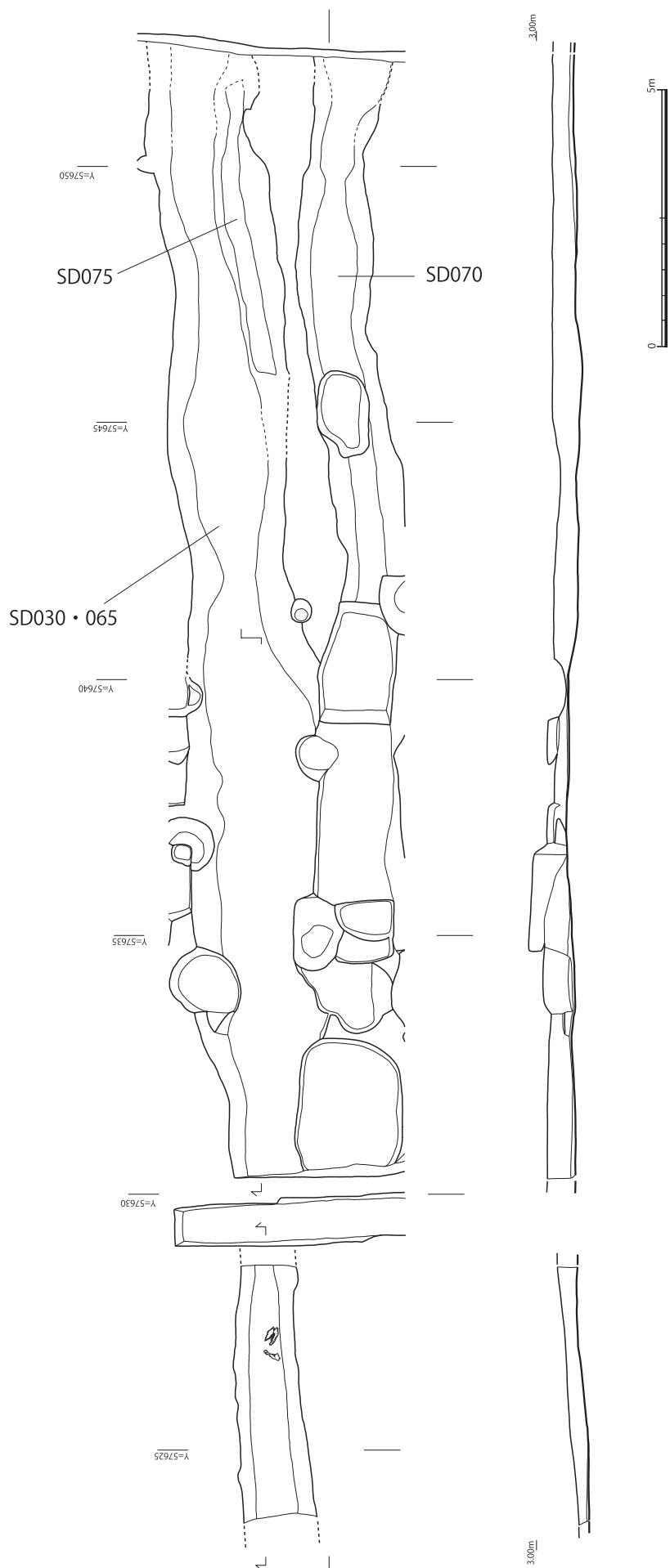
SD050

これらの遺構群の分布は調査区東端までは至らず、南北方向の溝SD050を東限とする事から、SD050がこれらの柱穴群が構成する建物群の東端を区切る溝と考えられる。出土遺物の時期もこれらの柱穴群出土遺物と矛盾しない。しかし一方で、SD050は慶長期の土塁(SF040)と主軸方向が一致することから、土塁構築に伴って形成された溝とも想定可能である。

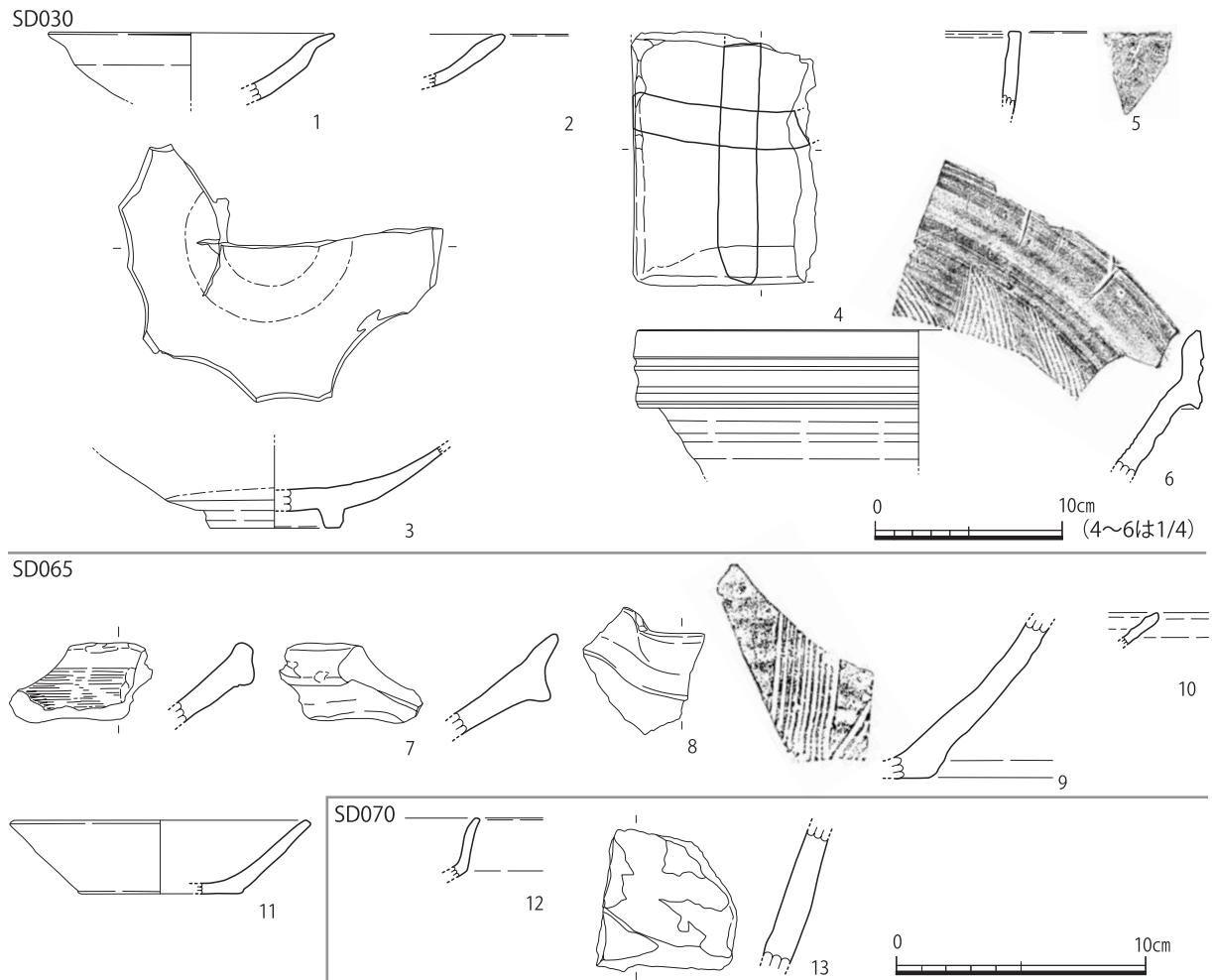
SD050出土遺物（第41図）

1は在地系土師質土器小坏、2は在地系土師器質土器口クロ目皿である。3は在地系土師質土器坏、4は竜泉窯系青磁器種不明である。5は中国製褐釉陶器で、器種は壺か。6は瓦質土器擂鉢、7は末質土器鉢である。産地は東播か。8は中国製白磁碗の高台部である。9は瓦質土器であるが、期種は不明。10は瀬戸美濃産の陶器瓶か。SB060（第42図）

東西棟の総柱掘立柱建物跡である。座標北から東に4°振る。柱間の距離は一定せず、最短距離で2.05m、最長距離で2.6mである。建物を構成する柱穴の規模は、最大のSB060aで全長70cm、最小のSB060eで全長



第38図 SD030 (065) • SD070 • SD075平面図 (S=1/120)



第39図 SD030・065・070出土遺物実測図 (S=1/3)

約40cmである。柱痕は2箇所の柱穴で検出されている。

SK076・077

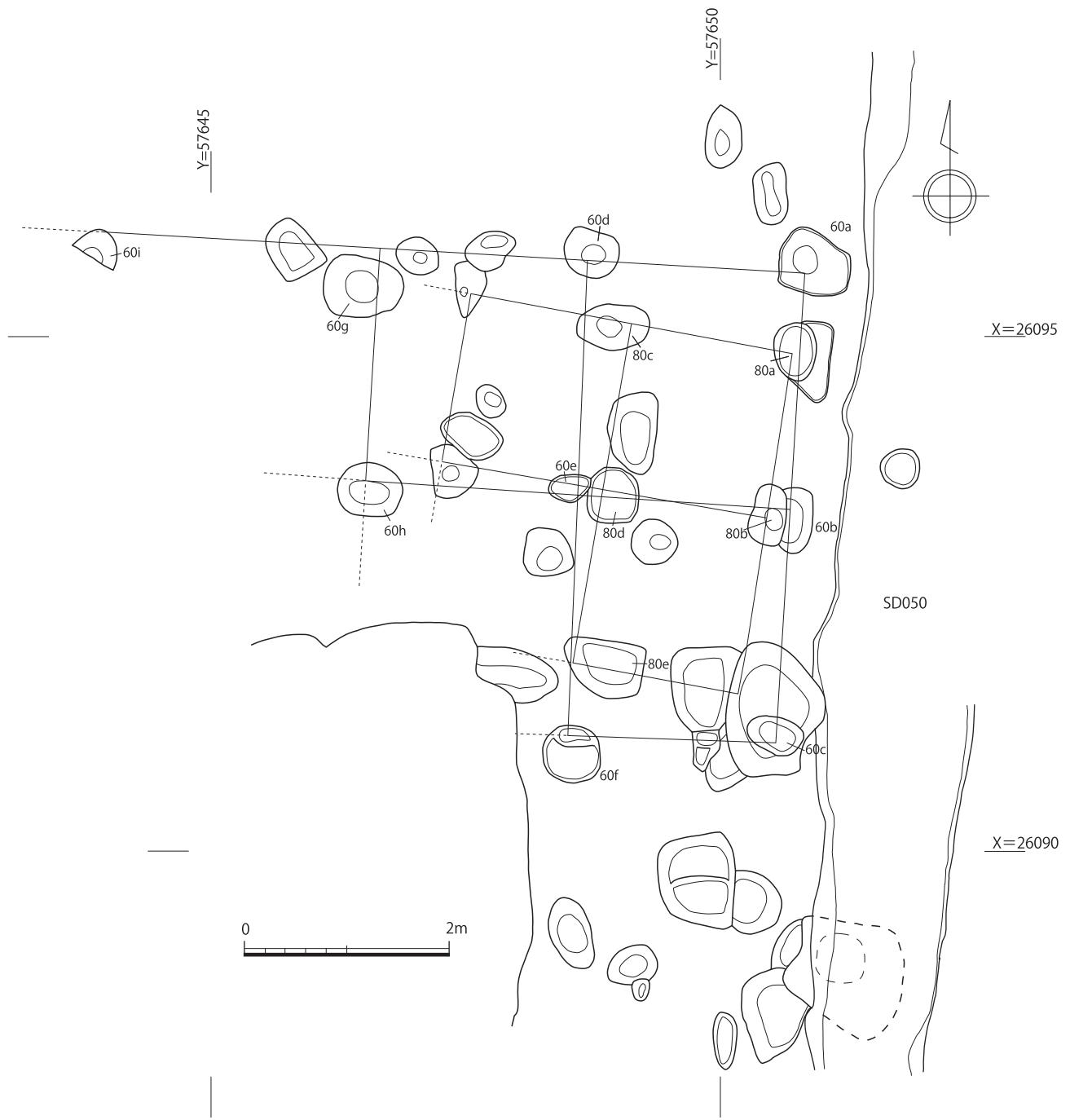
土坑群、柱穴群からは遺物がほとんど出土しないが、SK076、077からは遺物が出土している。第37図8、9はSK076出土遺物である。8は在地系土師質土器皿、9は備前甕口縁部である。10、11はSK077出土遺物である。10は京都系土師器皿、11は瓦質土器器種不明品である。遺構の前後関係より、土坑群の時期はSD030埋没後の16世紀第4四半期頃に比定されるため、これらの遺物はかきあげと考えられる。

SB080 (第43図)

方向不明の総柱掘立柱建物である。柱穴の規模は、最大のSB080eで全長80cm、最小のSB080dで全長40cmである。柱痕はSB080bでのみ検出された。柱痕の規模は幅15cm、深さ40cmである。

SK090 (第45図)

調査区東端やや北よりの地点で検出された大型の土坑である。調査区以東に遺構が延長する。調査区東隣にブロック塀が存在する事から、安全確保を優先し完掘には至らなかった。南北約2.2m、東西1.8m以上で、深さ約1.1mの規模である。土坑底は粘土層まで到達しており、調査期間中にも湧水が認められた。また、平面形態、平面規模、深さから、SK090は井戸であった可能性がある。井戸枠の存在は確認されていないが、土層観察によると2回以上にわたる埋没の過程が想定される。最終埋没段階に井戸枠が掘り返され、除去された可能性がある。



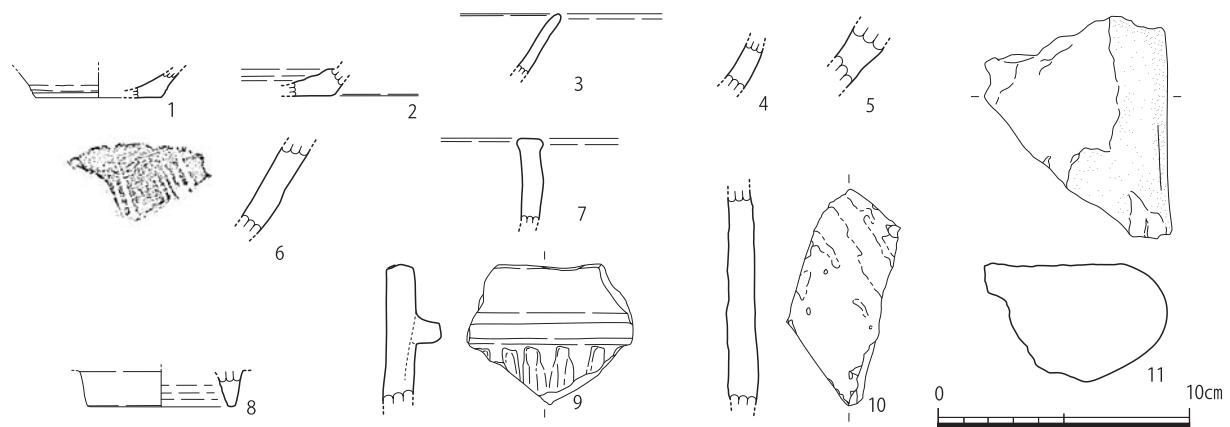
第40図 調査区東部掘立柱建物及び柱穴群平面図 (S=1/60)

SK090出土遺物（第46図）

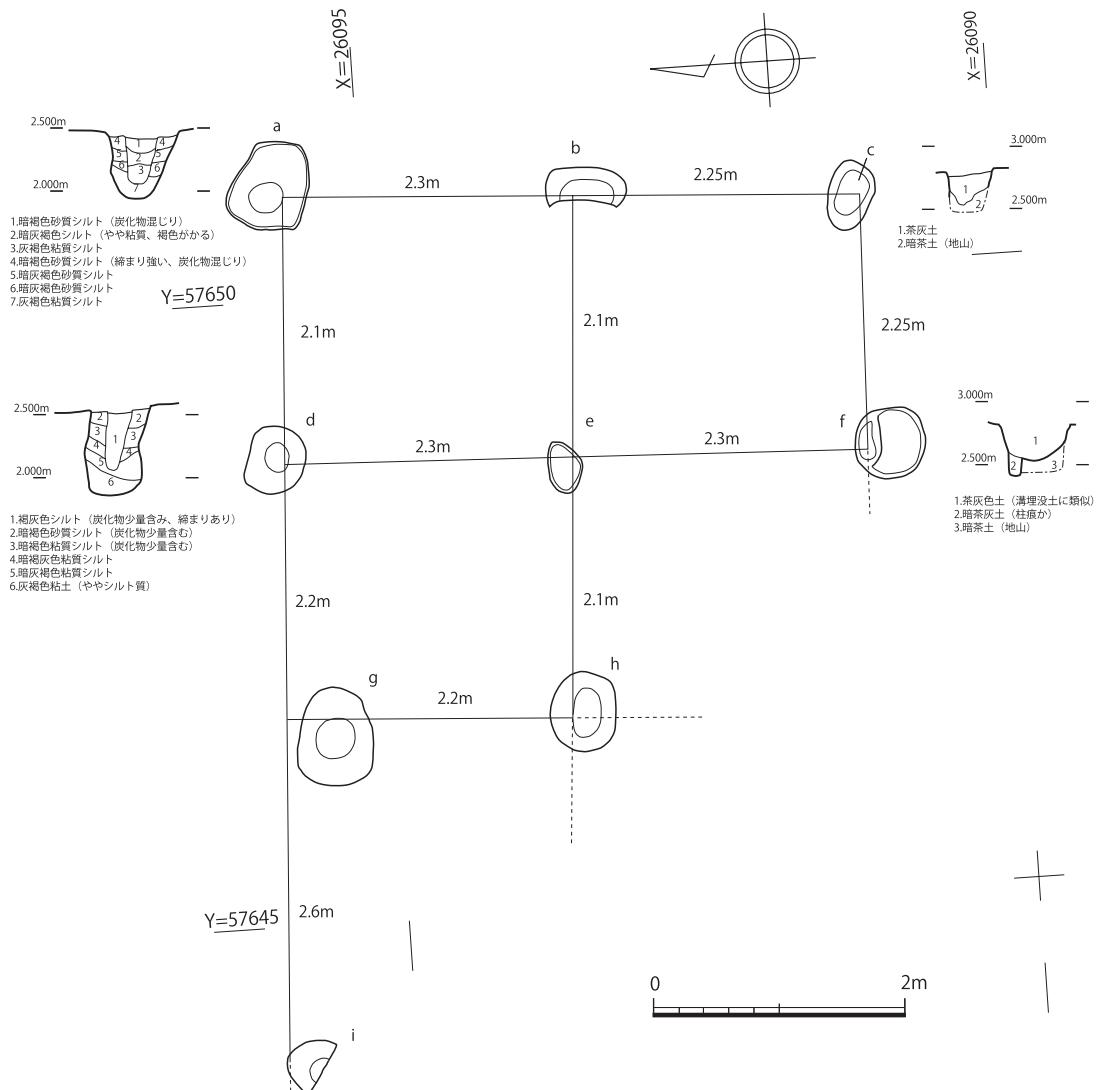
第46図1は鉄製の釘か。2は中国製白磁片、3は青花碗、4は平瓦、5は褐釉陶器甕、6は中世6期に比定される備前焼甕、7は備前焼交差擂り目擂鉢、8は軽石製不明石製品である。最終埋没年代は16世紀第4四半期頃に位置づけられる。

ST095（第47図）

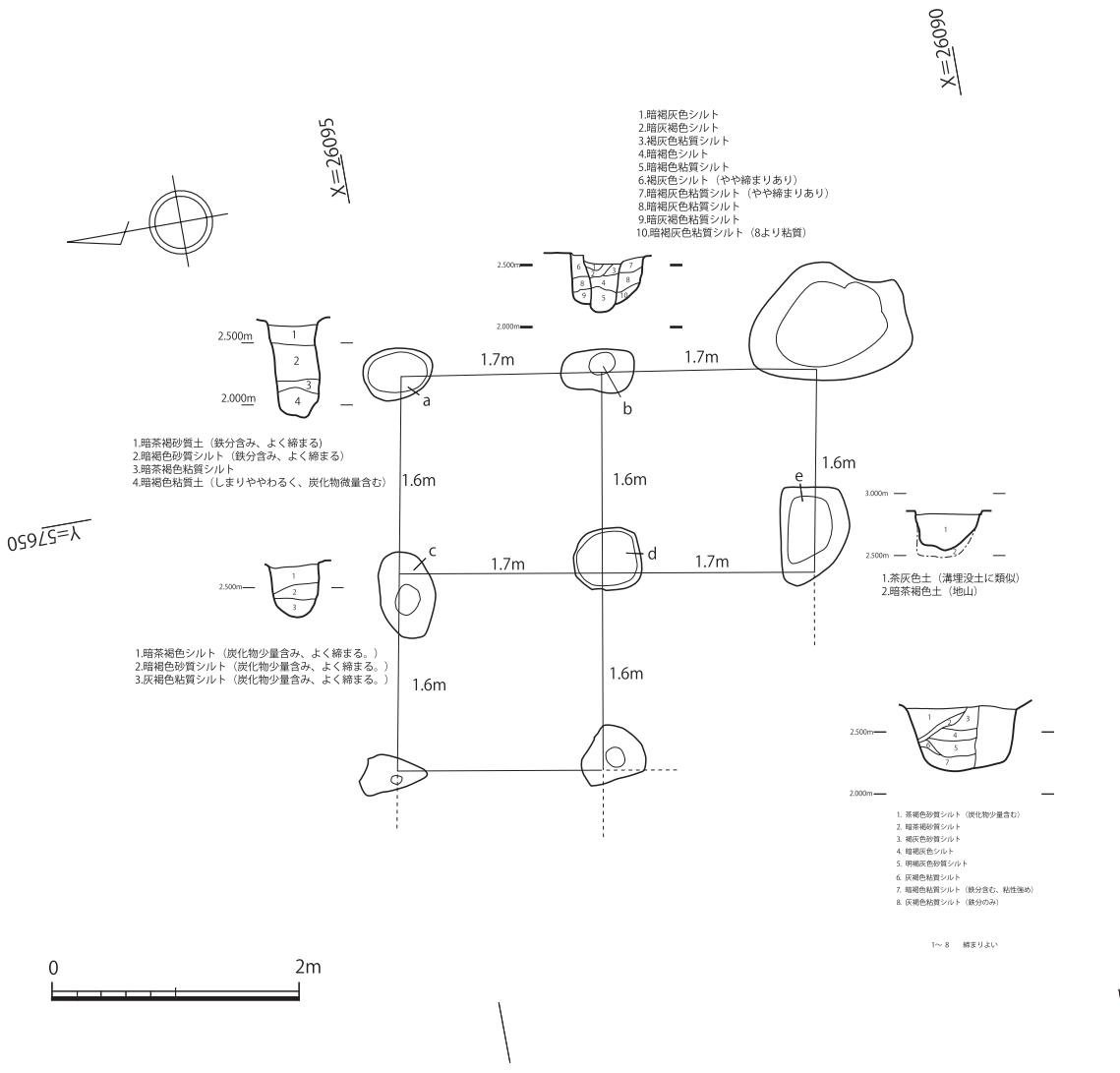
SD075と重複し、SD075の埋没後に形成される土坑墓である。平面検出時に存在を確認できず、SD075掘削中に人骨が姿を現したために、発見される事となった。詳細な規模等は不明であるが、検出時の平面プランよ



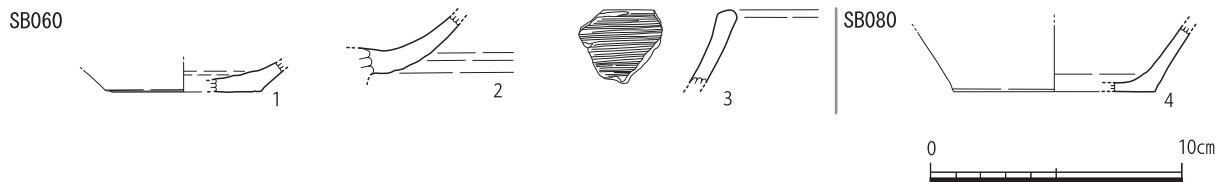
第41図 SD050出土遺物実測図 (S=1/3)



第42図 SB060平面図・柱穴土層図 (S=1/60)

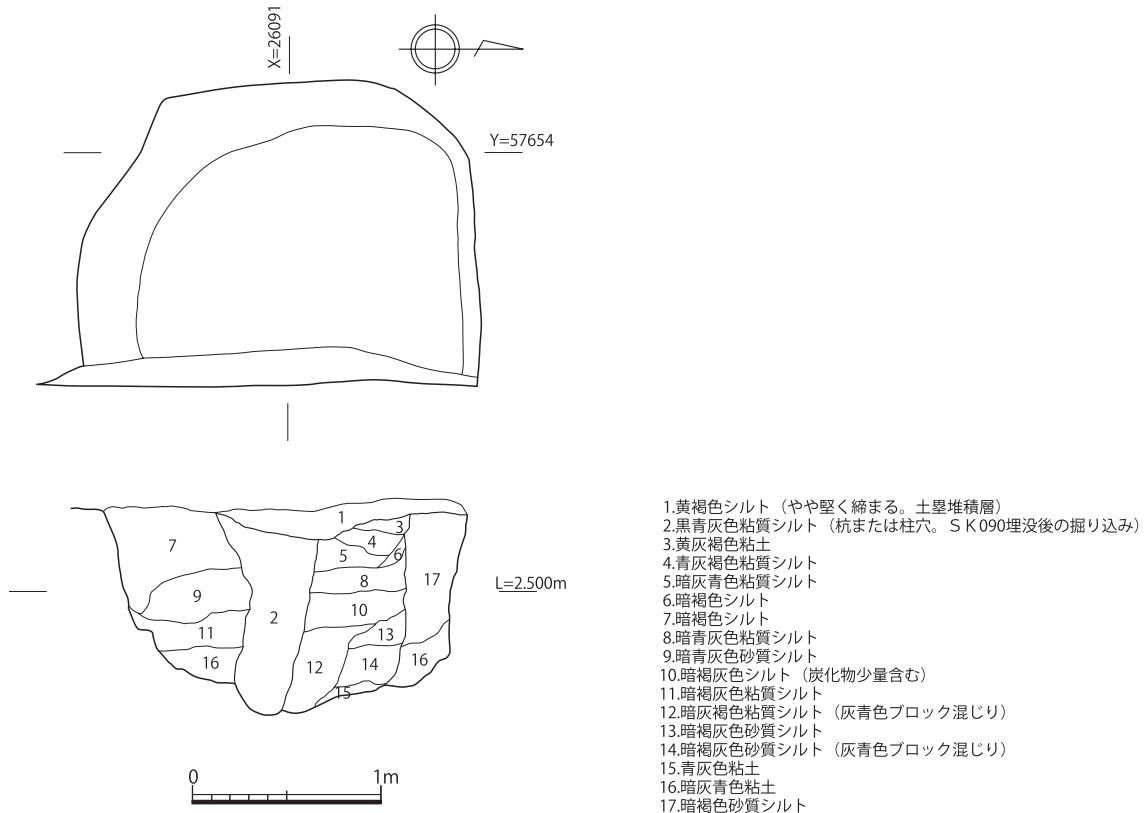


第43図 SB080平面図・柱穴土層図 (S=1/60)



第44図 SB060・SB080出土遺物実測図

り、長軸1.62m以上、短軸1.05m以上、深さ約0.80mの、東西方向を主軸とする楕円形ないし隅丸方形の土坑と推測される。平面検出時に人骨近辺と周囲で埋土の土質が異なる事が注目された。土質の差異から平面プランを検証すると、人骨近辺に、土坑と主軸がほぼ同じである長方形のプランが検出された。この長方形の東南隅から鉄釘が出土しており、釘に付着する木質が直行する二方向に確認される。従って、方形組合式の木製座棺が存在したようである。人骨は風化による劣化が著しく、微細な骨はほとんど土と同化していたが、四肢及び頭骨は検出されている。埋葬姿勢は、右膝が立ち膝状態で検出されたが左膝は倒れており、上半身も同じ方向に伏せ



第45図 SK090平面・土層図 (S=1/40)

たような状態で検出されている。頭部が足先とほとんど同じ標高で出土しており、本来の埋葬姿勢としては不自然である。おそらく当初の埋葬姿勢は座葬であったものが、腐朽による木棺の崩壊によって被葬者から見て左側に崩れたのであろう。

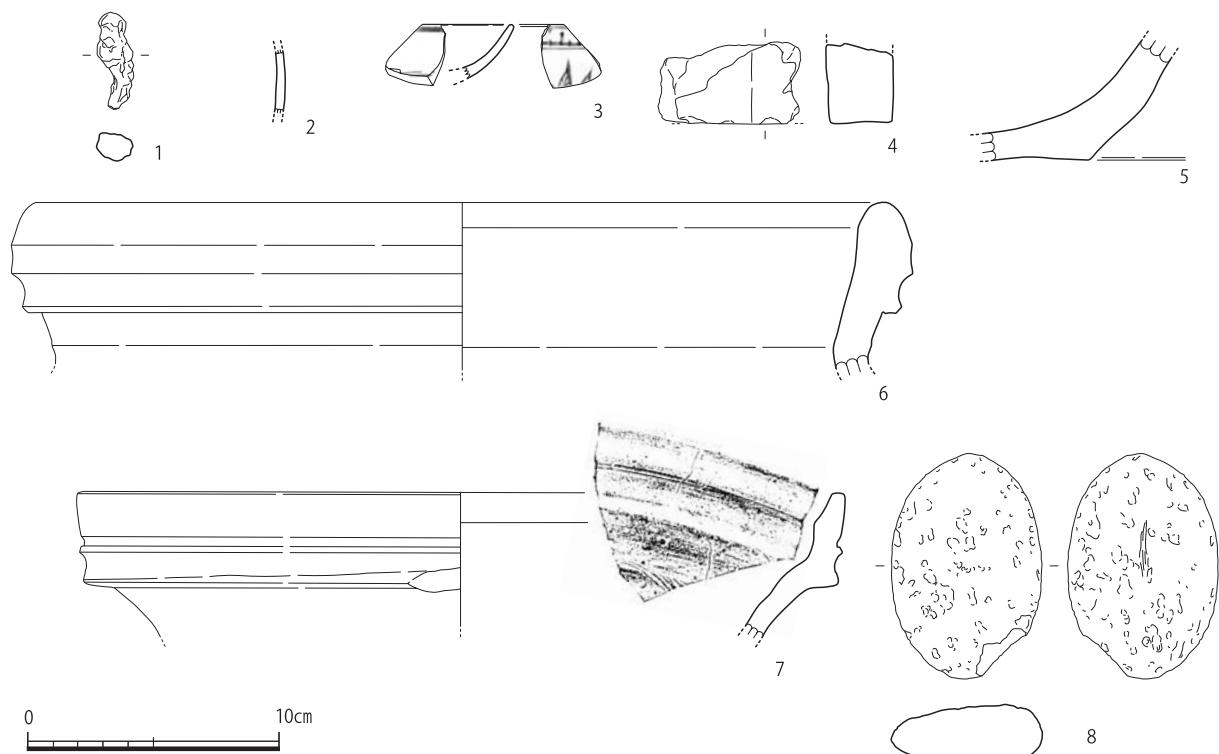
人骨とり上げ後、土坑底までの掘り下げ時に青花椀片が出土した。ST095に伴う副葬品であるかは不明だが、少なくとも、ST095の帰属時期の上限を示す遺物として評価できる。

ST095出土遺物（第48図）

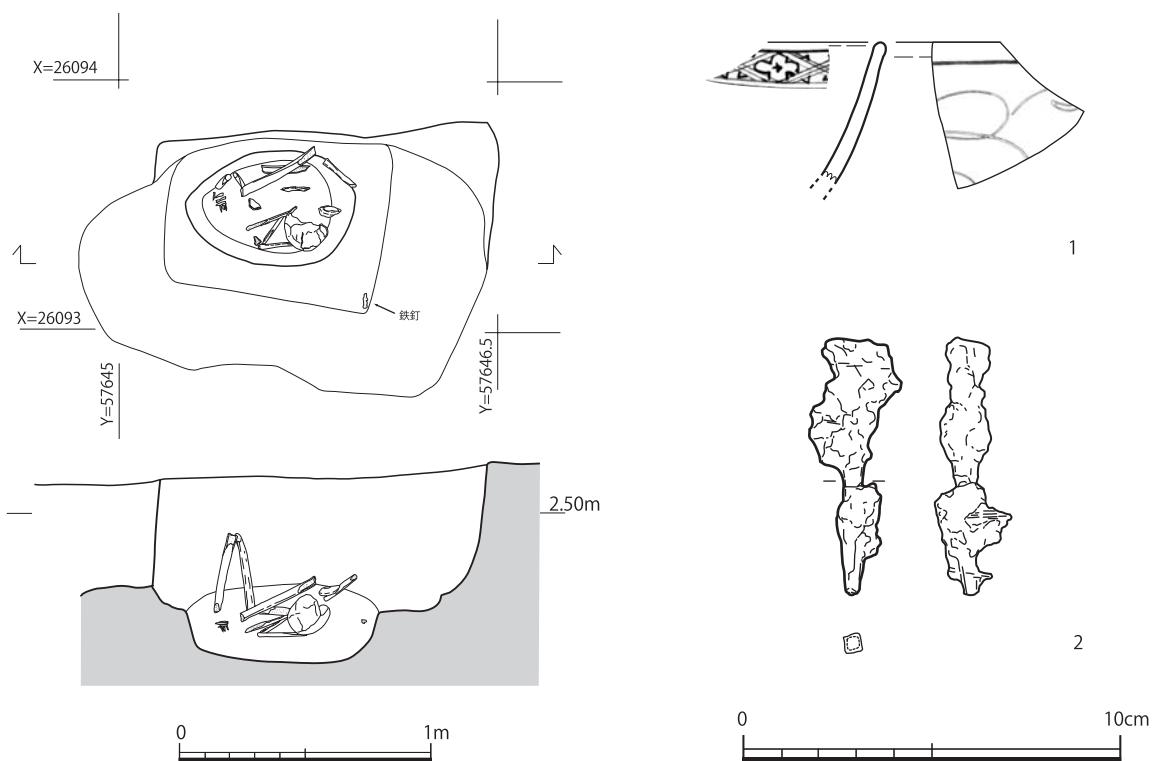
第48図1は青花椀である。小野分類E ZAか。内面に四方櫛文、外面にヘラで文様が描かれる。暗火文か。2は鉄釘である。前長6.8cm、幅2.4cm、厚さ0.6cm、重量11.5gを測る。木棺に起因するものと考えられる木質が付着する。

町81次調査区出土銅錢（第49図）

1はSX001出土寛永通宝である。2はSX009出土寛永通宝である。古寛永か。3、4はSF040出土銅錢である。3は判読不能だが、4は○(武)通宝か。5はSD050出土銅錢であるが、判読不能。6は○武○宝と読める。1368年初鋸の明錢、洪武通宝か。

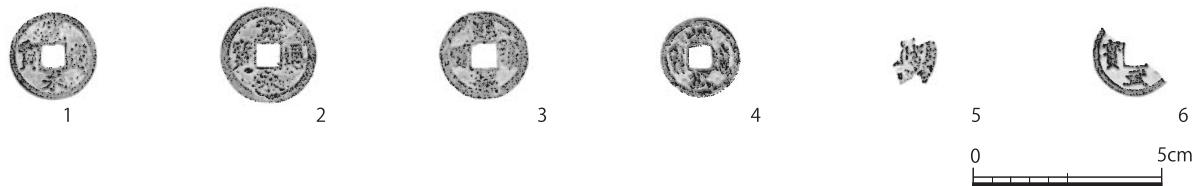


第46図 SK090出土遺物実測図 (S=1/3)

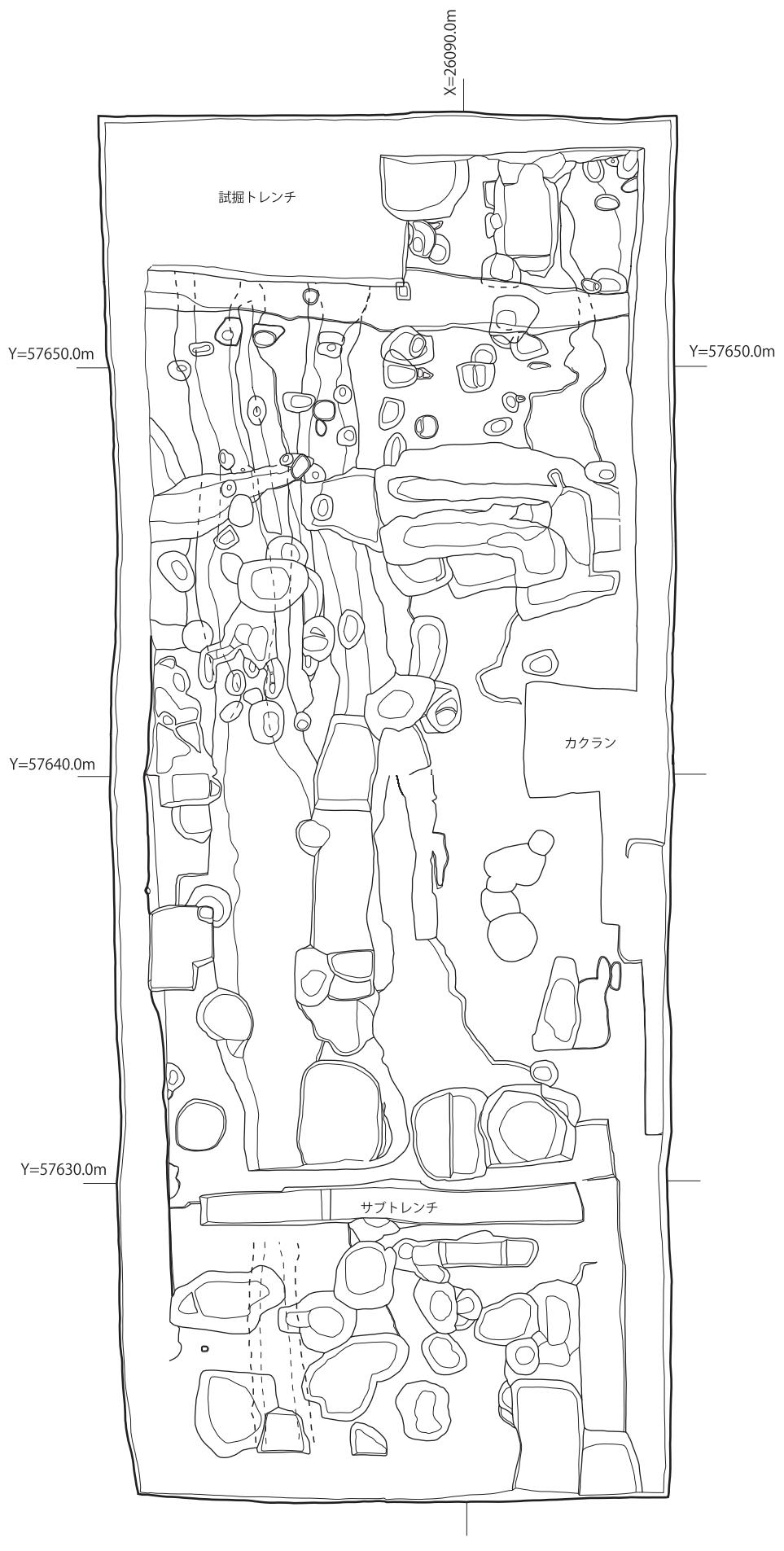


第47図 ST095平面・見通し図 (S=1/30)

第48図 ST095出土遺物実測図 (S=1/2)



第49図 町81次調査区出土銅錢 (S=1/2)



第50図 調査区完掘状況図 (S=1/150)

表4 第37・39・41・44・46・48・49図掲載遺物観察表

図版番号	S番号	R番号	種類	器種	釉色調(外面色調)	生地色調(内面色調)	器高	口径	体部	底径	備考
37-01	SK010	R003	土師質土器	皿	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	-	-	-	-	白色系
37-02	SK010	R001	土師質土器	皿	5YR6/8橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	在地系ロクロ目土師器皿
37-03	SK010	R002	土師質土器	皿	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6にぶい橙	-	-	-	-	在地系 底部糸切り
37-04	SK010	R004	瓦質土器	鍋か	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	
37-05	SK010	R005	青磁	碗か	-	-	-	-	-	-	竜泉窯系。中世
37-06	SK010	R006	青磁	碗か	-	-	-	-	-	-	竜泉窯系。中世
37-07	SK025	R001	京都系土師器	皿	(外)10YR7/4にぶい黄橙	(内)10YR7/4にぶい黄橙	2.5	(14.0)	-	(6.0)	
37-08	SK076	R001	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR6/4にぶい橙	2.4	(9.6)	-	(6.0)	在地系土師器。ロクロ目
37-09	SK076	R002	備前	壺	(外)7.5YR4/2灰褐	(内)2.5Y4/1黄灰	(5.0)	-	-	-	中世6期
37-10	SK077	R001	陶器	天目碗	(釉)10YR4/3にぶい黄橙	(生)10Y6/1灰	残(2.9)	-	-	-	中国産
37-11	SK077	R002	瓦質土器	壺か	(外)5YR7/4にぶい橙	(内)5YR7/4にぶい橙	(9.2)	-	-	-	中世
39-01	SD030	R006	京都系土師器	皿	(外)10YR6/4にぶい黄橙	(内)10YR6/4にぶい黄橙	(2.7)	(11.2)	-	-	
39-02	SD030	R005	京都系土師器	皿	(外)10YR7/4にぶい黄橙	(内)10YR7/4にぶい黄橙	(2.1)	-	-	-	
39-03	SD030	R003	陶器	皿	(釉)7.5GY5/1緑灰	(生)10YR8/2灰白	(3.3)	-	-	(5.2)	見込み部蛇目はぎ 混入か
39-04	SD030	R001	瓦	平瓦	-	-	長(13.5)	幅(9.7)	厚2.0	-	
39-05	SD030	R002	瓦質土器	火鉢か	(外)7.5Y6/1灰	(内)7.5Y7/1灰白	(4.4)	-	-	-	外:菊花スタンプ文
39-06	SD030	R004	備前	擂鉢	(外)7.5YR4/2灰褐	(内)7.5YR4/2灰褐	(7.7)	(29.8)	-	-	交差すり目
39-07	SD065	R005	瓦質土器	鍋	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR6/4にぶい橙	(3.2)	-	-	-	
39-08	SD065	R004	備前	擂鉢か	(外)2.5YR4/2灰赤	(内)7.5YR4/1褐灰	(4.1)	-	-	-	中世
39-09	SD065	R003	備前	擂鉢	(外)7.5YR5/2灰赤	(内)7.5YR5/2灰褐	(6.0)	-	-	-	中世
39-10	SD065	R002	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/6橙	(内)7.5YR6/6橙	(1.3)	-	-	-	在地系 ロクロ目
39-11	SD065	R001	土師質土器	壺	(外)7.5YR7/4にぶい橙	(内)7.5YR7/4にぶい橙	残(3.0)	(11.7)	-	-	在地系 糸切り
39-12	SD070	R001	白磁	皿	(釉)10Y8/1灰白	(生)N8/1灰白	1.8	-	-	-	
39-13	SD070	R002	瓦質土器	擂鉢	(外)5Y6/2灰オーリーブ	(生・内)5YR6/6橙	残(5.7)	-	-	-	
41-01	SD050	R002	土師質土器	小壺	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR7/4にぶい橙	(1.0)	-	-	(5.0)	糸切り
41-02	SD050	R003	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(生・内)7.5YR6/4にぶい橙	残(1.1)	-	-	-	在地系ロクロ目土師器皿
41-03	SD050	R004	土師質土器	壺	(外)7.5YR6/4にぶい橙	(内)7.5YR6/4にぶい橙	(2.4)	-	-	-	在地系
41-04	SD050	R006	青磁	不明	(釉)5Y5/2灰オーリーブ	(生)2.5YR7/2灰黄	残(1.8)	-	-	-	竜泉窯系。中世
41-05	SD050	R007	焼締陶器	壺か	(外)2.5YR3/2暗赤褐	(生)2.5R3/2暗赤褐(内)2.5Y6/3にぶい橙	残(2.5)	-	-	-	中国産褐釉陶器
41-06	SD050	R001	瓦質土器	擂鉢	(外)2.5Y6/2灰黄	(内)5Y7/1灰白	(3.9)	-	-	-	
41-07	SD050	R010	須恵質土器	鉢	(外)5Y5/1灰	(内)5Y5/1灰	(3.3)	-	-	-	東播か
41-08	SD050	R005	白磁	碗	(外)7.5Y7/1灰白	(内)10Y8/1灰白	(1.5)	-	-	(5.9)	高台部のみ
41-09	SD050	R011	瓦質土器	不明	(外)2.5Y7/2灰黄	(内)2.5Y7/2灰黄	(5.6)	-	-	-	
41-10	SD050	R009	陶器	瓶か	(釉)10Y7/2灰白	(生)N8/0灰白	残(8.6)	-	-	-	
41-11	SD050	R008	石製品	不明	-	-	長(8.8)	幅(7.3)	厚4.7	重36.6g	砥石と同じ石材
44-01	SB060g	R002	土師質土器	皿	(外)7.5YR6/6橙	(内)7.5YR6/6橙	(1.2)	-	-	(6.0)	在地系ロクロ目皿
44-02	SB060h	R003	陶器	鉢か	(釉)5Y5/2灰オーリーブ	(生)2.5Y7/2灰黄	残(2.4)	-	-	-	藁灰釉 ロクロ成形
44-03	SB060a	R001	瓦質土器	鉢	(外)10YR8/3浅黄橙	(内)10YR8/3浅黄橙	残(3.0)	-	-	-	
44-04	SB080	R001	土師質土器	壺	(外)5YR6/6橙	(内)5YR6/6橙	(2.6)	-	-	(8.0)	
46-01	SK090	R008	鉄製品	鉄釘か	-	-	長3.9	幅1.4	厚1.1	重4.8g	
46-02	SK090	R006	白磁	不明	(釉)2.5G Y8/1灰白	(生)5Y8/1灰白	(2.4)	-	-	-	中国産白磁片
46-03	SK090	R007	染付	皿	-	-	-	-	-	-	外:芭蕉葉文 内:界線
46-04	SK090	R004	瓦	平瓦	-	-	長(5.7)	幅(3.3)	厚2.7	重-g	
46-05	SK090	R003	陶器	壺	(外)5YR4/3にぶい赤褐	(生)5YR5/3にぶい赤褐	(4.8)	-	-	-	褐釉陶器
46-06	SK090	R001	備前	壺	(外)2.5Y5/1 黄灰	(内)10YR4/2灰黄褐	(6.6)	(34.0)	-	-	中世6期
46-07	SK090	R002	備前	擂鉢	(外)2.5YR5/4にぶい赤褐	(内)2.5YR5/6明赤褐	(5.8)	(30.0)	-	-	交差すり目か
46-08	SK090	R005	石製品	軽石	-	-	長9.0	幅6.0	厚2.3	重73.1g	小判型
48-01	ST095	R001	染付	碗	-	-	-	-	-	-	明代。小野分類E7A。内:四方禪文 外:ヘラ描(暗火文か)
48-02	ST095	R002	鉄製品	鉄釘	-	-	長6.8	幅2.4	厚0.6	重11.5g	
49-01	SK001	R005	銅製品	銅錢	-	-	直径2.3	-	厚0.1	重2.71g	寛永通宝
49-02	SX009	R036	銅製品	銅錢	-	-	直径2.5	-	厚0.1	重2.88g	寛永通宝(古か)
49-03	SF040	R013	銅製品	銅錢	-	-	直径2.4	-	厚0.1	重2.02g	判読不能
49-04	SF040	R012	銅製品	銅錢	-	-	直径2.1	-	厚0.1	重1.42g	○(武)通宝
49-05	SD050	R012	銅製品	銅錢	-	-	残長(1.2)	-	厚0.1	重0.41g	判読不能
49-06	表土	R008	銅製品	銅錢	-	-	残長(1.9)	-	厚0.1	重1.51g	○武○宝。1368年初鋤の明銭、洪武通宝か。

第4章 まとめ

19世紀半ば～近代

調査区西半分の大部分を占める廃棄土坑群、トイレ遺構は19世紀半ば（1820～1860年代）に形成される。主に、町道の北に検出される。町道と重複する廃棄土坑群は、出土遺物からはこの年代より若干古くなるが、同時期である可能性も考慮されうる。近世の廃棄土坑は調査区東半部には及んでいないようで、東半部に所在する廃棄土坑の大部分は近代に比定される。

18世紀後半～19世紀前葉

明治時代の地籍図に記される地割り線上に積土堆積、石組遺構が検出される時期である。地籍図が踏襲する町道が少なくともこの段階まで存在したものと考えられる。町道関連遺構以外にこの段階に帰属する可能性がある遺構は、東西町道推定ラインの直ぐ北に位置する井戸一基のみである。建物に伴う近世の遺構は皆無である。

17世紀初頭

慶長期の近世府内城下町整備による、曲輪（土壘）の形成。慶長期に形成される土壘と見られるSX040は出土遺物の年代観からも、17世紀初頭段階に比定される。府内城・城下町跡第12次調査区では、この時期の整地層が一面を覆い、近世城下町形成に係る大規模な造成工事を示しているが、本調査区では整地層は検出されず、この時期に帰属する遺構は、曲輪（土壘）の基部であるSX040以外は検出されておらず、遺物もほとんど出土していない。少なくとも土壘の近辺は空閑地であったか、と考えられる。

16世紀末～17世紀初頭

土壘の形成によって、または土壘造営とほぼ同時期に破却される事となる、掘立柱建物が重複して2棟検出される。柱穴、柱穴の可能性のある規模の土坑が調査区東部北半部に集中的に分布しており、一般的な中世城下町の町家域とは様相が明らかに異なる。戦国期の舟入にはほぼ面する立地との関係性を考慮すると、荷揚げ場に類する施設が存在したかもしれないし、また、舟入の向かいに「白杵悪六屋敷」が位置する事から、本調査地点も屋敷地であったかもしれない。これらの掘立柱建物の一部が慶長期に造営される土壘（SX040）に被覆され、当該期の陶器鉢が掘立柱建物の柱穴から出土することから、建物群は17世紀初頭に廃絶されるようである。また、掘立柱建物は東西方向の溝（SD030（SD065）・SD070）の埋没後に建てられるが、SD030（SD065）から交差掘り目を持つ備前掘鉢が出土する事から、掘立柱建物群は16世紀第4四半期をその上限とする。すなわち極めて短期間しか存続しないにも拘らずこの地点に複数回、建物が建て替えられた事になる。また、17世紀初頭に調査地点は大きく場の機能を転換する事となるが、この時期は正に中世から近世への時代の大きな転換期であり、本調査区の性格が大きく変転するきっかけは近世城下町の形成と考えてよいだろう。掘立柱建物は土壘の形成に伴って廃絶された可能性が高い。

16世紀第3四半期～第4四半期

土坑墓（ST095）の造営される時期である。ST095からは、青花碗破片（小野分類E群7A類）が出土している。あくまで破片資料であり、この土坑墓に本来副葬品として帰属したものかは不明確であるが、土坑墓の上限は16世紀第3四半期と推定される。また下限については、掘立柱建物の柱穴に切られる事から16世紀第4四半期段階である。ST095は東西方向溝SD075の埋没後に造成されるが、SD030は埋没段階が16世紀第4四半

期であることから、確実に共存している。井戸状遺構SX025、090もこの時期に機能した可能性がある。

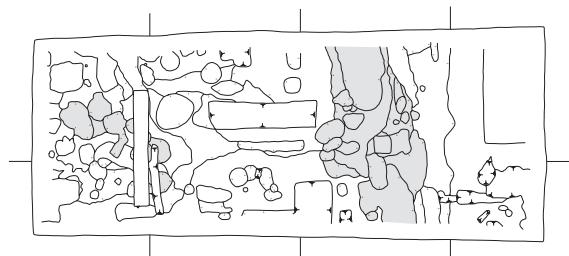
16世紀前半～第3四半期頃

SD075が開口していた時期である。SD075の下限はST095の帰属年代より、16世紀第3四半期となる。SD030とSD075の厳密な並行関係は不明確であるが、少なくともSD075がSD030より先に機能を停止して埋没する事、そして、主軸が平行でなく、両遺構が交差している事は確実である。溝の機能性に力点を置いて検証してみると、間隔が最大で約1.4mしかなく、また、主軸方向が平行でない事から、溝が並存しても機能的には難がある、と見なしうる。従って、SD075廃絶後、SD030がほぼ同じ機能を持つ溝として掘削された、とするのが最も蓋然性の高い推定であろう。この時期にはSX025、SX090が並存していた可能性がある。

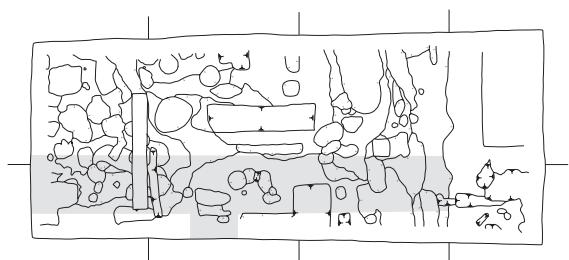
以上が本調査区における遺構の変遷状況であるが、16世紀第3四半期から17世紀初頭にかけて大きな変化がある事が分かる。

16世紀第3四半期から第4四半期までは東西溝が存在するのみで、ほとんど空閑地に近い。溝は区画溝であろうか、遺構の分布状況からは、町屋域ではなく、例えるなら屋敷地の裏手のような場所と推測される。

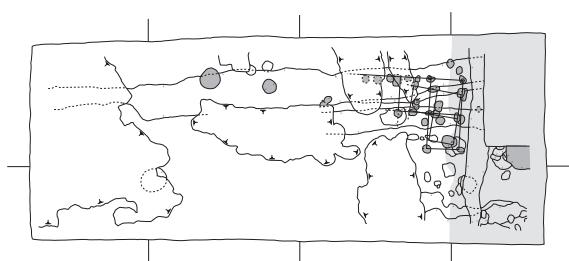
16世紀第4四半期から17世紀初頭にかけて、東西方向の溝は完全に埋め立てられ、掘立柱建物が少なくとも二回にわたって建て替えられる。大きな変化であるが、その歴史的背景として、三案を挙げておく。第一は、大友義統の家督相続後に実施された都市整備の一環である。中世大友府内町跡の既往の調査では、この時期の大きな都市景観の変化が判明している。大友氏館の東に面する第2南北街路では、万寿寺の堀が埋め立てられて第2南北街路が整備され、街路を中心とする都市形成がなされている。本調査区におけるこの時期の大きな変化もこの現象に呼応する可能性がある。第二は、島津氏侵攻後の府内町復興段階における造作である。退潮著しい大友氏は、1586年に本拠地までの島津氏の侵攻を許し、中世の府内町は壊滅的な打撃を受ける。大友氏館周辺部ではこの変遷が極めて明確に看取されるのであるが、本調査地点では大規模な火災を想起させる火災処理土坑、焼土等は全く検出されていない。中世府内町の北西端に位置する事から被害を免れたのであろうか。第三は、大友氏除国後、慶長十二年に近世の府内城下町が完成するまでの期間の建造物と捉える案である。大友吉統の除国後、早川氏、福原氏が入部しており、近世府内城下町が竹中氏によって最終的に整備されるまで約15年間の期間が有る。この間に建造された可能性も十分にある。大友義統の家督相続から島津氏の侵攻、そして府内町の復興、さらには大友氏の豊後除国はほぼ全て16世紀第4四半期の範疇に収まる出来事であり、考古学的事象としては、島津侵攻に伴う大規模火災とその後の都市整備を表す遺構変遷でしか、現状では評価できない。たとえ、良好な遺物の出土状況に恵まれたとしても、これらの事象が遺物の型式学的時期区分の一段階の範疇にほぼ収まってしまうからである。上述のとおり、本調査区では、遺構から島津侵攻以前・以降を判断する材料がなく、複数の解釈が成り立ち得るのである。とはいってもこの状態が「中世府内町」の最終段階を示す事は確実であろう。中世大友府内町では舟入に面していたこの地点は、近世府内町では城下町の南東隅に位置する事となり、場の機能が根本的に変化した事を示す遺構変遷と言える。本調査区は中世、近世両府内町のいずれにおいても周縁に位置し、調査面積も限られているが、遺構の変遷は、中世から近世への時代の変転を表徴しているのである。



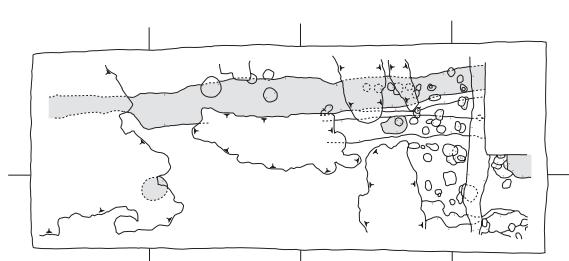
- 19世紀半ば～近代
調査区西半分の大部分を占める廃棄土坑群



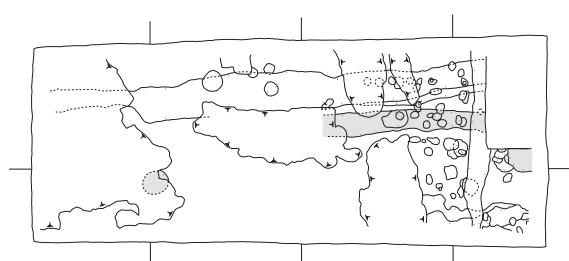
- 18世紀後半～19世紀前葉
町道が少なくともこの段階まで存在。



- 16世紀末～17世紀初頭
掘立柱建物が重複して2棟検出される。
近世府内城下町の土塁が同地点に。



- 16世紀第3四半期～第4四半期
土坑墓 (ST095) の造営される時期。
SD030が共存している。SK025、090も共存か。



- 16世紀前半～第3四半期頃
SD075が開口していた時期。
SK025、090も共存か。

0 10m

第51図 調査区遺構変遷図

写 真 図 版



写真6 調査区西半部検出状況（西より）



写真7 調査区西半部完掘状況（東より）



写真8 SF040 検出状況（北西より・第30図参照）



写真9 SF040東西土層②（西より・第32図参照）



写真10 SK025 完掘状況（北東より）



写真11 SK025 東西土層（南より・第36図参照）



写真12 SK025 南北土層（東より・第36図参照）



写真13 ST095人骨検出状況(西より・第47図参照)



写真14 SD030 検出状況（西より・第38図参照）



写真15 調査区中央部サブトレンチ南北壁
(北西より・第35図参照)



写真16 SD030土層（西より）



写真17 調査区東部柱穴群・SB060・SB080検出状況（北より・第40図参照）



写真18 SB060a 半裁土層（西より・第42図参照）



写真19 SB060b半裁土層（西より・第42図参照）



写真20 SB080b半裁土層（西より・第43図参照）



写真21 SB080e半裁土層（西より・第43図参照）



写真22 SX003 第5図9



写真23 SX009 第7図13



写真24 SX009 第7図14



写真25 SX009 第7図21



写真26 SX009 第8図1・10



写真27 SX009 第8図22



写真28 SX009 第8図8



写真29 SX009 第9図1



写真30 SX014 第9図19



写真31 SK016 第10図12



写真32 SK016 第10図18



写真33 SK016 第11図4



写真34 SK016 第11図5



写真35 SK016 第11図14(表)



写真36 SK016 第11図14(裏)



写真37 SK016 第11図17



写真38 SK016 第12図1



写真39 SK016 第12図2



写真40 SK016 第12図3



写真41 SK016 第12図8



写真42 SK016 第12図9



写真43 SK016 第12図10



写真44 SK016 第12図11



写真45 SK034 第14図3・SK039第15図18



写真46 SK034 第14図7



写真47 SX035 第15図1・2



写真48 SX035 第15図4



写真49 SK037 第15図15



写真50 SX039 第16図4



写真51 SX044 第17図2



写真52 SX046 第18図16・25



写真53 SX046 第18図22



写真54 SX046 第19図1



写真55 SX046 第19図7



写真56 SX046 第19図8



写真57 SX046 第19図9(側面)



写真58 SX046 第19図9(正面)



写真59 SX046 第19図15



写真60 SX046 第20図1



写真61 SX046 第20図1(底面)



写真62 SX052 第21図7



写真63 SX052 第21図7



写真64 SX073 第23図5



写真65 SX078 第23図11・22



写真66 SX015 第26図6



写真67 表土 第24図1・4



写真68 SF040 第33図1~4・7・8



写真69 SF040 第33図10



写真70 SK025 第37図7



写真71 SD030 第39図1・2・6



写真72 SD050 第41図9・10



写真73 SB060 第44図1~3



写真74 SK090 第46図7・8



写真75 ST095 第48図1~2

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおともふない14						
書名	大友府内14						
副書名	中世大友府内町跡第81次調査報告書 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第90集						
編著者名	古川 匠						
編集機関	大分市教育委員会						
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111						
発行年月日	西暦2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調査原因
ちゅうせいおおともふないまちあと 中世大友府内町跡第81次	大分市長浜町	44201 322052	33° 31' 03"	131° 17' 06"	2007.06.11~2007.08.22	397m ²	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友府内町跡第81次	集落	中世・近世	土塁跡・掘立柱建物跡・溝・井戸状遺構	近世陶磁器・瓦質土器・青花碗・京都系土師器・在地系土師質土器	

要 約	調査地点は中世大友府内町跡と近世府内城・城下町跡の重複する地点に位置する。近世の遺構として、町屋に付随する廃棄土坑、井戸等が検出された。また、地割線に沿って、道路状遺構および道路付帯施設が発見された。近世城下町の町道跡と推定される。また、近世初頭の遺構として、近世城下町を囲繞した慶長期の土塁基底部が検出された。
	中世では、中世末期から近世初頭に比定される掘立柱建物が発見された。16世紀代の土坑墓、井戸状遺構、東西方向の溝が検出された。

大友府内 14

中世大友府内町跡第81次調査報告書
集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号